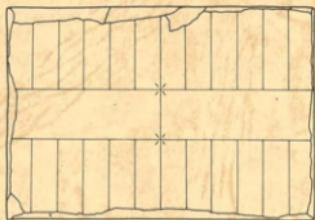


みずはしかねひろ なかばんば  
**富山市水橋金広・中馬場遺跡**  
**発掘調査報告書**

—県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）—

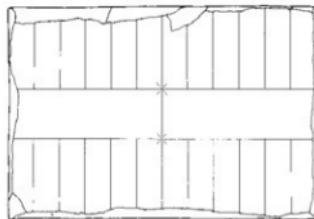


2001年

富山市教育委員会

みずはしかねひろ なかばんば  
**富山市水橋金広・中馬場遺跡**  
**発掘調査報告書**

—県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）—



2001年

富山市教育委員会

## 序

富山市は、北は日本海に面し、東に3,000m級の立山連峰を仰ぎ、綿豊かな呉羽山丘陵を市の西部に擁する自然環境に恵まれた都市であります。このような土地に先人が残した遺跡は、郷土富山の歴史を知るためのかけがえのない遺産であります。これを保護し、未来へ継承していくことは現代に生きる私達の努めと考えております。

現在、富山市内には約600か所に及ぶ遺跡があります。本委員会では各種開発事業に伴って失われていくそれらについて事前発掘調査を実施し、遺跡の記録保存に努めているところです。

今回発掘調査を行った水橋金広・中馬場遺跡には、若王子塚・宮塚という2基の古墳が所在し、若王子塚が県内最大級の円墳であることが判明しました。

また、中世には武家の居館が営まれ、安土桃山時代の遺構からこれまで絵画資料でしか知られていなかった厚板状の双六盤が全国で初めて遺跡から出土しました。

さらには、江戸時代前期の道路側溝から金属製の「ヤス」が出土し、その近くの井戸の底からヤスなどの線刻画を描いた木摺臼が出土するなど、白岩川流域の歴史を解明し、また越中国の中世から近世にかけての社会情勢の変化を物語る貴重な発見が相次ぎました。

このような調査成果をまとめた本報告書が、本市文化財保護行政についての理解と認識を深め、さらには水橋地区の歴史を探る学術研究の資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査にご理解とご協力をいただきました地元上条地区的皆様や富山県農林水産部、文化庁、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、(有)山武考古学研究所をはじめ、調査中や整理期間中に様々なご指導を賜りました研究者や関係諸機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成13年11月

富山市教育委員会  
教育長 大島哲夫



平成11年度調査区（北から）



双六盤



平成12年度調査区と若王子塚古墳（南から）



木摺臼転用水溜



金属製ヤス

## 例　　言

1. 本書は、富山市水橋中馬場地内に所在する水橋金広・中馬場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、富山県が事業主体となる県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴うもので、富山県富山農地林務事務所の委託を受けて、平成11年度から12年度にかけて富山市教育委員会が実施した。平成11年度については、富山市教育委員会の監理のもとに有限会社 山武考古学研究所（所長 平岡和夫）に委託して実施した。
3. 現地調査期間・面積  

平成11年度：平成11年10月15日～平成13年3月21日	1,200m <sup>2</sup>
平成12年度：平成12年4月26日～平成12年7月31日	920m <sup>2</sup>
- 山上品整理・報告書作成期間  

平成12年度：平成12年9月18日～平成13年3月28日
平成13年度：平成13年7月13日～平成13年11月30日
4. 担当者 平成11年度：有限会社 山武考古学研究所 調査研究室 係長 湯原勝美  
平成12年度：富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 学芸員 鹿島昌也
5. 調査事務局は、富山市教育委員会 埋蔵文化財センター（所長 藤田富士夫）に置き、文化庁、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。
6. 現地発掘調査及び出土品整理に際し、赤羽正春、伊井武、大塚初重、大橋康二、岡本淳一郎、奥村宏、小野正敏、鹿熊久三、岸田徹、岸本雅敏、北川康介、京田良志、久々忠義、小松外二、小境卓治、斎藤降、酒井英一、酒井英男、坂詰秀一、坂本育男、汐見一夫、塙田明弘、関清、高橋浩二、高橋真実、千葉孝之、上井修、友澤明、中村亮仁、浪川幹夫、西井龍儀、西木豊弘、橋本正春、林亮一、平川南、平口哲夫、古澤陽子、保科齊彦、前川要、前田英雄、麻柄一志、麻柄幸子、松澤那々子、宮田進一、森隆、山口辰一、吉岡康暢、四柳嘉章の各氏（五十音順・敬称略）並びに国立歴史民俗博物館、富山大学人文学部・理学部、九州陶磁文化館、鎌倉市教育委員会、上条用水土地改良区、富山市立三成中学校、富山市上条地区センターから指導・助言・協力をいただいた。記して謝意を表します。
7. 自然科学的分析調査はパリノサーヴェイ株式会社、株式会社吉田生物研究所、有限会社武蔵野文化財修復研究所に委託し、また富山大学人文学部・理学部の協力を得て若王子塚古墳およびその周辺の電気探査を行い、その成果を本書第IV章に掲載した。
8. 遺物写真撮影は、湯原及び鹿島が行い、カラー図版の木摺図は堤勝雄氏が撮影（アサヒグラフ掲載）し写真の提供をいただいた。
9. 遺構記号は、溝跡：SD、土坑：SK、井戸：SE、柱穴：P、道路：SF、堅穴状遺構：SXとする。遺構記号は、遺構検出時に付記したものを使用している。
10. 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
11. 本書の執筆は、III章 i) 平成11年度調査概要を湯原が行い、その他を鹿島が行った。また、附編・1を藤田富士夫が執筆し、附編・2は遊戯史学会理事の増川宏一氏から玉稿を賜った。なお、用語表記（例「杯」「坏」など）については、各執筆者の意思を尊重し統一しなかった。
12. 本遺跡名「水橋金広・中馬場遺跡」は、平成12年4月の『富山市遺跡地図』改定に伴い、旧遺跡名「H S - 0 7 遺跡」から現在の名称に変更したものである。

## I 遺跡の位置と環境

水橋金広・中馬場遺跡は、富山市の東北部に位置し、遺跡の北側には隣接して国道8号線が東西に延びる。北陸本線JR水橋駅から南東へ約3km、富山地方鉄道本線越中舟橋駅から北へ約2kmの地点にある。

地形的には、富山平野の東部を流れる常願寺川の下流部に形成された大扇状地の扇端部に位置し、同河川の東側をほぼ平行して流れる白岩川の右岸に立地している。海岸部からの距離は直線で約4.5kmを測る。大辻山に水源を発する白岩川は、明治38年に改修工事が行われる以前は蛇行して流れ、現在みえる河岸段丘やその後背湿地などの微地形を形成した。下流にあたる沖積平野部では、豊富な水資源を利用して早くから水田耕作が営まれ、河川を利用した水運、漁撈活動も盛んに行われていた。

遺跡の周囲には、白岩川本支流の両岸および上市川の河岸段丘間に形成された微高地上に、縄文時代から近世に至る数多くの遺跡が所在する。本遺跡周辺の標高は7m前後を測る。

旧石器時代や縄文時代早～中期にかけては、常願寺川右岸河岸段丘に位置する吉峰遺跡、天林北遺跡、白岩岱ノ上遺跡、白岩尾掛遺跡（立山町）など県内でも著名な遺跡が立地する（立山町教委1981）。

縄文時代後～晩期には、本遺跡東部地区（旧称水橋金広遺跡）に、建物跡を伴った集落が形成され、石冠・ヒスイ垂玉などが出土している（富山市教委1997）。

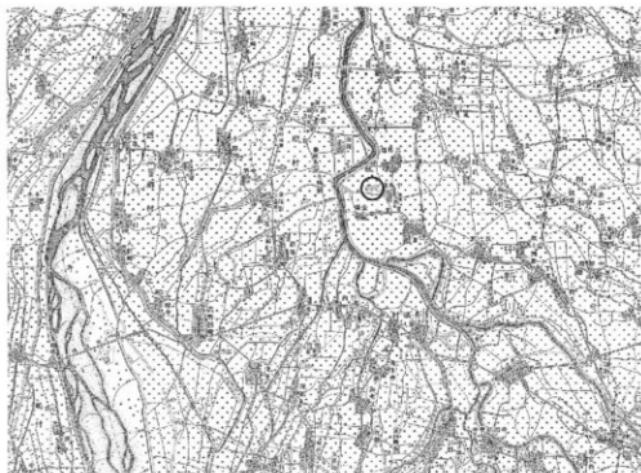
弥生時代、特に後期になると白岩川と上市川流域には江上A遺跡（上市町）や魚躬遺跡（滑川市）、浦田遺跡（舟橋村）、金尾遺跡、清水堂南遺跡（富山市）など約30ほどの遺跡が所在し、それらのいくつかはまとめて村を形成し、それらを統括する「新川のクニ」というべき政治社会が形成されつつあった（久々2001）とされる。江上A遺跡や清水堂南遺跡では、調査により集落内で玉作りを行っていたことが判明した。

古墳時代になると、白岩川本流域及びその支流の柄津川や寺田川流域には、県内の平野部では数少ない古墳群を形成し「白岩川流域古墳群」と称され（立山町教委1994）ている。白岩川支流大岩川右岸の丘陵尾根上には前期古墳とされる柿沢古墳群が所在する（上市町教委・富山大学考古学研究室1993）。

白岩川中流左岸の段丘端には藤塚古墳（円墳、立山町）が所在し、平野部に至ると稚児塚古墳（県史跡、葺石・段築・周溝・周庭帯を有する円墳、立山町）や塚越古墳（円墳、立山町）、



第1図 水橋金広・中馬場遺跡の位置（1/10万 上が北）



第2図 陸地測量部側図（明治43年）○が調査地



- 1 水橋金広・中馬場（調文後～秦、古須、古代、中～近世）
- 2 若王三丁堀古墳（古須頭、中世）
- 3 宮坂吉備（古墳）
- 4 清水塚古墳（古墳）
- 5 清水塚Ⅱ（中世）
- 6 清水塚Ⅲ（中世）
- 7 清水塚Ⅳ（中世）
- 8 清水塚南（古墳、中世、近世）
- 9 金尾（調文後～秦、共生～古須）
- 10 田代・佐野竹（調文～近世）
- 11 水橋北郭跡（平成、中世、近世）
- 12 水橋石舟（秦良、平安、中世）
- 13 水橋西寺（平成、秦良、平安）
- 14 水橋石舟跡（平成）
- 15 水橋寺元寺（共生後～古須前、秦良～近世）
- 16 小出城跡（調文後、古墳、秦良、中世）
- 17 小山（調文後、秦良、平安、中世）
- 18 水橋御手筋（古墳、秦良、平安、中世）
- 19 水橋御手筋・辻・堂（調文後～秦、共生、古墳前、後、白瀬～近世）
- 20 京橋御手筋・平（調文後～秦、共生、古墳前、秦良～近世）
- 21 新開東（共生、古須前、秦良～中世）
- 22 新源（調文後、共生、古須、古墳、秦良～近世）
- 23 金尾跡（中世）
- 24 斋場跡（調文後、古須、中世）
- 25 金尾断面（共生～古須、秦良～中世）
- 26 水橋二ノ井（秦良～近世）
- 27 水橋入部（平成～古墳、中世）
- 28 竹内船跡（中世）
- 29 游里（共生、古代、近世）
- 30 竹内大河原古墳（古墳）
- 31 佐佐寺跡（小山）
- 32 小平（調文、共生、古須、古代～近世）
- 33 駒越上跡（秦良～近世）
- 34 駒越下跡（古墳）
- 35 所田（調文～近世）
- 36 所田西区（共生～近世）
- 37 所田馬場（古代～近世）
- 38 沼田角田（調文～近世）
- 39 稲生宿古道（古跡）
- 40 龍尾（中世）
- 41 政士・朝比（共生、中世）
- 42 政士・朝前（中世）
- 43 江上A（共生中～後）
- 44 游波（共生）
- 45 中小畠（共生中～後）
- 46 正印跡（共生中～古墳）
- 47 若宮台（調文～近世）
- 48 利田猪社（調文～近世）
- 49 辻（調文～近世）
- 50 ニッヅ（調文、古代～中世）

第3図 水橋金広・中馬場遺跡と周辺の遺跡（1：50,000 上が北）

竹内天神堂古墳（前方後方墳、舟橋村）、清水堂大塚古墳（周溝を有する円墳、富山市）、宮塚古墳（方墳、富山市）、若王子塚古墳が現存する。また、白岩川左岸の水橋金尾新地内に孤山古墳がかつてあった。同地内には塚ノ越、四ッ塚という字名があり、白岩川右岸の水橋平塚はかつて所在した大小の塚を平らにしたことからその名が付いたと言われている（水橋町郷上史1966）。このことから推察すると、墳丘は現存しないものの水田下に堤溝（濠）のみを残す埋没古墳が今後確認される可能性がある。

奈良～平安時代には、古代官衙跡（『延喜式』に記載された越中八駅の一つ「水橋駅」）と推定されている水橋荒町・辻ヶ堂遺跡が常願寺川河口近くに形成される。また、近年遺跡南方の立山町浦田から舟橋村にかけての町村境周辺を「東大寺領大藪莊」比定地とする研究報告があり（藤田1998）、その南に位置する辻遺跡（立山町）からは「射水」の文字が書かれた「里正」木簡が出土し、律令期の重要施設の存在が想定され関連が注目される。本遺跡や周辺からは当該期の遺物は若干出土するものの、遺構の検出を見ることがなく、耕地としての土地利用が想定される。遺跡北西約900mの水橋高堂地内に国分尼寺と称される寺院が所在する。水橋町郷上史には「高堂村国分寺廃寺跡」と紹介され、射水郡の国分村の国分寺廃絶後、名前のみこの地に称せているとあるが、注目すべき地でもある。

中世に至ると、白岩川支流細川左岸に平城の仏生寺城（舟橋村）が築かれる。城主は越中五人将の一人細川曾十郎で、室町幕府管領の細川一族とみられ、室町期に当地に所領を得て城郭を築き居城した。細川氏は松倉城（魚津市）城主の椎名氏に属していたとみられる。仏生寺城北方の竹内館（舟橋村）も仏生寺城の山城と考えられている。今回の調査地である中馬場の地名の由来は、細川曾十郎が白岩川の対岸のこの地に馬場をつくったことによるとされている。また、その家臣の金広某が開墾を行ったことから金広の由来となったと伝えられている。なお、近年の発掘調査で仏生寺城は15世紀～16世紀前半に最も機能していたことが判明し、その後は廃城となったようである。（舟橋村教委2001）

さらに、天正牛間には水橋小山地内に小出城が築かれている。城主は初め武部兵庫であったが、佐々成政に落城され、その後は新庄城（富山市）とともに織田信長方が新川郡（魚津松倉城）の上杉景勝に対する最前線基地となる城である。織川・上杉両軍の境界線上に位置していた城であり、戦国期の舞台となった地でもある。羽柴秀吉が呂羽山の白鳥城に陣を置き佐々成政が降伏した後は、新川郡一郡のみの支配となり、成政が肥後に転封後は前田利家の支配となる。17世紀初めには加賀・越中・能登120万石の加賀藩となり、常願寺川以東の当地を含めて新川郡は加賀藩領域となつた。

一方古代後半から、立山町を中心とした山地縁辺部では須恵器生産（上末窯）が行われ（富山大学人文学部考古学研究室1989）、中世末～近世には越中瀬戸焼の生産が隆盛する。本遺跡の上流部に位置する清水堂地区のは場整備事業に先立つ調査に際して越中瀬戸焼が高い割合で出土している。陸路や白岩川を利用した水運にて窯場から製品を運び消費地へと供給されていたものと想定される。

## II 調査の経緯

平成7年に平成8年度の新規採用事業として、上条南部地区の農道整備計画が富山県富山農地林務事務所（以後「県農地」と略する）より立案された。平成8年に測量設計が行われ、5～6年の工期で国道415号線から国道8号線を交差し、は場整備事業が行われた清水堂地区をとおり県道に繋がる道路である。は場整備事業に際し、地元要望としてあがってきたものである。農道の計画規模は、全幅12.2m、総延長1,330mで既設の農道部はそれを拡幅し、それ以外の箇所は新設するものである。

この事業計画に対して富山市教育委員会（以後「市教委」と略する）は富山県農林水産部農村環境課、耕地課、県農地、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山市農村整備課、地元自治会代表者と協議を行った。農道計画法線上には、周知の埋蔵文化財包蔵地として国道8号線

以北では、白岩川河川敷の金尾遺跡、水橋北馬場遺跡が所在し、国道8号線以南には県内の平野部に築かれる古墳群では数少ない白岩川流域古墳群を形成する若王子塚古墳、宮塚古墳が東西に並存し、その周辺には水橋金広・中馬場遺跡が所在している。その古墳間を抜け、水橋金広・中馬場遺跡を南北に縦断する農道計画が設計されていた為、試掘調査前の段階で、古墳の周溝などが残存する可能性が高く、文化財保護サイドとしては、設計ルートの変更を提案していた所である。

平成9年度の協議で工事計画範囲の用地買収が進んでいることから、設計計画ルートの変更が不可能との回答があり、当初計画どおり事業者が着手されることとなった。

まず、計画法線上の水橋金広地内に神明社が所在し、その神社西隣の代替地と古墳が並存する南側の水田部（既存農道の拡幅部）の試掘調査を平成10年3月に実施した。この区間ににはほぼ全域に中世～近世前期を主体とする遺構、遺物の所在を確認した。

この試掘結果を受け、平成10年8月神社代替地85m<sup>2</sup>を対象に発掘調査を実施した。その結果、溝、溝、穴などの遺構を検出し、珠洲、瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里、青磁、青白磁等の遺物が出土し、中世後半～近世前期を主体とする集落の一部であることを確認した（市教委1999）。

平成11年5月に、国道8号線と2基の古墳についての試掘調査を実施した。その結果、若王子塚古墳の周溝と考えられる溝を検出し、他に中世～近世にかけての溝、上坑等を多数検出した。国道8号線に最も近い水田部は、南側の地区に比べ1段下がる地形をしており、この落ち込みが遺跡の北限の可能性が想定される。

さらに同年9月には、水橋金広の神明社南側及び国道8号線北側の金尾遺跡について試掘調査を実施した。その結果金尾遺跡の工事計画範囲内については遺跡の所在が確認されなかった。一方で神明社南側の地区については遺跡の広がりを確認した。

平成11年度の試掘結果を受けて、まず平成11年10月から古墳北側の水橋金広・中馬場遺跡北端部に当たる地区的発掘調査に着手した。調査箇所は、国道8号線と交差する地点に当たり、国道への乗り入れと国道の下を北側へ抜ける工事が行われる為、道路幅員が最大となる。この為工事を早急に着手したい旨の要望があったが、市教委直営による調査は、組み込むことが不可能であった為、民間発掘調査機関の（有）山武考古学研究所に調査を委託し、市教委はその監理を行った。

当初工事計画では900m<sup>2</sup>を対象とした調査予定であったが、途中設計変更などがあり300m<sup>2</sup>の追加調査を行い計1,200m<sup>2</sup>の範囲で調査を実施した。引き続き、平成12年度は4月下旬から11年度調査区の南側地区的発掘調査に着手した。



第4図 発掘調査区年度別区割り図（1：1,250）

### III 調査の概要

#### i) 平成11年度調査

##### 1. 調査概要

###### (1) 調査の方法

平成11年度の発掘調査は、事業区域北側の1,200m<sup>2</sup>を対象に、平成11年10月15日から平成12年3月21日まで実施した。

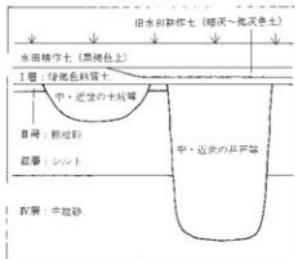
調査区の座標は、公共座標を基準に設定した。座標杭は10m間隔で打設し、便宜上、調査区上に一辺10mの正方形グリッドを設定した。最小グリッドは一辺1mとし、北西隅部における座標値の下三桁の数字をあてて位置を表記した（例：X=375, Y=990）。なお、後述する各遺構の位置については、一辺10mの正方形グリッドを単位として表記した。調査区の掘り下げは、表土除去と井戸の断ち割りに重機（バックホー）を使用したが、ほかはすべて人力によって行った。遺構内出土遺物は、可能な限り平面位置および高さを記録して取り上げた。ただし、湧水の著しい井戸などについては、その限りでない。また、包含層など遺構外出土の遺物については、一辺1mの小グリッド単位で一括して取り上げた。遺構実測図の縮尺は1/20を基本とし、必要に応じて1/10の詳細図を作成した。なお、遺構平面図の大半はトータルステーションを用いて図化した。写真撮影には3台のカメラ（モノクロ・カラーネガ・カラーポジ35mmフィルム）を使用して、調査の各段階で記録を行った。また、航空写真にはラジコンヘリを使用し、前後2回に分けてそれぞれ撮影を行った（モノクロ6.0×4.5cm・カラー6.0×4.5cmフィルム）。

###### (2) 基本層序

調査区の層序は、上から水田耕作土、旧水田耕作土、遺物包含層（I層）、地山（II～IV層）の順となる。

I層は暗褐色粘質土である。わずかに遺物を包含する。II層は粗粒砂である。調査区南側を中心に不均一に堆積する。III層は灰白～にぶい橙色を呈するシルトである。層厚0.7m前後。不帶水層。IV層はオリーブ灰色を呈する中粒砂である。層厚は1.5m以上確認されている。帶水層。井戸は、例外なく同層を掘り込んで構築されている。

各時期の遺構は、II～IV層上面で検出が可能であった。



第5図 基本層序模式図

#### 2. 遺構

検出された遺構は、井戸88基、溝18条、竪穴状遺構5基、上坑77基、小ピット多数である。いずれも中・近世の遺構と考えられる。掘立柱建物については、遺構の切り合いで著しく確認はできていないうが、方形区画状をなすSD02・03・14の内側を中心に複数棟存在している可能性がある。

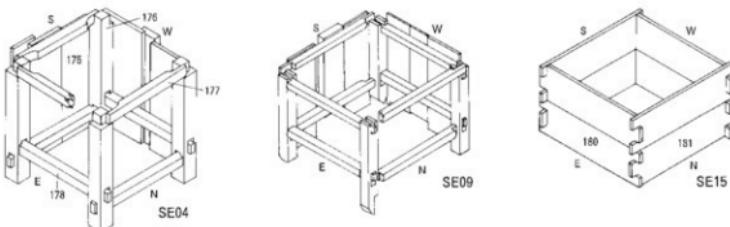
##### (1) 井戸

井戸は88基検出されている。いずれも調査区中央付近に密集するかたちで、不整形なまとまりをみせる。配置に規則性がなく、井戸同士の重複が随所でみとめられることから、一定の区域内で、逐次、必要に応じて構築されていったものと考えられる。帰属時期が判明している井戸をみると、16世紀

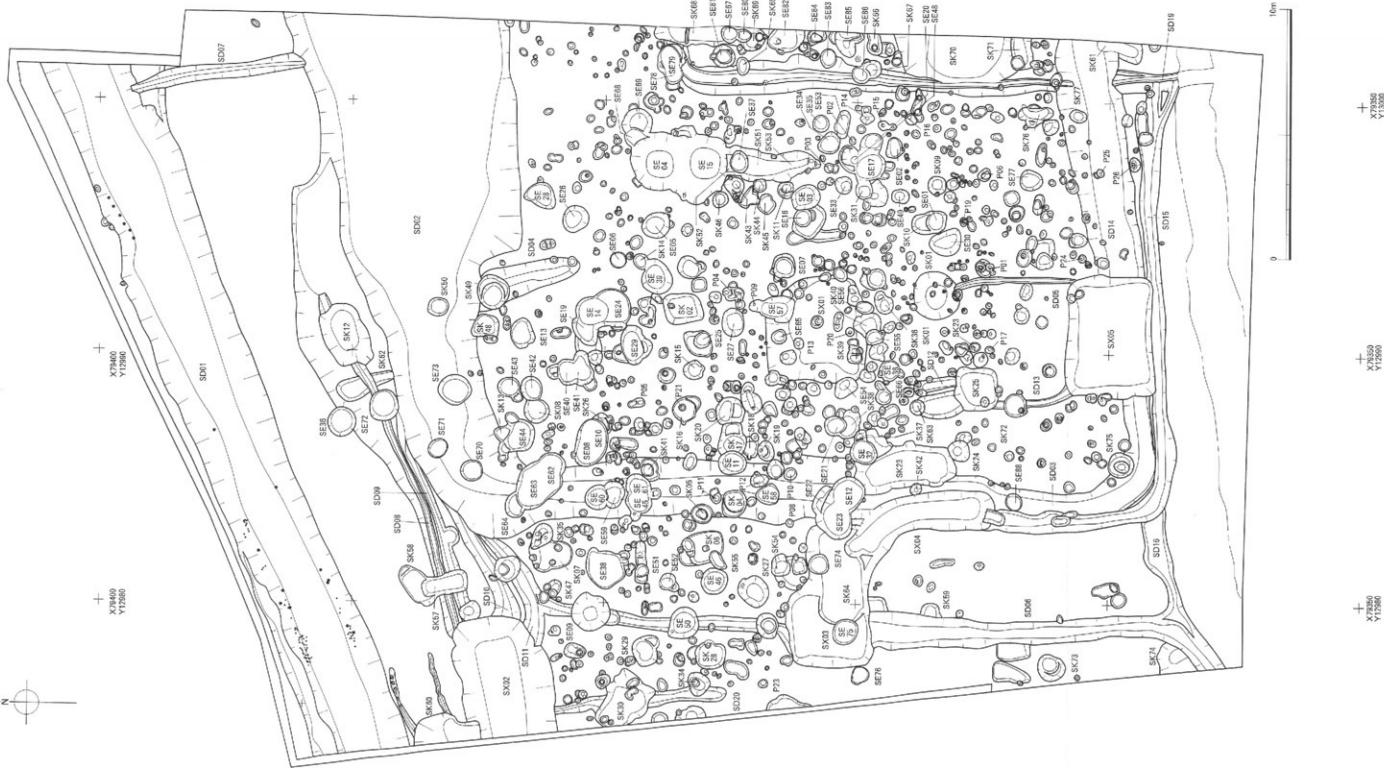
中頃から17世紀中頃まで頻繁に掘られていたことがわかる。大半が内部施設をともなわない状況で検出されているが、井戸側や水溜が抜き取られている可能性もあり、本米の構造については不明な部分が多い。各井戸の規模・出土遺物などについては、表1~3に示したとおりである。以下、内部施設をもつ特徴的な井戸について述べる。

**S E04**（第6・8図、写真図版3）調査区東側中央（X380,Y995）に位置する。S E15を切って構築されたもので、縦板組隅柱横棟どめ井戸（B IV類）〔宇野1982〕と思われる。井戸側の上部はすでに抜き取られており、現状では最下部の1段分が残る。検出された井戸側の内法一辺は0.68mである。隅柱には、長さ96.0cm前後、径12.0~13.0cmの角材を使用する。上端は「L」字状に組む相欠き柄とし、下位1/4には貫通する柄穴を直交するかたちで2箇所段違いに設ける。上段の横棟は、心持丸木の外側のみを面取りしたもので、両端を内側から削り込んで薄くつくり、隅柱の上端外側にそのまま組んで簡便な相欠き柄としている。下段の横棟は、心持丸木の4面を粗く面取り、両端に相欠き状の柄をつくる。下段の柄穴には、それぞれ補強のため木端状の楔が打ち込まれている。各辺とも、縦板の外側には目地塞ぎのため、厚さ2~3mmの薄い板を縦位にあてがう。掘形の規模は、開口部径2.34×(2.20)m、深さ2.15mで、井戸底は帶水層（基本層序IV層）上面から1.53m掘り込んで構築されている。遺物は、覆土中から、中世土師器、青磁碗(51・59)、染付碗、瀬戸美濃天日茶碗(70)、越中瀬戸丸皿(117)、珠洲甕、越前甕、円形曲物(197・198)、楕円形曲物(202)、漆器椀(192)、砥石(248)などが出土している。宮田編年〔宮田1997c〕II期に該当する越中瀬戸が出土していることから、17世紀前葉から中頃にかけて廃絶された遺構と考えられる。

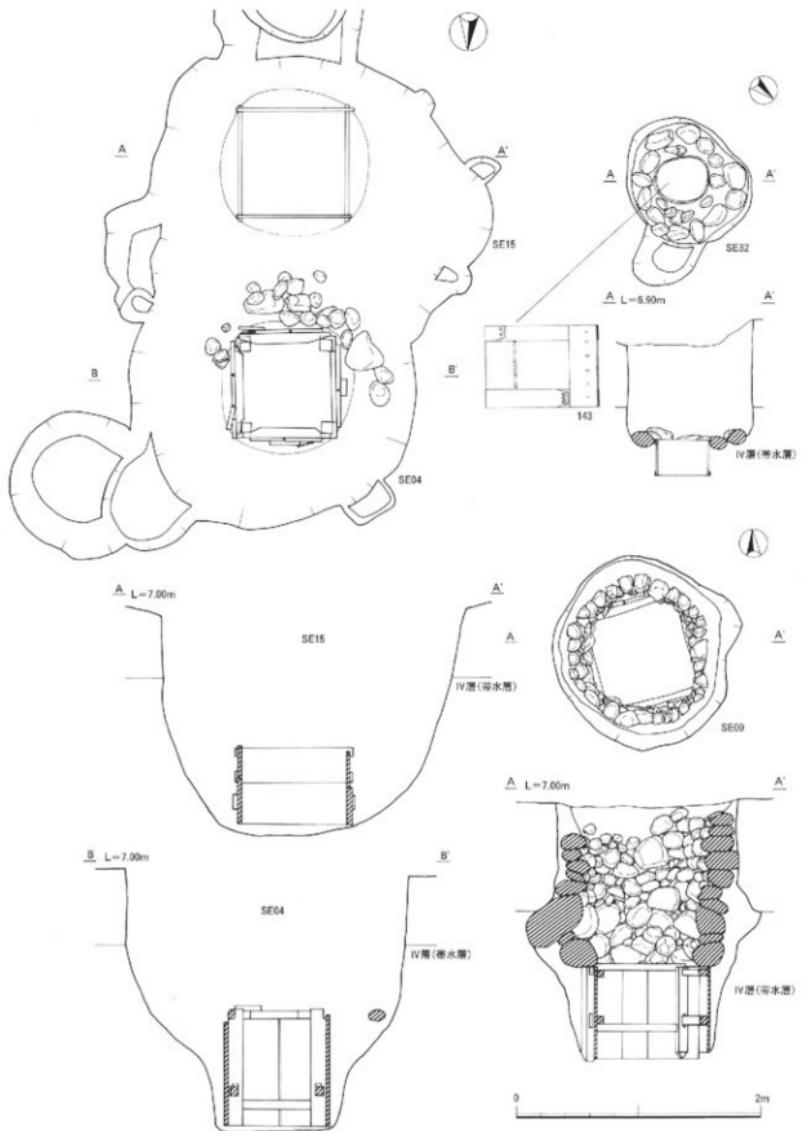
**S E09**（第6・8図、写真図版4）調査区北西側（X385,Y975）に位置する。上下二段構造を有する井戸で、上部には川原石を積み上げた石組円筒形（C I類）の井戸側をもち、下部には縦板組隅柱横棟どめ（B IV類）の水溜を設ける。石組開口部の内法は1.02×1.00m、水溜の内法一辺は0.74mである。隅柱には、長さ65.0~70.0cm、径7.5~9.0cmの角材を使用する。下端は尖らせるものとそうでないものがある。上端の仕口は目違い柄と相欠き柄を併用し、下位1/3には貫通する柄穴と貫通しない柄穴を直交するかたちで段違いに設ける。横棟は径5.0~9.0cmの角材を使用する。内部施設の周囲には、シルトブロックが混入した暗褐色粘質土の裏込が施される。掘形の規模は、開口部径1.58×1.44m、深さ2.12mで、井戸底は帶水層上面から1.33m掘り込んで構築されている。遺物は、覆土中から、中世土師器(22)、越中瀬戸匣鉢(136)、珠洲甕(142)、越前甕、砥石(251)などが出土している。宮田編年I~II期に該当する越中瀬戸が出土していることから、16世紀末から17世紀中頃にかけて廃絶された遺構と考えられる。



第6図 井戸側・水溜模式図 (S=1/40)



第7図 水橋金広・中馬場遺跡平成11年度調査遺構図 (S=1/150)



第8図 井戸SE04・09・15・32 (S=1/40)



第9図 井戸分布図及び溝平面図 (S=1/250)

**S E 15** (第6・8図、写真図版3・4) 調査区東側中央(X380,Y995)に位置する。横板井籠組井戸(B VI類)で、北側はS E 04によって切られる。井戸側の上部はすでに抜き取られており、現状では最下部の2段分が残る。検出された井戸側の内法一辺は0.84mである。井戸側は、厚さ3.5cm前後の板材を横方向に用いて積み上げ、目違い柄で組むものである。1段あたりの高さは32.0cm前後である。各辺とも、横板の外側には目地塞ぎのため、厚さ1~2mmの薄い板を横位にあてがう。掘形の規模は、開口部径2.50m、深さ1.90mで、井戸底は帶水層上面から1.30m掘り込んで構築されている。遺物は、覆土中から、中世上師器(37)、瀬戸美濃天目茶碗、珠洲甕・片口鉢(152・153・155)、円形曲物(195)、弧状木製品(187)、箸状木製品(206・211)、北宋銭(240)、五輪塔地輪(261)、種実遺体(モモ)などが出土している。宮田編年〔宮出1997b〕VI期に該当する中世上師器が出土していることから、16世紀中頃から後半にかけて廃絶された遺構と考えられる。

**S E 32** (第8図、写真図版4) 調査区南西側(X370,Y985)に位置する。円筒形の素掘り井戸(A I類)で、円形曲物を使った水溜をともなう。底板を欠く円形曲物(193)の周囲には、径12.0~25.0cmほどの川原石が敷き詰められる。掘形の規模は、開口部径1.10×0.92m、深さ1.30mで、井戸底は帶水層上面から0.47m掘り込んで構築されている。遺物は、覆土中から、宮田編年I~II期に該当する越中瀬戸水指(134)が出土している。16世紀末から17世紀中頃にかけて廃絶された遺構と考えられる。

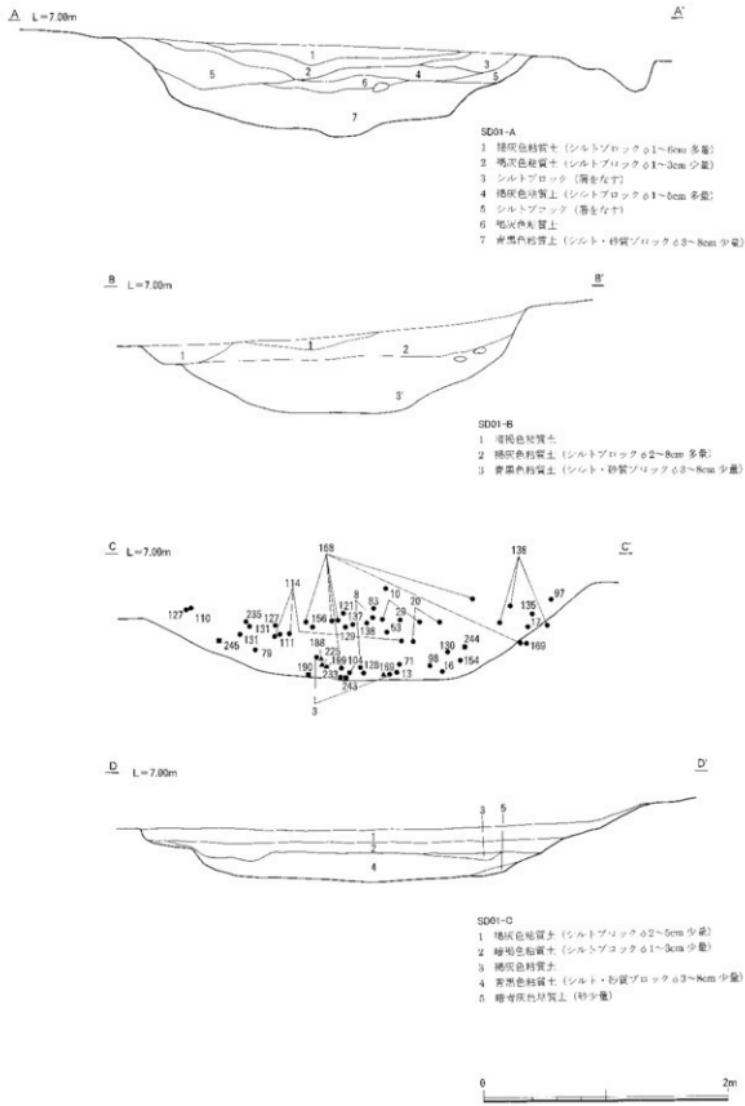
## (2) 溝

溝は18条検出されている。このうちS D02・03・14は、調査の過程で一連の溝であることが判明した。検出された溝の大半は、さらに調査区外へ延びており、全貌を把握できるものは少ない。各溝の規模・出土遺物などについては、表4・5に示したとおりである。以下、主な溝について述べる。

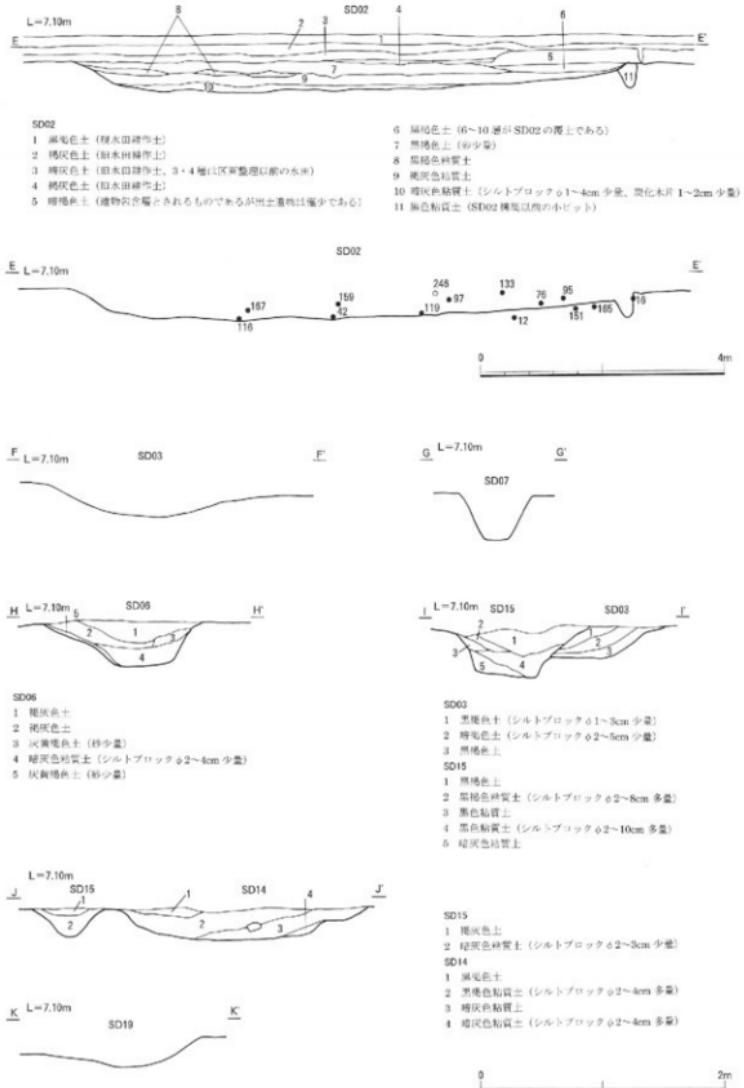
**S D01** (第9・10図、写真図版5) 調査区北端に位置する。南西から北東に向かって直線的に延びる大溝である。上軸方位はN-68°-Eを示す。規模は、全長30.50m以上、上幅3.15~4.40m、深さ0.75~0.85mである。底面はほぼ水平で、わずかに帶水層を掘り込んで構築されている。両側壁の下端には、複数の粗朧や杭が並んで検出されており、護岸を目的とした柵工と思われる。遺物は、八尾から越中瀬戸まで、時期幅の広い遺物が多量に出土している。これらは、層位的な位置関係を示さず、混在して出土することから、使用途上において、溝浚いあるいは掘り直しが行われている可能性がある。最終的に、17世紀前葉から中頃にかけて廃絶されたと考えられる。

**S D02・03・14** (第9・11図、写真図版6) S D02・03・14は「コ」の字状にめぐる一連の溝である。東側は調査区外となり不明であるが、方形区画をなすものと思われる。東西南北に合わせたかたちで配置されている。全体に、幅広で浅い形状をもち、底面はほぼ水平である。規模は、全長63.00m以上、上幅0.90~3.50m、深さ0.06~0.28mである。このうちS D02の東側だけは、上幅9.10m、深さ0.50mと規模が大きく、浅い池状を呈している。同箇所においては、前述したS D01と同様、各時期の遺物が混在した状況で出土している。目的は不明であるが、同箇所において大規模な掘り直しがあったものと推測される。後述するS D07の存在から、同箇所とS D01は密接な関係をもっていたことがうかがわれる。方形区画の南・北辺に相当するS D02とS D14の距離は、中軸線間で26.50~27.50m、内法で22.00~25.00mである。最終的に、17世紀前葉から中頃にかけて廃絶されたと考えられる。また、同箇所以外の部分については、これより早い段階で機能を停止している。

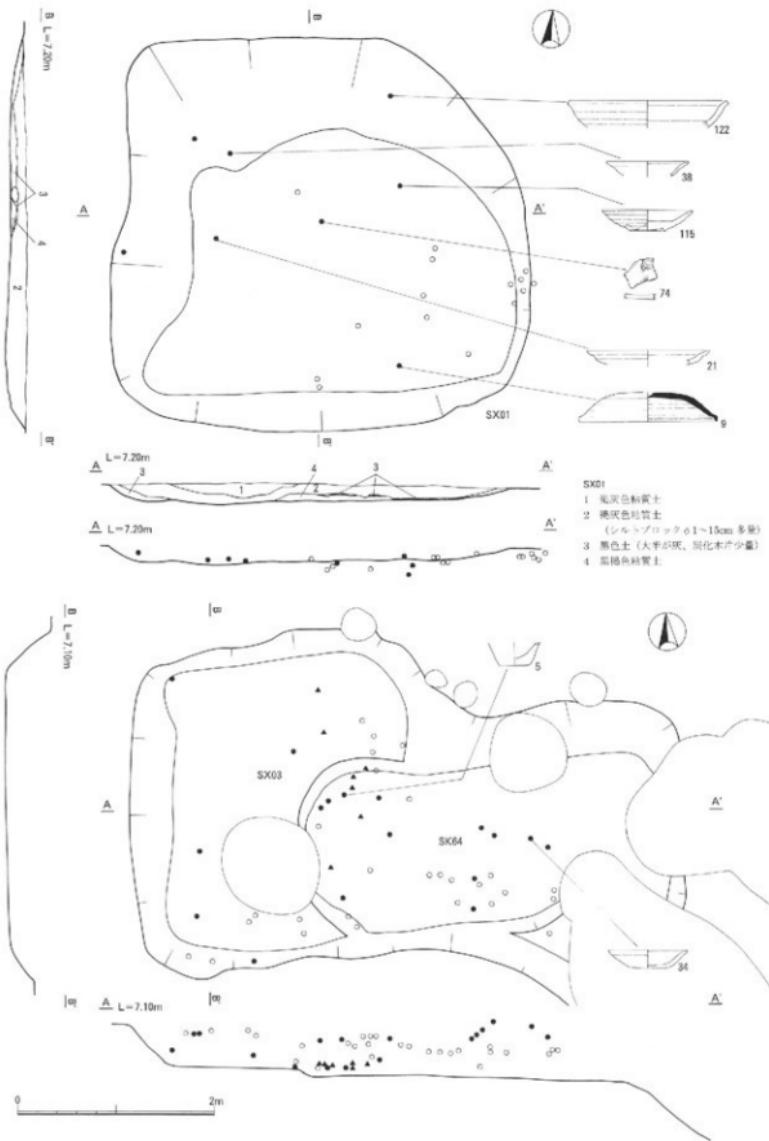
**S D07** (第9・11図、写真図版6) 調査区北東側に位置する。ほぼ南北に延びる溝で、幅の狭い底面は北へ向かって傾斜する。規模は、全長7.00m、上幅0.38~0.70m、深さ0.36~0.40mである。S D01とS D02を繋ぐ位置に構築されており、S D02の余剰水をS D01へ排水する機能を担っていた可能



第10図 溝SD01土層断面図・断面図 (S=1/40)



第11図 溝SD02・03・06・07・14・15・19土層断面図・断面図 (S=1/40・80)



第12図 窪穴状遺構SX01・03、土坑SK64 (S=1/50)

性がある。

**S D08~11** (第9図、写真図版6) 調査区北西側に位置する。いずれも東西に延びる溝で、ほぼ平行して構築されている。底面は、S D10・11がほぼ水平、S D08・09がわずかに東へ向かって傾斜する。西端はS X02に接するが、S D08の出土遺物(91)をみるとかぎり、S X02よりも新しい溝であることがわかる。概して出土遺物に乏しい。

**S D05・13** (第9図) 調査区南側に位置する。ともに南北に延びる浅い溝で、南端はS X05に接している。底面はS D05がほぼ水平、S D13がわずかに南へ向かって傾斜する。配置状況からS X05との関連性がうかがわれるが、機能的な必然性が見出せず、両者の関連については不明である。ともに出土遺物は皆無である。

**S D15** (第9・11図、写真図版6) 調査区南側に位置する。S D03・14の外側を、一部重複しながら併走する溝である。「L」字状に延びるもので、北端はS X04、東端はS D19に接している。底面は、東西方向ではほぼ水平であるが、南北方向ではわずかに北へ向かって傾斜する。規模は、全長24.00m以上、上幅0.54~0.75m、深さ0.20~0.37mである。ほかの遺構との重複関係は、S D03を切り、S X05によって切られることが判明している。S X04に付属する可能性がある。

**S D19** (第9・11図、写真図版6) 調査区東端に位置する。南北に延びる溝で、北側で「L」字状に屈曲する。規模は、全長21.00m以上、上幅0.42~1.40m、深さ0.10~0.20mである。17世紀前葉から中頃にかけて廃絶されたと考えられる。

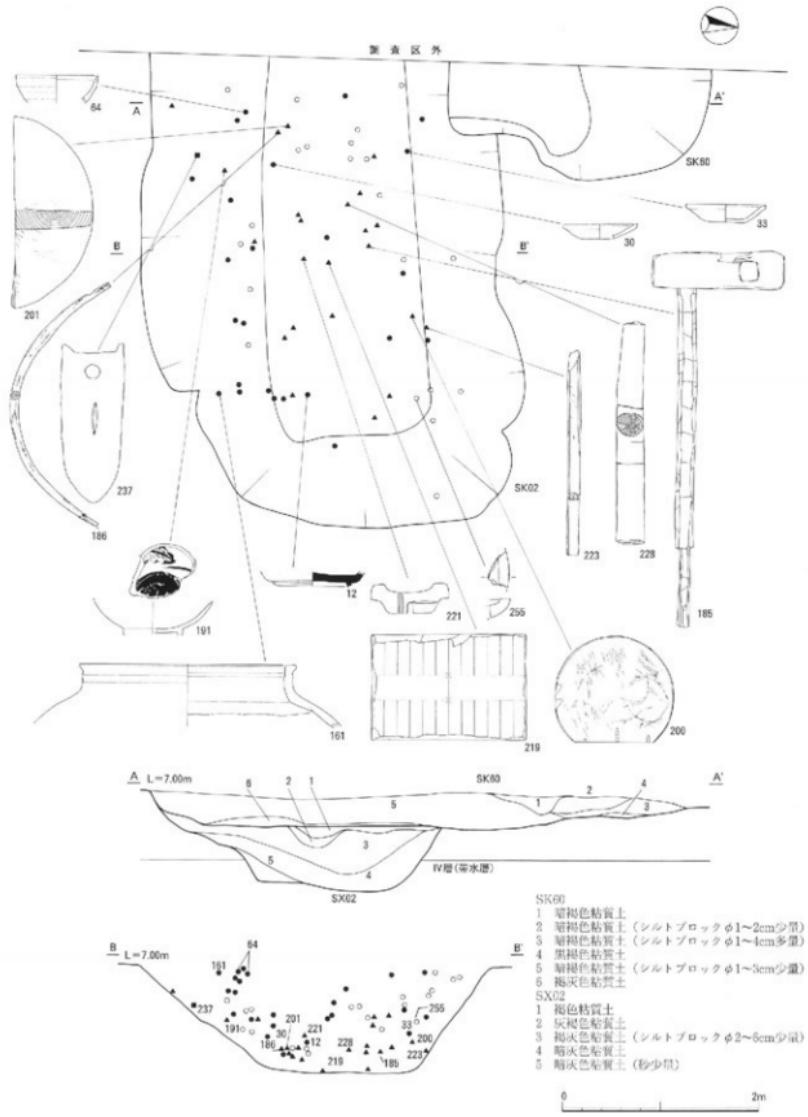
### (3) 壁穴状遺構

方形を基調とする大形の遺構を、壁穴状遺構とした。調査区中央から西側にかけて5基検出されている。これらは、その構造から2つに大別することができる。帶水層を大きく掘り込んで構築し、當時、遺構内に大量の水を湛えているもの(S X02・04)、帶水層まで掘り込みがおよんでいないもの(S X01・03・05)である。以下、各個に述べる。

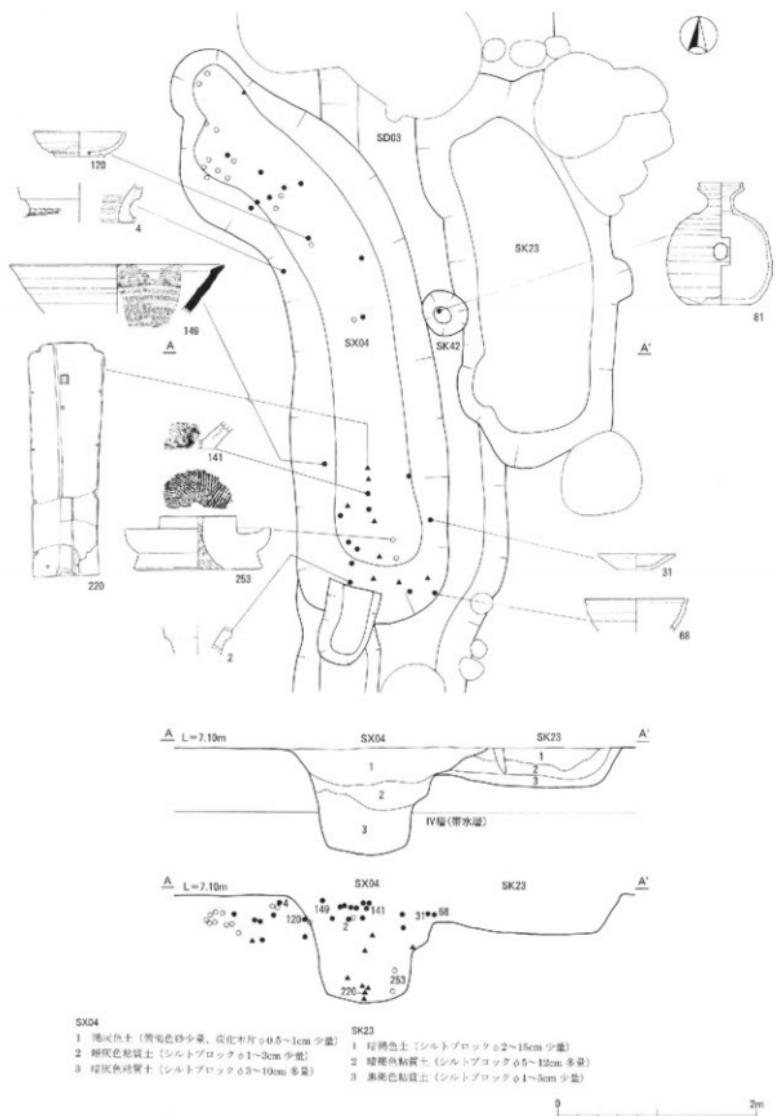
**S X01** (第12図、写真図版7) 調査区中央(X375,Y990)に位置する。平面形はやや不整形な隅丸方形を呈し、断面形は浅い皿状となる。壁の立ち上がりは緩やかで、床面との境ははっきりとしない。規模は長径4.30m、短径4.00m、深さ0.20mである。北西側の床面上を中心に、灰を主体とする黒色土が堆積しており、床面も被熱により硬化している状況がみとめられる。廃絶時において、遺構内でにかが燃えたものと推測される。柱穴など上屋構造にともなう遺構は検出されていない。遺物は、覆土中から、中世土師器(21・38)、瀬戸美濃端反皿(74)、越中瀬戸丸皿(115・122)・大皿、珠洲甕・片口鉢、越前壺などが出土している。宮田編年II期に該当する越中瀬戸が出土していることから、17世紀前葉から中頃にかけて廃絶された遺構と考えられる。

**S X02** (第13図、写真図版7) 調査区北西側(X385,Y975)に位置する。西側は調査区外となり、一部、S K60に切られる。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形状となる。規模は長径4.35m以上、短径3.70m、深さ1.04mである。底面は帶水層上面から0.41m掘り込んで構築されており、遺構内には、當時、大量の水が貯えられている状況である。柱穴など上屋構造にともなう遺構は検出されていない。遺物は、大半が遺構内に投棄されたようなかたちで出土している。中世土師器(30・33)、瀬戸美濃天目茶碗(64)、珠洲甕、越前壺(161)、横杵(185)、弧状木製品(186)、漆器椀(191)、円形曲物(200・201)、箸状木製品、双六盤(219)、台座(221)、用途不明品(223)、丸木(228)、梨先(237)、砥石、茶臼(255)などがある。宮田編年VI期に該当する中世土師器が出土していることから、16世紀中頃から後半にかけて廃絶された遺構と考えられる。

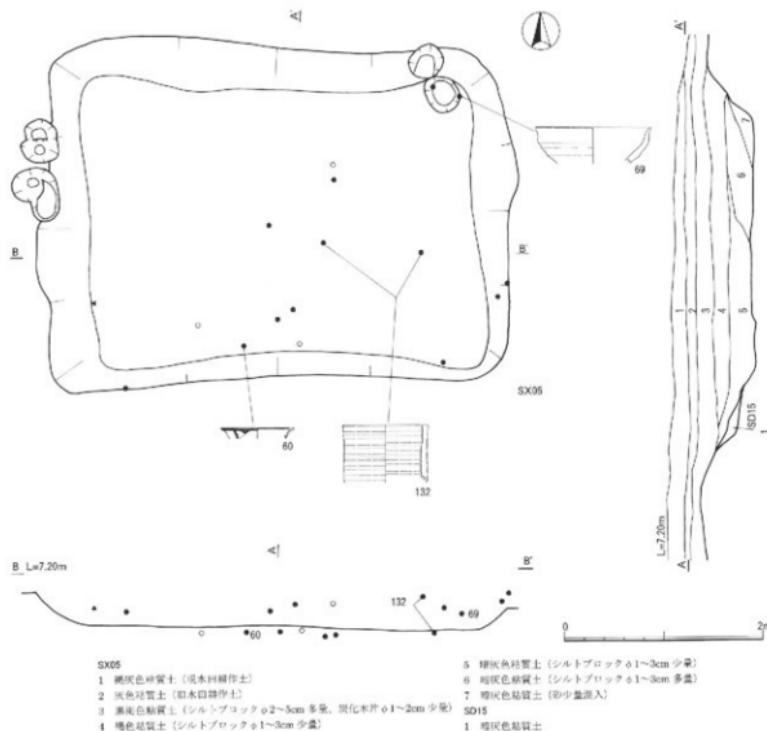
**S X03** (第12図、写真図版7) 調査区西側(X375,Y975)に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、



第13図 竪穴状遺構SX02、土坑SK60 (S=1/50)



第14図 積穴状遺構SX04、土坑SK23・42 (S=1/50)

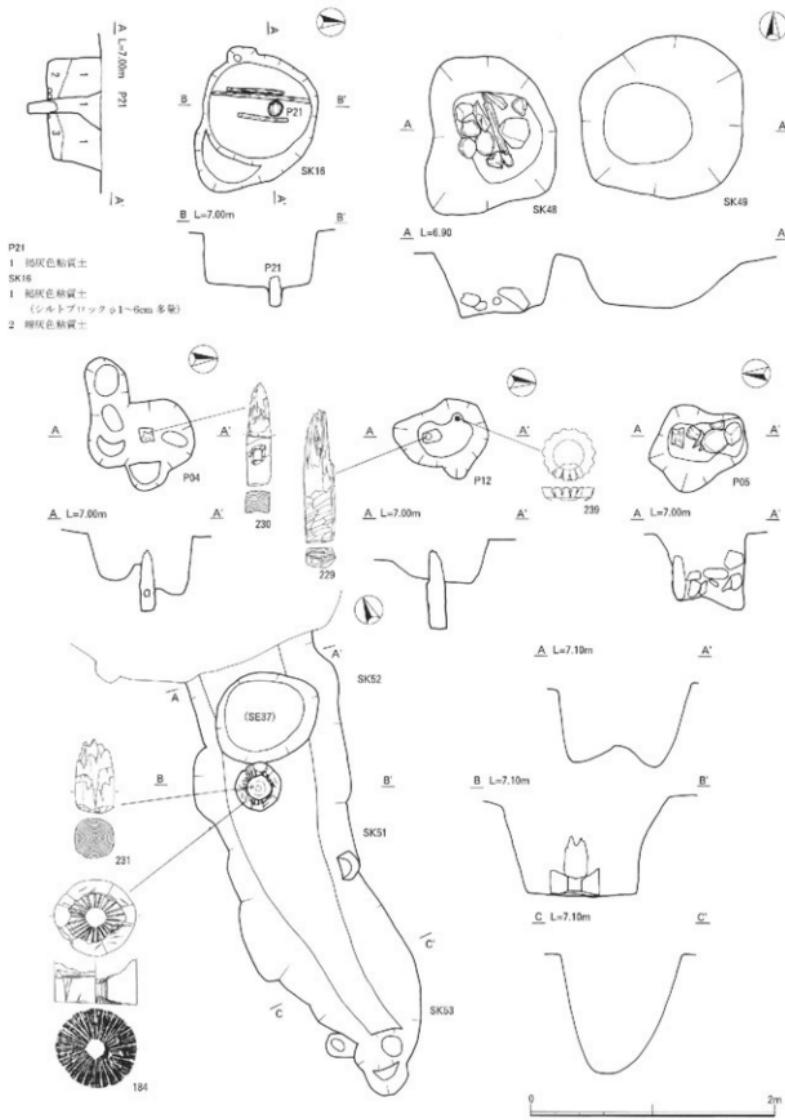


第15図 穹穴状遺構 SX05 (S=1/50)

断面形は浅い逆台形状となる。規模は、長径3.38m、短径3.10m、深さ0.47mである。柱穴など上屋構造にともなう遺構は検出されていない。遺物はわずかで、覆土中から漆器椀などが出土している。出土遺物からの時期特定は困難であるが、16世紀中頃から後半にかけて廃絶されたと思われるSK64を切って構築していることから、これ以降の所産と考えられる。

**SX04** (第14図、写真図版8) 調査区南西側 (X370,Y980) に位置する。平面形は南北に細長い隅丸長方形を呈し、北側で「く」の字状に屈曲する。規模は、全長6.30m、幅1.55m、深さ1.08mである。底面は帶水層上面から0.45m掘り込んで構築されており、遺構内には、當時、大量の水が貯えられている状況である。柱穴など上屋構造にともなう遺構は検出されていない。遺物は、覆土中から、中世土師器、瀬戸美濃天目茶碗(68)、越中瀬戸丸皿(120)、八尾甕(141)、珠洲甕・片口鉢(149)、越前鉢鉢、箱(220)、茶臼(253)などが出土している。宮田編年II期に該当する越中瀬戸が出土していることから、17世紀前葉から中頃にかけて廃絶された遺構と考えられる。

**SX05** (第15図、写真図版8) 調査区南側 (X365,Y990) に位置する。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し、断面形は浅い逆台形状となる。規模は、長径4.85m、短径3.35m、深さ0.47mである。



第16図 土坑SK16・48・49・51・52・53、小ビットP04・05・12・21 (S=1/40)

柱穴など上屋構造にともなう遺構は検出されていない。遺物は、覆土中から、染付皿(60)、瀬戸美濃天目茶碗(69)、越中瀬戸水指(132)、越前甕、漆器椀、種実遺体(モモ)などが出土している。宮田編年I～II期に該当する越中瀬戸が出土したことから、16世紀末から17世紀中頃にかけて廃絶された遺構と考えられる。

#### (4) 土坑

調査区のほぼ全域から77基検出されている。概して出土遺物が少なく、性格や帰属時期などは不明なものが多い。いずれもシルト層(基本層序Ⅲ層)を掘り込んで構築されたもので、降雨時には顯著な滯水状況がみられた。各土坑の規模・出土遺物などについては、表7・8に示したとおりである。以下、特徴的な土坑について述べる。

S K23・64・68・70は大形の土坑で、前述した堅穴状遺構に近似した特徴をもつ。このうち調査区東側から検出されたS K68・70については、遺構の大半が調査区外となるため全貌は把握できていないが、S X01に類似した形状をもつようである。

S K51は、掘形の規模が大きいため土坑として取り扱ったが、底部から礎板をともなう柱根が出土しており、柱穴である可能性が高い。礎板は木摺り臼の上臼(184)を転用したもので、柱根は樹皮を除いた心持丸木(231)である。柱径18.3cm。遺物は、覆土中から、中世土師器、珠洲甕、楔などが出上っている。宮田編年VI期に該当する中世土師器が山上していることから、16世紀中頃から後半にかけて構築された遺構と考えられる。ほかに礎板をともなう柱根は検出されていない。

#### (5) 小ビット

方形区画をなすS D02・03・14の内側を中心に多数検出されている。このうち遺構番号を付したもののは29基である。各小ビットの規模・出土遺物などについては、表9・10に示したとおりである。

### 3. 遺 物

#### (1) 古墳時代

土師器(第17図、写真図版10)

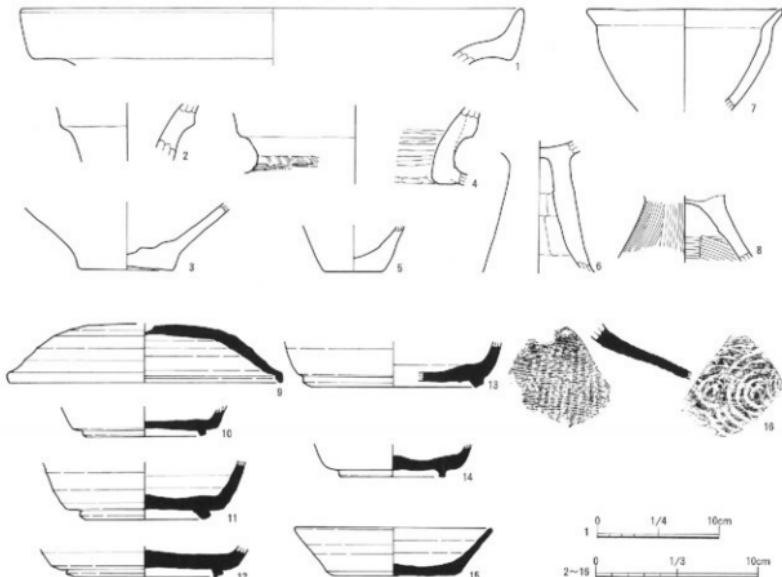
破片総数12点(壺4、甕3、高杯4、鉢1)が出土している。古墳時代の遺物と思われるが、いずれも細片であり、時期などの詳細については明らかでない。

1～3は壺である。1は推定口径43.0cmの人形品で、口縁部は有段状となる。2は細い頸部をもつものである。3は底部片である。4・5は甕である。4は有段状の口縁をもつもので、外面頸部下端には口縁部の貼り付け以前に施された刷毛目痕が見える。内面は横位ヘラ磨きが施される。5は小形品の底部片で、胴部の開きは小さい。6は高杯の脚部である。内面には横位ヘラ削りが施される。7は小形の鉢である。口縁部は「く」の字状に屈曲して大きく開き、口径が体部径より大きいものである。8は台付甕の台部と思われるもので、内外面に刷毛目調整が施される。底径の小さな甕の底部である可能性も考慮したが、開きが小さく内面先端まで調整がおよんでいないことから台部として取り扱った。

#### (2) 平安時代

須恵器(第17図、写真図版10)

破片総数37点(壺蓋2、壺B10、壺A3、甕又は壺22)が出土している。9は壺B蓋である。10～14は壺Bである。10～13の高台部は内端接地となる。10・11・14は胎土に黑色鉱物粒子を含む。15は壺Aである。外面底部に回転ヘラ切り痕が残る。16は甕の胴部上半の破片である。内面は同心円状の当て具痕、外表面は平行タタキ目の上からカキ目が施される。8世紀後半～9世紀前半の遺物と思われる。



第17図 古墳・平安時代の土器

### (3) 中・近世

#### 中世土器 (第18図、写真図版10・11)

破片総数433点が出土している。いずれも非クロロ土器で、油煙をとどめるものが多い。

17は口縁部が直線的にのびて端部を断面三角形状に面取りするものである。平底と思われる。推定口径16.0cm。口縁部に油煙が付着する。宮田編年〔宮田1997b〕Ⅲ期。

18・19は器壁の薄いもので、口縁端部は細くおさめる。口径9.0～9.4cm。宮田編年Ⅳ期。

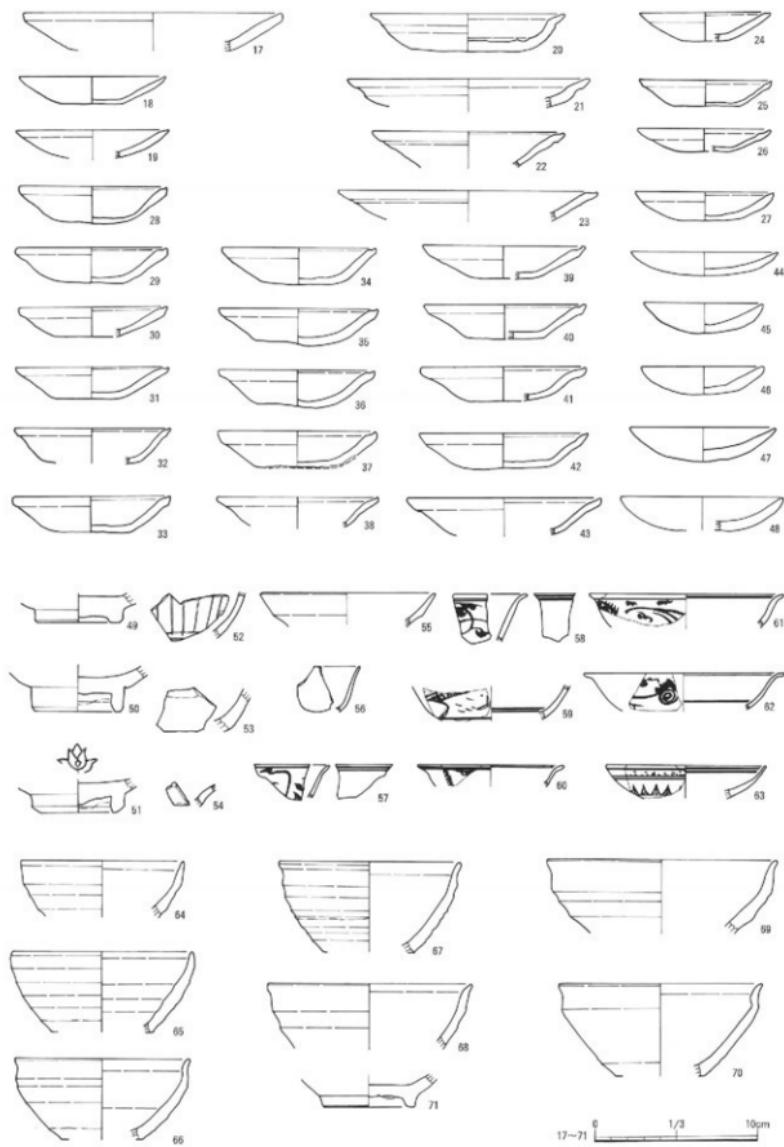
20・21は口縁端部が短く外反するものである。20の内面底部および外面体部にはヘラナデが施される。口縁部に油煙が付着する。20は口径12.0cm、21は推定口径15.0cm。宮田編年Ⅴ期。

22・23は口縁部が大きく開き、端部がつまみ上げたようになるものである。22は推定口径11.8cm、23は推定口径16.0cm。宮田編年Ⅴ期。

24～26は平底で、口縁端部をつまみ上げて丸くなり、少し肥厚する。後述する28～43と同様の器形を呈するものであるが、口径と器高が小さい。このうち25・26は、胎土が精良で器壁が薄い。推定口径8.0～8.2cm、器高1.4～1.7cm。24・26は口縁部に油煙が付着する。宮田編年VI期。

27は前述した24～26とはほぼ同じ器形を示すが、やや肥厚した口縁端部はつまみ上げずに尖る。口径8.4cm。口縁部に油煙が付着する。宮田編年VI期。

28～43は平底で、口縁端部をつまみ上げて丸くなり、少し肥厚するものである。口径は8.0～8.2cm、9.0～10.4cm、12.0cmがあり、9.0～10.0cmのものが多い。器高は1.8～2.2cmである。宮田編年VI期の範疇にあるが、丸塚から出土した一括資料〔島田1997〕に近似しており、16世紀中頃から後半の時期



第18図 中世土師器、中国陶磁器、瀬戸美濃(1)

が考えられる。また、これらは外型を用いて成形されたものと考えられる。このうち35と36は口縁端部のナデ調整による微細な差異を除き、まったく同じ器形を示すもので、同じ型を使用してつくられたものと思われる。29~41は口縁部に油煙が付着する。

44は丸底の浅い器形を呈するもので、口縁端部は細く尖る。推定口径9.0cm。17世紀代か。

45~48は丸底で器壁の厚いものである。口径は45・46が7.4~7.6cm、47・48が9.0~10.0cmである。前者は手捏による粗雑なつくりで不整形である。45~47は口縁部に油煙が付着する。帰属時期は不明。

#### 中国陶磁器（第18図、写真図版11）

破片総数16点（青磁6、白磁3、染付7）が出土している。

49~54は青磁で、いずれも龍泉窯系の製品である。49は断面四角形の高台をもつもので、箇輪弁文碗と思われる。釉は高台外面までかかり、墨付から外面底部は無釉となる。龍泉窯系碗B1類〔国立歴史民俗博物館1993〕（横川・森田編年I-5b類）。13世紀後半～14世紀前半の製品と思われる。50・51は内外面無文の罐反碗と思われる。釉は高台の内面途中までかかり、外面底部は無釉となる。51は見込みに蓮花を象った印花文が施されたもので、割れ口には漆繼のあとが残る。龍泉窯系碗D類。14世紀後半～15世紀前半。52は細い線描きの蓮弁文碗である。龍泉窯系碗B4類。15世紀後半～16世紀前半。53は碗で、内外面無文と思われる。15世紀後半～16世紀前半。54は稜花皿で、段をつけて立ち上がる腰折れの器形となるものと思われる。15世紀後半～16世紀前半。

55・56は白磁である。55は小形の皿である。胎土は軟質で灰白色を呈する不透明な釉がかかる。皿D群。15世紀前半。56は小杯である。16世紀前半～中頃。

57～63は染付である。57・58は罐反りの碗である。外面胴部に唐草文を描く。碗B群。15世紀中頃～後半。59は、いわゆる「饅頭心」の碗の系統にあるものである。ほかと比べ吳須の発色がやや鮮やかである。碗E群。16世紀前半～中頃。60～62は端反りの皿である。いずれも外面胴部に牡丹唐草文を描く。62は外面口縁部に界線をもたない。60は皿B1群VI類、61・62は皿B1群VII類。15世紀中頃～後半。63は、いわゆる「碁笥底」をもち、口縁部が軽く内湾気味におさまる皿である。外面口縁部に波涛文帯、胴部に芭蕉葉文を描く。皿C群I類。16世紀前半。

#### 瀬戸美濃（第18・19図、写真図版11・12）

破片総数30点（天目茶碗7、丸碗2、端反皿7、丸皿6、卸し皿1、茶入1、徳利1、壺類3、碗類2）が出土している。

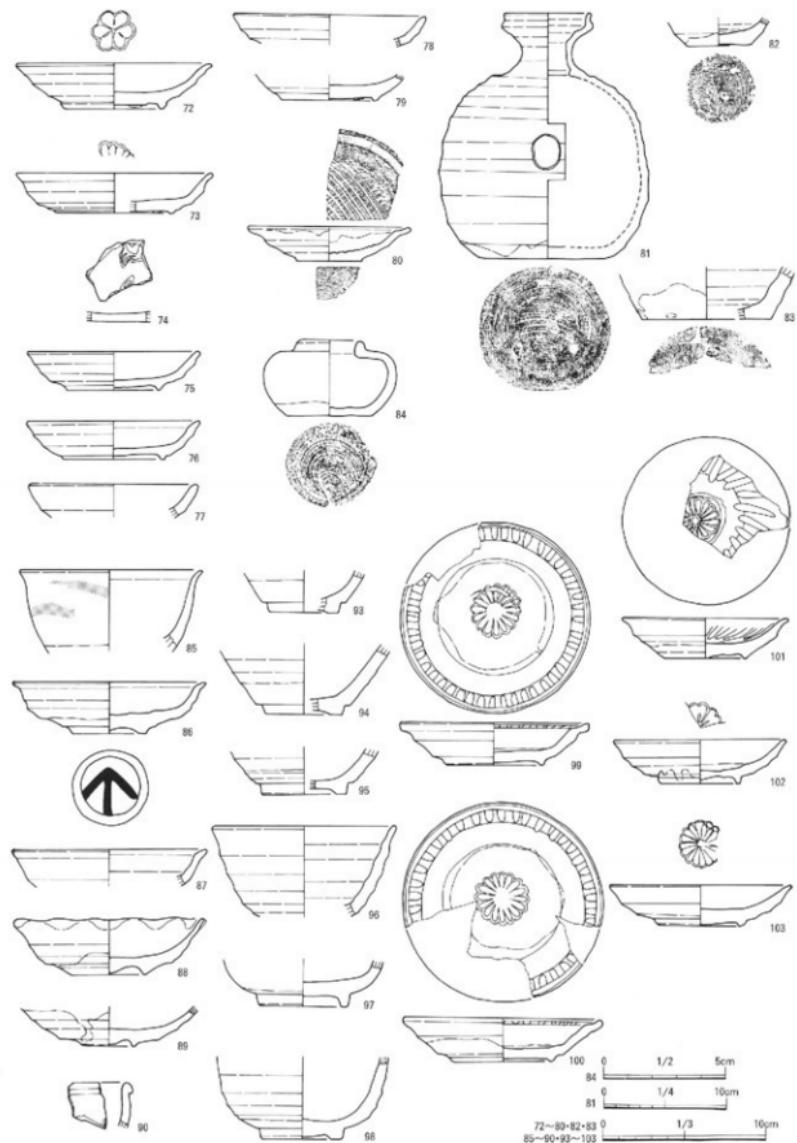
64～70は天目茶碗である。鉄釉が施釉されるもので、高台周辺は66・67がサビ釉、65・70は露胎である。いずれも底部を欠くが、口縁部の形状から64・65は大窯編年〔藤澤1986〕の第1段階、66～69は第2～3段階、70は第4段階の製品と思われる。

71は丸碗である。輪高台で、高台内の削り込みは深い。高台の断面形は逆台形状を呈し、全面に灰釉が施釉される。高台内に輪トチ痕が残る。第3段階。

72～74は端反皿である。体部下方はやや丸味をおび、口縁部はゆるやかに外反する。断面三角形の付高台を有し、内面底部には印花文が施される。灰釉が全面施釉される。72・73の高台内には輪トチ痕が残る。第1段階。

75～79は丸皿である。器高がやや低く、体部下方はあまり丸味がなく、上方はほぼ直線的に聞く。付高台は低く小さい。灰釉が全面施釉される。79の高台内には輪トチ痕が残る。第2～3段階。

80は卸し皿である。体部上方が外反し、口縁端部が短く立ち上がる折縁状の器形を呈する。底部は回転糸切り痕未調整である。内面底部に卸し口をもち、口縁部内外面に灰釉が施釉される。



第19図 濑戸美濃(2)、肥前、越中瀬戸(1)

81は徳利である。球形に近い胴部をもつもので、頸部上方が大きく外反し、口縁部は外湾気味に直立する。底部は回転糸切り痕未調整である。底部を除き鉄釉が施釉される。胴部中央には径 $2.7 \times 2.1$  cmの楕円形の孔が1箇所穿たれる。焼成後の穿孔であるが、その目的や用途については不明。

82・83は壺類と思われる。ともに底部は回転糸切り痕未調整である。底部を除き鉄釉がかかる。84は大海形の茶入である。頸部が短く直立するもので、底部は回転糸切り痕未調整である。底部を除き鉄釉が施釉される。

#### 肥前（第19図、写真図版12）

破片総数9点（陶器碗2・皿5・鉢1・磁器皿1）が出土している。

85は、いわゆる絵唐津の端反碗である。外面胴部に植物文様とみられる簡潔な鉄絵が施される。

86～89は灰釉の皿である。86・87は口縁部が外反する端反り形の皿である。86の見込には胎土痕が小さく4箇所残っており、高台内には家印の「トリアシ」と思われる墨書きがある。87の口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。88は口縁部をなぶり口にしたひだ皿である。内面胴部下端には胎土目が1個熔着して残る。88・89の高台内には兜巾と呼ばれる円錐状に突出した削り残しが顯著にみられる。高台が低く、高台と高台脇の区分も明瞭でない。

90は鉢あるいは片口と思われるもので、外面胴部に鉄絵が施される。

これらの陶器は、いずれも大橋編年〔大橋2000〕のⅠ期に該当するものであるが、このうち絵唐津の盛行する1590～1610年代の時期にはほぼ特定できるものと考えられる。

ほかに、細片のため写真掲載のみであるが、大橋編年Ⅲ期に該当する陶磁器が2点出土している。91は胴部内外面に白化粧土による刷毛目文が施された陶器碗である。92は染付の磁器皿で、見込には蛇ノ目釉剥ぎがみえる。

#### 越中瀬戸（第19～21図、写真図版12・13）

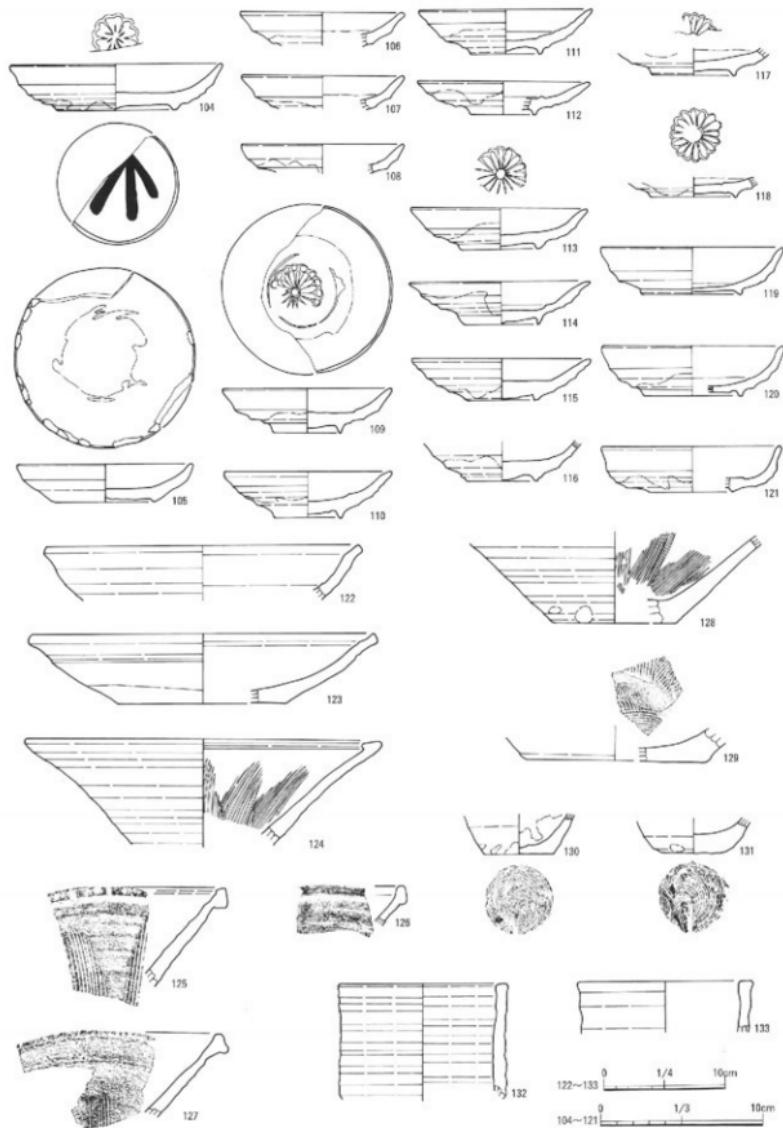
破片総数124点（天目茶碗11・丸碗5・折縁皿4・丸皿55・向付1・大皿7・搔鉢18・壺6・水指9・匣鉢8）が出土している。

93～96は天目茶碗である。93・94は内反り高台、95は高台内の削り込みの浅い輪高台である。いずれも高台脇の削り幅は狭い。鉄釉がかかる、高台周辺は露胎となる。93・94は宮田編年〔宮田1997c〕Ⅰ期、95は宮田編年Ⅰ～Ⅱ期、96は宮田編年Ⅱ期。

97・98は丸碗である。97は付高台、98は高台内の削り込みの浅い輪高台である。いずれも鉄釉がかかる、高台周辺は露胎となる。宮田編年Ⅰ～Ⅱ期。

99・100は折縁皿である。口縁内端を菊状に丸彫りするもので付高台である。内禿で、灰釉がかかる。内面底部には16弁菊の印花文が施文される。99の底部内外面には輪ドチ痕が残る。ともに山下窯の製品と思われる。折縁皿1b類〔宮田1988・1997a〕。宮田編年Ⅰ期。

101～120は丸皿である。101～105は宮田編年Ⅰ期に該当する。101は削り込み高台で、内面体部を菊状に丸彫りする。丸皿2b類。底部内外面に輪ドチ痕が残る。102～104は付高台である。丸皿1a類。103の口縁部には胎0.5～1.5cmほどの細かな打ち欠きが複数みとめられる。同箇所には例外なく油煙が付着することから、灯芯を置くために意図的に打ち欠いたものと思われる。灯明皿である。104の高台内には家印の「トリアシ」と思われる墨書きがある。105は削り込み高台である。丸皿2a類。口縁部には、前述した103と同様の打ち欠きと油煙がみとめられる。いずれも内禿皿で、101～104は灰釉、105は鉄釉がかかる。このうち105は、施釉方法がほかと異なる。一旦、全面施釉したのち、内面底部の釉を拭きとり、高台内の釉はヘラ状工具によって搔きとる。内面底部の印花文は、99～101が16弁菊、103が一部二重菊、102・104が6弁桜である。106～120は宮田編年Ⅱ期に該当するものと思われる。



第20図 越中瀬戸(2)

109・112・113・114・117～120は付高台である。丸皿1a類。109の内面底部には直接重ね焼き痕が残る。110・111・115・116は削り出し高台である。丸皿3類。110～112・114は内面底部に釉止めの段をもつ。いずれも内禿皿で、109～112・114・117・118は灰釉、106～108・113・115・116・119・120は鉄釉がかかる。このうち119・120は、器形および施釉方法がほかの個体とは異なる。ともに付高台で、体部は丸みをおびて立ち上がる器形を呈する。器高と底径が大きいもので、内面無文の底部は薄いくりとなる。施釉は、一旦、全面施釉したのち、内面底部と高台内の釉を拭きとて内禿とするもので、黒褐色に発色した鉄釉は釉切れする。120の底部内外面には輪ドチ痕が残る。内面底部の印花文は、109が二重菊、113・117・118が16弁菊である。また、108・113・114の口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。108の口縁部には、前述した103と同様の打ち欠きがみとめられる。

121は向付である。口縁部が屈曲して短く直立するもので、削り込み高台をもつ。内面底部は一段高く凸帯状となる。内禿で、灰釉がかかる。向付B類。宮田編年II期か。

122・123は大皿である。122は不明であるが、123は平底となる。体部下半は直線的に開き、上半はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反して折縁状となり、端部は角張る。体部下半から底部は回転ヘラ削りが施される。鋸釉が全面施釉されるが、体部下端から底部はヘラ状工具によって釉が搔きとられる。内面底部には日痕と思われる釉の拭きとりあとが2箇所みられる。大皿B類。宮田編年I期。

124～129は擂鉢である。全面に鋸釉がかかる。124は口縁部を内側に折り返すもので、内端面は平坦である。擂鉢B1類。宮田編年I期。125～127は口縁端部に縁帶をつくるものである。擂鉢A2類。宮田編年II期。

130・131は壺である。130は外面胴部下半に回転ヘラ削りが施されるもので、底部を除いて鉄釉がかかる。131は胴部下端が丸みをおびるもので、全面に鋸釉がかかる。ともに底部は回転糸切り未調整である。

132～135は水指とした。132・133は後述する匣鉢A類と同じ器形を呈するもので、ロクロ目を顕著にとどめる。内外面に鋸釉がかかる。134・135は胴部がやや開いて直線的に立ち上がるるもので大形品である。134は外面胴部に回転ヘラ削りが施される。内外面に鉄釉がかかる。135は全面に鋸釉がかかるが、胴部下端から底部はヘラ状工具によって釉が搔きとられる。

136～138は匣鉢である。136は平底で、横長の器形となるもの。匣鉢B類。137・138は平底で、縦長の器形となるものである。匣鉢A類。いずれも底部は回転糸切り未調整である。

#### 関西系陶器（第21図、写真図版13）

139は灯明皿である。内面口縁部には菊花を象った貼花文が施され、外面胴部を除き灰釉が施釉される。18～19世紀の関西系の製品と思われる。これ1点のみの出土である。

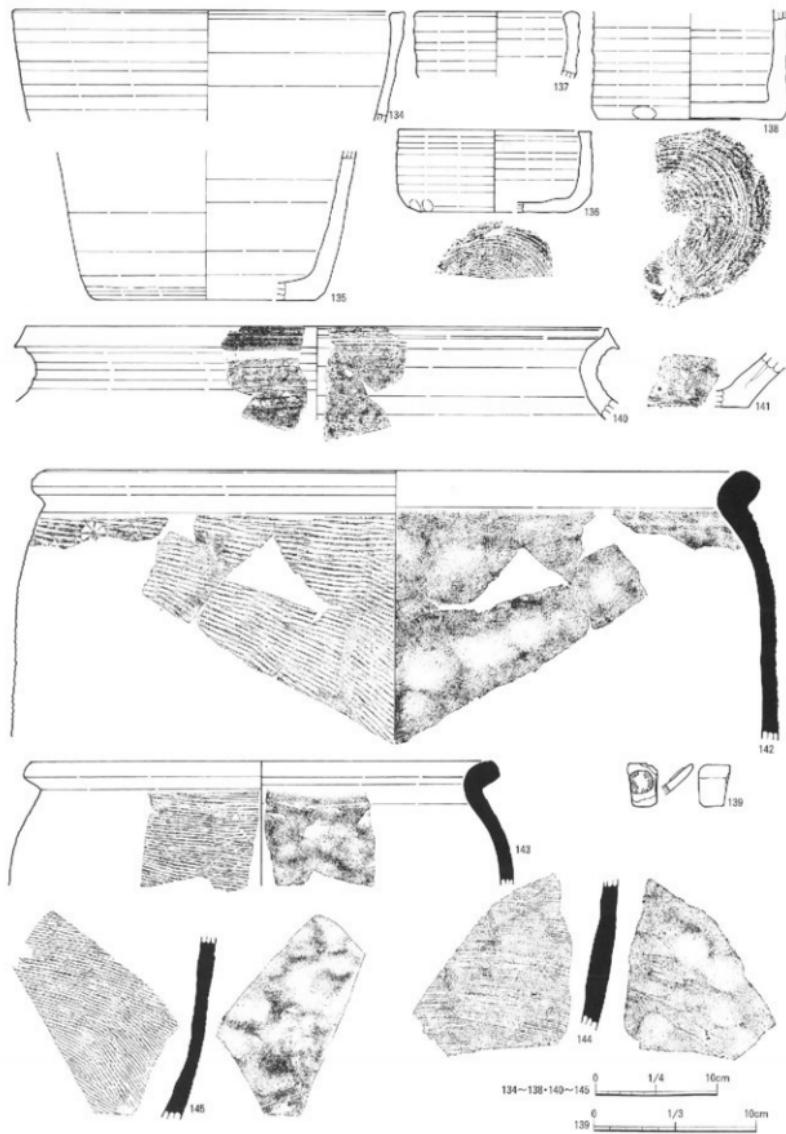
#### 八尾（第21図、写真図版13）

破片総数11点が出土しているが、大半が甕の胴部片で特徴のわかるものは少ない。

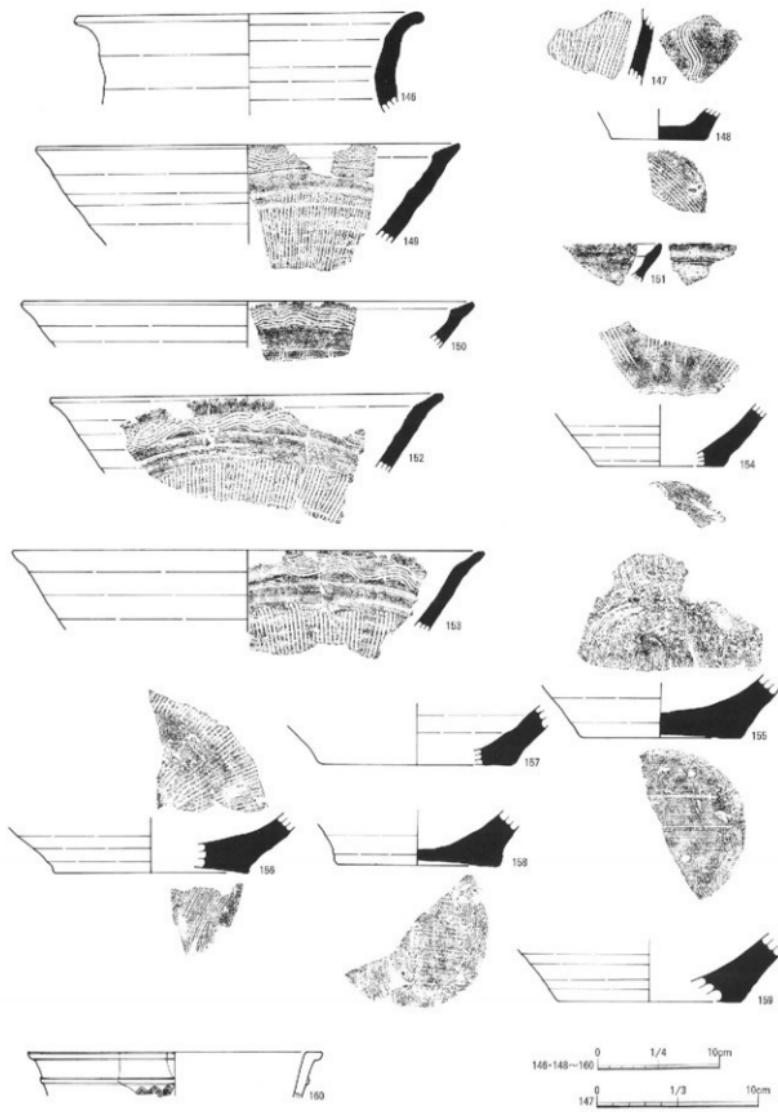
140は甕Aである。口縁部が小さく「く」の字状に外反するもので、端部断面形は斜め「T」字状となる。頸部から口縁部内外面にかけて板状工具による横位ナデが施される。推定口径48.0cmの大形品。口縁端部の形状から、後出の第2群土器a類（酒井1985・1997）に分類される。141は甕の底部片で、火脹がみとめられる。

#### 珠洲（第21・22図、写真図版14）

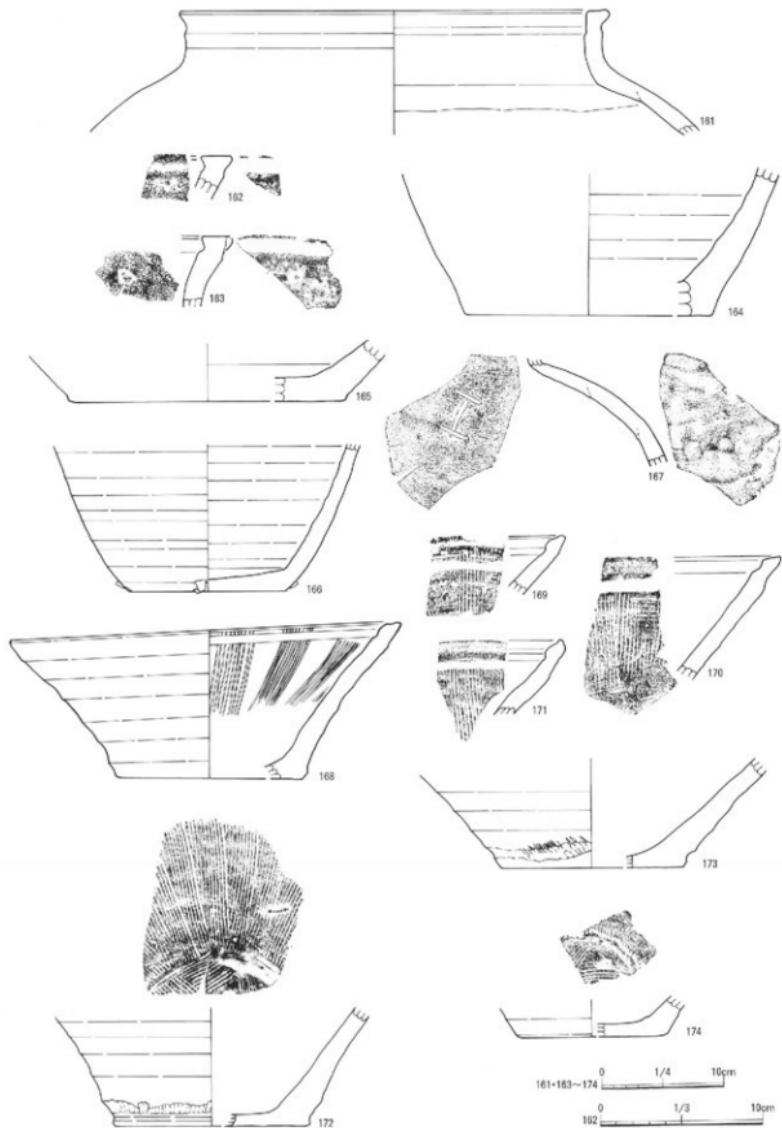
破片総数141点（甕又は壺116、片口鉢25）が出土している。



第21図 越中瀬戸(3)、関西系陶器、八尾、珠洲(1)



第22図 珠洲(2)、瓦質陶器



第23図 越前

142～145は甌である。142・143は短頭の甌で、方頭の「く」の字口縁をもつ。142は推定口径56.0cmの大甌で、頸部直下に印化文が施文される。143は推定口径37.6cmの中甌。とともに吉岡編年〔吉岡1994〕V期。144・145は胴部片である。

146～148は壺である。146は推定口径28.0cmの大壺。吉岡編年V期。147は壺の胴部片と思われるもので、内面に縦位の櫛目波状文、外面に平行タタキ目が施される。148は小形の底部片で、静止糸切り痕が残る。

149～159は片口鉢である。149・150は器体がほぼ直線的に開き、肥厚した口縁内端に面をとるものである。口縁部は三角頭の内傾口縁となり、口端基部は強くナデて顎状につくる。内端面の幅は1.9～2.0cmで、しっかりとした櫛目波状文帯がめぐる。149の割れ口には漆縫のあとが残る。151は、前述した149・150とほぼ同様の口縁形状をもつものであるが、器壁が薄く内端面無文であることから、中・小鉢と考えられる。いずれも吉岡編年V期。152・153は口縁部がやや外反する器形となり、内端に幅2.5cmの深く広い面をとるものである。内端面には、だれた櫛目波状文帯が二重に施文される。全体に粗雑なつくりで、胎土・焼成とともに不良である。吉岡編年VI期。154～159は底部片で、確認できる個体にはすべて静止糸切り痕が残る。157～159は卸し目がみえないが、158・159は胎土・焼成とともに不良で磨耗している可能性がある。

#### 瓦質土器（第22図、写真図版14）

160は鉢類である。口縁部は逆「L」字状に屈曲し、水平に短く張り出す。胴部上半に隆線が1条めぐり、直下には雷文と思われるスタンプ文が連続して施文される。これ1点のみの出土である。

#### 越前（第23図、写真図版14）

破片総数51点（甌又は壺42、擂鉢9）が出土している。

161～166は甌である。口縁端部は肥厚して角張り、内面直下に沈線が1条めぐる。161の割れ口には漆縫のあとが残る。161は15世紀後半、162・163は16世紀前半。166も同じく甌であるが、全面に鬼板〔岩田1997〕が刷毛塗りされる。底部外縁に焼成時の胎土印痕が4箇所残る。桃山時代以降の製品である。

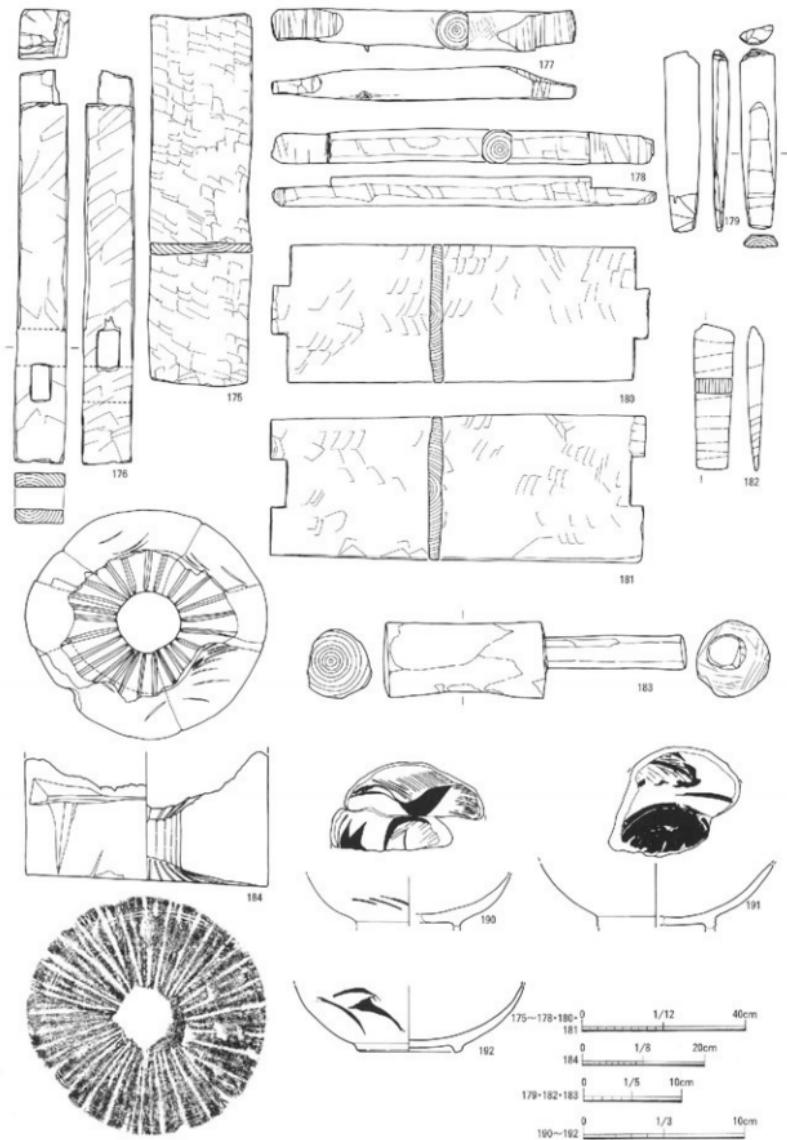
167は壺の肩部片で、「I」字状の籠記号が施文される。

168～174は擂鉢である。口縁部は断面三角状を呈し、内面直下には沈線が1条めぐる。172・174の卸し目は密で、見込にも施される。173は磨耗して卸し目はみえない。172・173の外面胴部下端には、取り上げた際の紐掛け痕が残る。16世紀前半。

#### 木製品（第24～28図、写真図版15～18）

175～181は井戸側の代表的な部材である。175～179はS E 04（綾板組隅柱横桟どめ）の部材である。175は綾板。厚さ2.6cmの板材で、内外面ともに丁寧な加工が施される。176は隅柱。径12.0cmほどの角材を使用する。上端は「L」字状に組む相欠き柄とし、下位1/4には貫通する柄穴を直交するかたちで段違いに2箇所設ける。177は上段の横桟。心持丸木の外側のみを面取りしたもので、両端を内側から削り込んで薄くつくり、簡便な相欠き柄とする。178は下段の横桟。心持丸木の4面を粗く面取り、両端に相欠き状の柄をつくる。179は楔である。細い心持丸木を半割したもので、裏側には割り面をとどめる。一端を削って片刃状に加工する。180・181はS E 15（横板井籠組）の部材である。ともに厚さ3.5cm前後の厚板で、内外面ともに丁寧な加工が施される。両端部はそれぞれ目違い柄とする。すべてヒノキ科アスナロ属の木材を使用する。

182は楔である。長方形の木片を全面粗く削って斧頭状に加工する。刃にあたる部分や頭頂部分に顯著な使用痕はみとめられない。



第24図 木製品(1)

183は横槌である。心持丸木材の半分を頭とし、残り半分を細く削って断面円形の柄をつくる。その形状から藁などを打つ横槌を想定したが、頭部側面に著しい敲打痕がみとめられることから、杭などを持ち込む掛矢として使用された可能性もある。ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節。

184は木摺り臼である。直径40.0cm、現存高22.0cmの短い円柱状を呈するもので、上臼である。重ね合わせ面が摩耗して片減りしていることから、実際に使用されたものであることがわかる。臼の目は放射状で、重ね合わせ面は特有の曲線状を呈する。上面は漏斗状に広んで、断面「V」字状となる縦溝が放射状に刻まれる。石臼にみられるような「もの入れ」ではなく、中央の軸受の孔がそのまま供給口を兼ねる構造である。外面胴部には、水平方向に高さ4.0cm、奥行き6.0cmほどの溝が2箇所、それぞれ半周するように彫り込まれており、その境には幅12.0cmほどをそれぞれ彫り残している。この種の臼は、一定方向の連続回転運動ではなく、繩などをつけて両方向から交互に引いて使用するものであることから、繩掛け用の構造と思われる。本資料は、上部を欠損しているため明らかでないが、通常、上端には芯棒を通す軸受板が付く。太い心持丸木からつくられたもので、外面は樹皮を除いた程度の加工である。本来、枠摺り用の臼であるが、礎板として転用されている。ブナ科ブナ属。

185は大形の組合せ木製品で、横杵と思われる。頭部の柄穴に柄の柄部分を差し込んで、木製の楔2個で固定する。柄部は、細い柱状の角材に断面八角形となる面取りが施されたもので、両端に柄を有する。頭・柄ともに建築部材の転用と考えられる。頭部先端に顯著な磨耗や敲打痕はみとめられない。頭部はヒノキ科アスナロ属、柄部はブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節、楔はブナ科クリ属クリ。

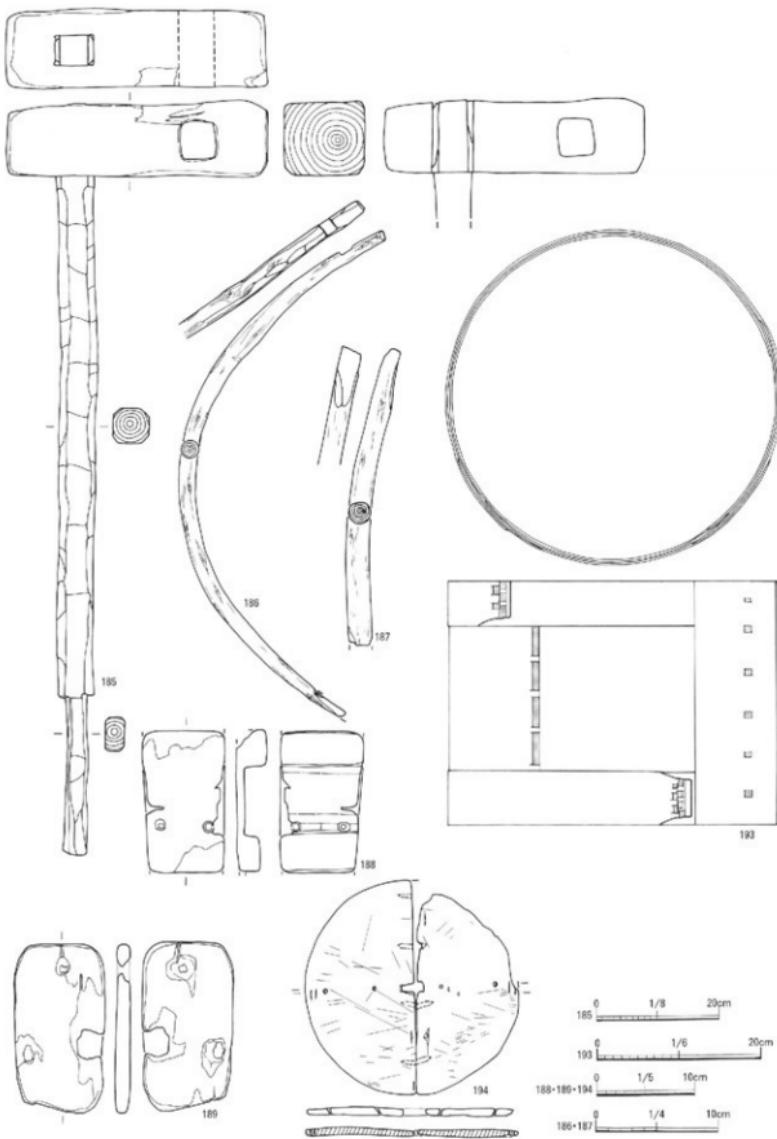
186・187は弧状木製品である。樹皮を除いた細い心持丸木を円状に曲げたもので、端部には切り込み加工が施される。掬網あるいは箕などの枠である可能性が考えられる。

188・189は下駄である。188は台と歯を一木からつくる連歯下駄である。189は歯をもたない無歯下駄である。ほかに連歯下駄の破片が2点出土している。

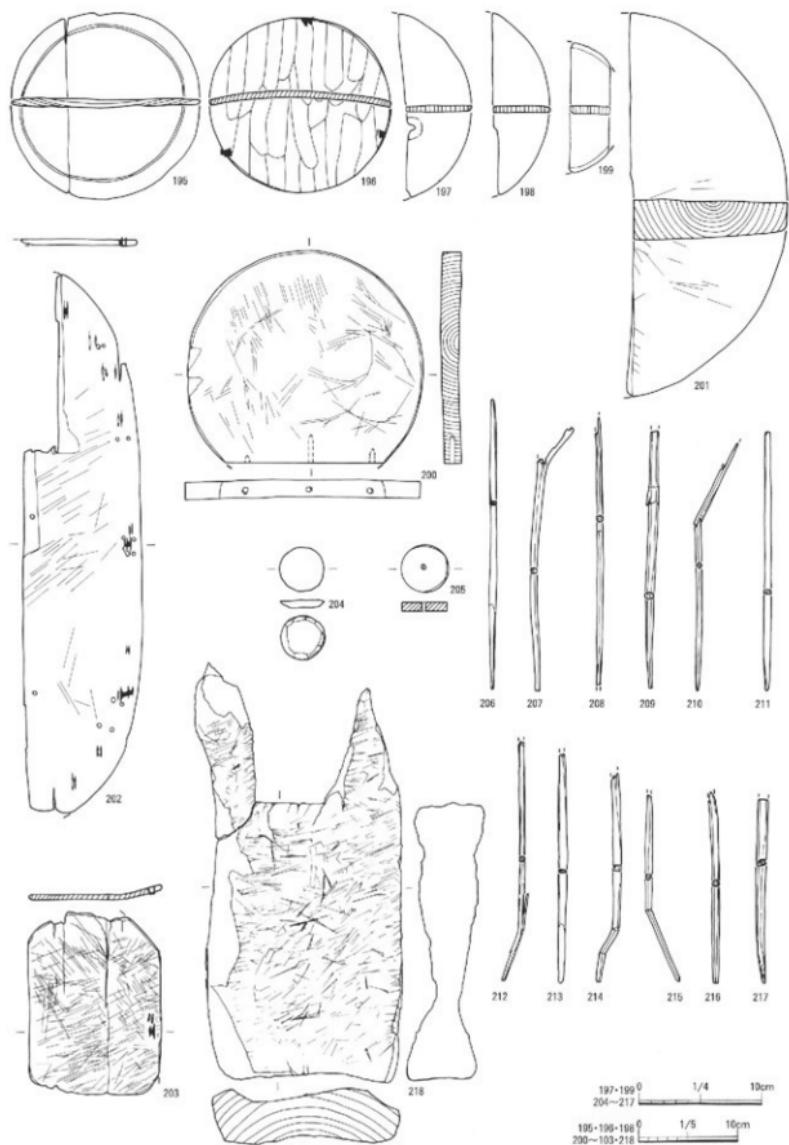
190～192は漆器の椀である。190は総黒色で内外面に漆絵、191は総黒色で内面に漆絵、192は内面赤色で外面上に漆絵が描かれる。漆器は、ほかに12点出土している。いずれも細片で詳細は不明であるが、このうちS X 05からは総赤色で外面上に金の平蒔絵が施された椀が1点出土している。本地の腐食が著しく漆層のみが遺存するもので掲載はしていない。

193～201は円形曲物である。193は井戸（S E 32）の水溜として埋設されていたもので、底板を欠く。上下縁に縫をはめるもので、綴じ合わせはそれぞれ2箇所、2列綴じである。側板の綴じ合わせは3箇所、いずれも1列綴じである。側板の内面には焼け焦げが1箇所みとめられる。火で薄板を炙り、その熱によって材を軟化させて曲げ、そこに水をかけて急冷して曲物の形をつくる方法〔岩井1994〕がとられたものと推測される。結合部がないことから、底板は円板をはめ込むものと思われる。上端をわずかに欠損する。ヒノキ科ヒノキ属。194～196は円形曲物の蓋板である。194は側板を欠くもので、周縁に結合孔をとどめる。中央部に長方形の孔が1箇所あり、つまりもしくは把手が付くものと思われる。使用中に破損したらしく、中央には補修用の釘孔と結合孔が並んで残る。また、これと直交するかたちで釘孔が4箇所一列に並んでいる。表面の変色から細い角棒状のものが付けられていたことがわかる。補修後に付けられた把手であろうか。195は蓋板の周縁に低い段をめぐらすもので、側板の結合はみとめられない。196は側板を欠くもので、周縁の3箇所に結合孔と樺皮紐をとどめる。197～201は円形曲物の底板である。いずれも側板との結合痕をもたないもので、はめ込んで使用したものと考えられる。200は使用中に破損したらしく、補修用の釘孔が3箇所残る。194・200・201は刃物痕をとどめるもので、俎として転用されたものと思われる。

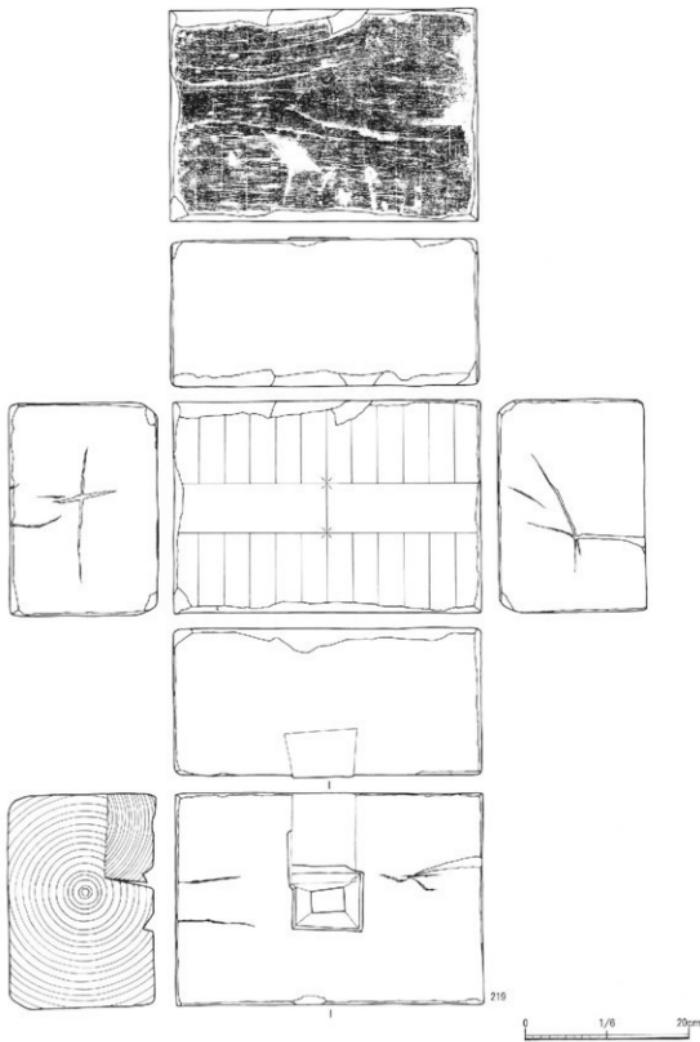
202は梢円形曲物の底板である。周縁には樺皮紐を通す結合孔と釘孔状の小孔が、それぞれ2孔一



第25図 木製品(2)



第26図 木製品(3)



第27図 木製品(4) 双六盤

対となってめぐっている。側板の付け直しがあったものと推測される。また、中央部付近には補修用と思われる小孔がみとめられる。刃物痕をとどめる。

203は長方形もしくは開切り方形曲物の底板である。近接して2箇所に結合孔と檻皮紐が残る。刃物痕をとどめる。

204は蓋板である。断面逆台形状となる小形の薄い円板で、上器類などの容器の蓋として用いられたものと考えられる。割板面をとどめる粗雑なつくりである。

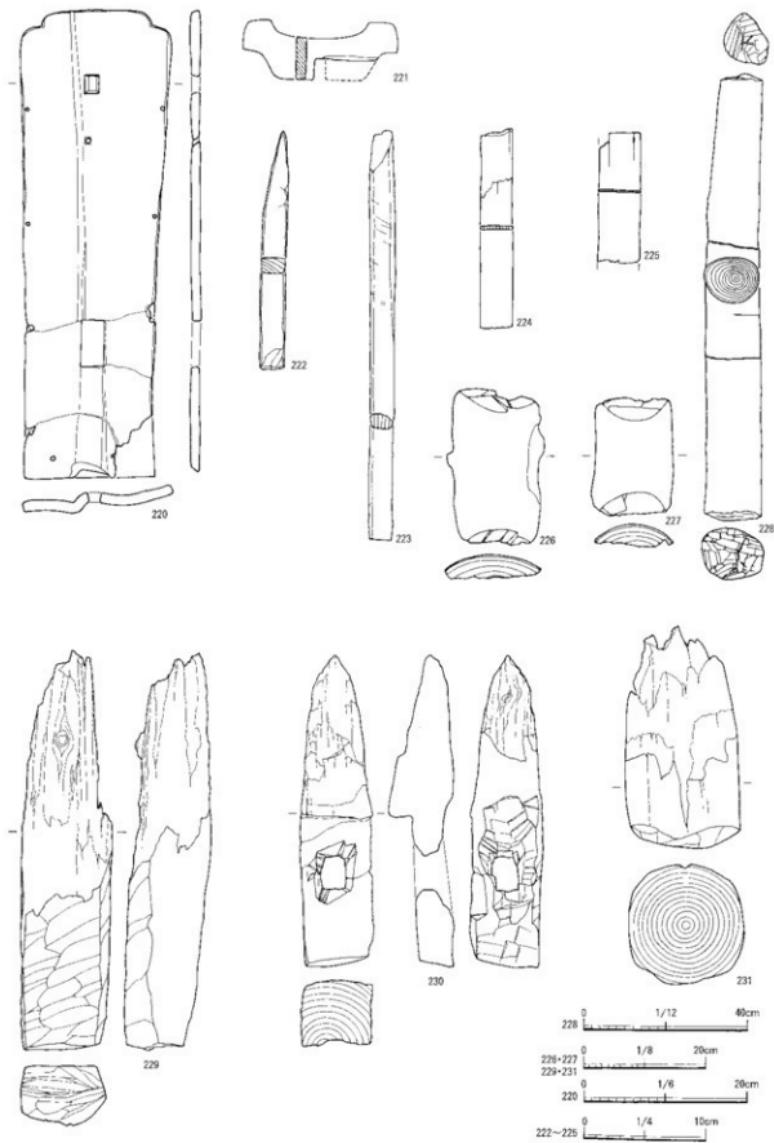
205は紡錘車の紡輪と思われる。断面長方形となる小形の円板で、ほぼ中央に小孔が1箇所穿たれる。表面は丁寧な仕上げで、全体に黒色を呈する。

206~217は箸状木製品である。断面方形から多角形に面取りするもので、両端あるいは片端を細く仕上げる。折れ曲がって欠損したものが多い。総数16点が出土しているが、このうち例外的にS X02から出土した1点を除き、すべて井戸から出土している。出土本数は井戸1基あたり1~4本である。

218は加工台と思われる。表裏面ともに刃痕が著しいもので、切断もしくは削るために台として使用されたと考えられる。原形をとどめないとほど消耗しているが、方形の柄穴が確認できることから、建築部材の転用と考えられる。上端は焼け焦げ、側面には一部樹皮が残る。

219は雙六盤である。平行六面体の形状をもつ厚板の盤で、大きさは長辺37.6cm、短辺26.0cm、高さ18.2cmである。盤面には、刃物を用いた直線的な極細線によって、シンメトリーな区画が施される。区画は、まず長辺に平行して大きく3つに区分され、さらに両端の区画はそれぞれ12個の升目に等分される。長辺の中央には、短辺の端から端までを横断する線があり、左右6升目ずつを区切っている。升目の交点には、それぞれ「米」字状を呈する印が付けられる。各升目は長方形で、長辺10.0cm、短辺3.1cmである。赤外線撮影の結果、細線内には、黒漆もしくは墨と思われるものが、わずかながら残留していることが判明した。いわゆる刀盛りの技法によって界線入れが行われているものと考えられる。短辺の両側面は木口となり、把手（手掛け）は付かない。盤裏には節の痕跡があり、傷になった部分には埋木が1箇所施される。盤裏の中央には、長辺8.4cm×短辺7.0cmの切子形に彫り込まれた四角い窪みが1箇所ある。中央の高まりは裁頭方錐形を呈するもので、埋木が施されたのちに彫り込まれたものである。同様の窪みは、碁盤や将棋盤の裏面にも存在する。一般に「血溜り」あるいは「へそ」と俗称される部位で、機能的には、碁石や駒を打ち下ろしたときの巻き具合や盤の反りを防ぐためのものとされている。実際には、三寸以上の厚い盤になると、こうした効果はほとんど期待できず、なかば装飾的になっている。本資料においても、厚板の盤で脚をもたない構造であることから、機能的には意味をなさない。装飾もしくは製作上の約束事として付加されているものと思われる。器体の表面は、台鉋を使用して平滑に仕上げるが、盤面には消耗がみとめられる。ちなみに、出土した木製品のうち、台鉋の使用がみとめられるのは本資料のみである。心材でつくられたもので、盤面は板目となる。本体はニレ科ケヤキ属ケヤキ、埋木はヒノキ科クロベ属クロベ。駒石や賽、筒などの用具は確認できなかった。

220は板を組合せてつくる箱状の製品と思われる。組合せ部材と考えられる木片が數点まとまって出土しているが、遺存状態が悪く、原形の復元はできなかった。このうち比較的遺存の良好な部材1点を図示する。箱板。長方形の板の一辺を段違いの弧形にかたどるもので、長辺の中軸線上に長方形の透孔が大小2箇所入る。弧形となる一辺を除き、ほかの三辺には釘孔が並んでおり、それぞれ側板なり底板を結合したことがうかがわれる。また、これとは別に、上位1/4の中央には釘孔が1箇所あり、表面の変色から、板もしくは細い角材が横位に留められていたことがわかる。各釘孔には断面方形となる鉄釘の破片が遺存する。土圧により波状に歪む。マツ科マツ属。



第28図 木製品(5)

221は台座と思われる。板の中央に相欠きの仕口があり、同形の板と十字に組合せて使用したものようである。灯明皿を置く燭台の可能性がある。

222～227は用途不明品である。222・223は断面長方形となる細い角棒である。222は一端を斜めに切断して尖らせる。223の一端には焼け焦げがみとめられる。224・225は長方形の薄板である。224は一端が焼け焦げる。火を移し点じるための付木的なものであろうか。226・227は丸木辺部の割板である。両端部をそれぞれ片側から削って片刃状になるよう加工したもので、裏面には割板面をとどめる。取り上げ時点では剥がれたが、表面は樹皮付きであった。

228は樹皮を剥いだだけの丸太である。両端部に斧状工具による切断痕がみえる。その内側には横挽鉗による切断途上の切り込みが3箇所みえるが、間隔は不均一である。

229～231は柱根である。229は心持丸木で、中途半端な面取りが3面施される。230は柄穴のある角材で、建築部材の転用と考えられる。231は心持丸木で、樹皮を除いた程度の加工である。前述した木摺り臼(184)を礎板としてともなう。

#### 獸骨(写真図版18)

232はイヌの骨である。上顎骨右側の破片で、第1前臼歯は脱落、犬歯と第2～4前臼歯が遺存している。生え揃った歯に、ほとんど磨耗がみとめられないことから、生後1～数年の成獣とみられる。犬歯・臼歯の大きさからみて中型犬(体高40～45cm程度)と推定されるが、雌雄は不明である。通常、上顎骨はもっとも遺存しづらい部位であることから、すでに骸骨化した遺体の一部が、何らかの理由で覆上に混入したものと考えられる。写真掲載のみ。

#### 土製品(第29図、写真図版19)

233は驕の羽口である。外面にヘラ削り調整が施されるもので、先端部には熔着滓が付着する。

234～236はスサ入りの粘土塊である。このうち234は頗著な被熱痕がみとめられる。いずれも細片であり、被熱した壁上の可能性も否定できないが、羽口や鉄滓の出土地点とほぼ重複して出土していることから、かず壁の一部であった可能性が考えられる。写真掲載のみ。

#### 金属製品(第29図、写真図版19)

237は畜力用耕具である無床犁の單先と思われる。鋳造品。正面中央に低い縦長の突起が付いており、土の貼り付きを防ぐ工夫とみられる。

238は鉄鍋の脚部である。

239は鉄漿壺である。菊形に成型された薄いつくりで、内外面に金箔が施される。推定口径4.8cm。ほかに鉄漿付(お歯黒)道具に類するものは出土していない。

240～242は錢貨である。いずれも北宋錢で、240は「天禧通宝」(初鑄1017年、真書体)、241は「元豐通宝」(初鑄1078年、行書体)、242は「紹聖元宝」(初鑄1094年、行書体)である。

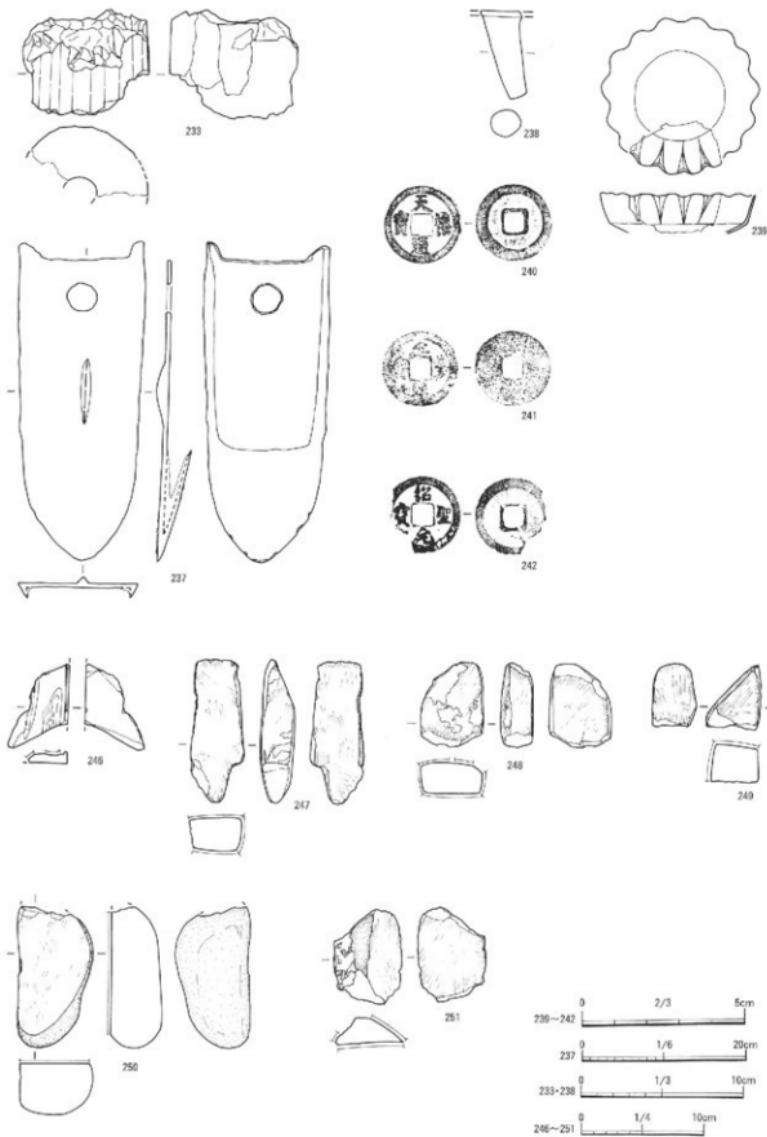
243～245は鉄滓である。写真掲載のみ。

#### 石製品(第29・30図、写真図版19～20)

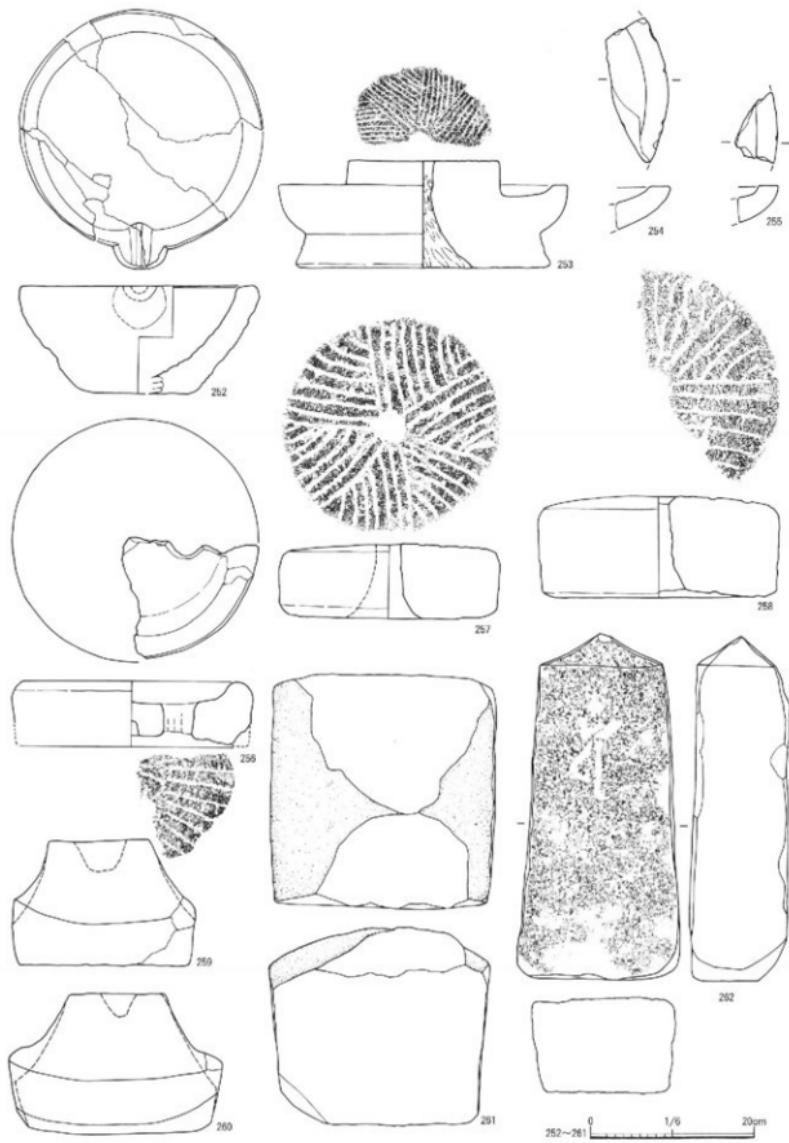
246は硯である。長方硯の破片で、墨草と硯側が確認できる。輝緑凝灰岩を素材とするもので、いわゆる高島青石(滋賀県産)と思われる。破損したち砥石として転用されている。

247～251は磁石である。247～249は断面長方形、251は台形を呈するものである。いずれも頗著な磨耗がみとめられ、破損後も継続して使用されている。250は川原石を利用したもので、片面に平滑な磨面をもつ。上端を欠損する。251は一部自然面を残す。247・249・251は流紋岩、248は凝灰岩、250は輝石安山岩である。

252は石鉢である。紫灰色を呈する輝石安山岩を素材とするもので、口縁の一方に注口が付く。



第29図 土製品、金属製品、石製品(1)



第30図 石製品(2)

253～255は茶臼の下臼である。253の臼の日は8分画7～10溝である。周縁まで目が入り、平滑周縁型とはならない。254・255は受皿部の破片である。253・254は砂岩、255は斑紋岩である。

256～258は石臼である。256は上臼で、もの入れと軸受けが確認できる。257・258は下臼である。257の臼の日は6分画6～8溝である。このうち周縁の1箇所にこぼれ目状の目とりがみえるが、本来的なものではなく、製作上のアクシデントと考えられる。258も6分画と思われる。ともに臼面は凸面形状をなす。256・257は火山礫凝灰岩、258は輝石安山岩である。

259～261は五輪塔である。259・260は火輪。261は地輪の木製品ではないかと思われる。立方体を呈するもので、上面に一部自然面を残す。259・260は輝石安山岩、261は凝灰角礫岩である。

262は石塔である。正面上面に梵字「パン」の一字が刻まれる。崩れた字体であるが、主尊として大日如来（金剛界）を象徴したものと考えられる。輝石安山岩である。

#### 4. 小 結

平成11年度の調査では、中・近世を主体に、断続的ながら古墳時代から江戸時代前期にいたる資料が得られている。このうち、古墳時代と平安時代については、遺物がわずかに出土しているだけで、遺構は検出されていない。

本地区の遺跡は、大まかに中世の居館的な様相を呈する遺構群と、これに後続する近世前期までの井戸や堅穴状遺構を中心とする遺構群からなる。出土遺物から、前者は14世紀から16世紀前半、後者は16世紀後半から17世紀前半の時期が考えられる。

中世の遺構のうち主体となるのは、方形区画に配された溝（SD02・03・14）である。区画内には掘立柱建物や井戸などの存在が想定されるが、現状では後世の遺構による搅乱が著しく、明確に当該期の遺構として把握できるものは少ない。遺物の出土量をみると、14世紀のものはわずかで、時期的には15世紀から16世紀前半を主体とするようである。

16世紀の中頃を境に、遺跡の様相は一変する。それまでの方形区画を中心とした空間的意義が失われたようで、従来の区画を無視するかたちで無秩序的に新たな遺構が構築されるようになる。

本地区の遺跡を特徴づける遺構のひとつとして井戸の存在がある。88基が検出されているが、その大半が16世紀後半から17世紀前半の間に構築されたものである。これらは内部施設を有する大型のものから、不整形な小形のものまで種々雑多な在りようを示す。近隣の農家では、戦後までほぼ同様の浅井戸が使用されており、当地域の地下水は、赤水と呼ばれる比較的鉄分の多い水質であることが知られている。年数を経るごとに井戸の水質は低下し、洗濯すると白い衣類が変色するほどになり、数年で新たに掘り直す必要があったという。SD01においても、完掘後、数週間で溝内に赤褐色を呈する沈殿物が観察されている。検出されたこれらの井戸は、長期間使用することによって水質の悪化を招き、これを要因として、逐次、掘り直しを余儀なくされた可能性がある。

本地区から出土した遺物のうち、遺跡の性格を示すような特徴的な遺物として、次のようなものがある。鉄漿付道具のひとつである鉄漿壺、調査区北側に鍛冶の存在をうかがわせる羽口や鉄鋤、室内遊戯具である双六盤、茶臼、五輪塔、石塔、畜力用耕具である無床犂の犂先、耕掘り用の臼である木摺り臼などである。ほかに、遺物そのものではないが、遺跡の性格を示すものとして、墨書きが施された小皿の出土がある。SD02から出土した肥前端反皿（86）、SD01から出土した越中瀬戸丸皿（104）である。ともに高台内に、家印の「トリアシ」とみられる墨書きが施される。家印は、各家の所用を示すもので、一般には各家で用いる家財道具につける印をいう。通常、簡単な記号が用いられており、「トリアシ」も広く一般的にみられる印のひとつである。確認された家印は1種類であるが、以下の

ような事柄がわかっている。ともに16世紀末から17世紀初頭の遺物であること、SD01とSD02から同じ家印をもつものが出土していること、こうした家印は基本的に庶民の共同生活のなかで使用されるものであるこの3点である。中世の居館が機能を停止したのちの遺跡の性格を知るうえで、示唆に富む資料である。

#### 引用・参考文献（第Ⅰ～Ⅲ章共通、P79へ続く）

- 秋山高志ほか編 1991『図録・農民生活史事典』柏書房  
石川県埋蔵文化財センター 1992『特別名勝 兼六園（江戸町跡推定地）発掘調査報告』  
岩井宏實 1994『曲物』ものと人間の文化史75 法政大学出版局  
岩田隆 1997「越前」「中・近世の北陸－考古学が語る社会史－」北陸中世土器研究会  
池野正男 1996「越中における9世紀代の土器様相」「北陸の9世紀代の土器様相」北陸古代土器研究会  
宇野隆夫 1982「川戸考」「史林」第65巻5号  
上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」「貿易陶磁研究」第2号 日本貿易陶磁研究会  
越中の歴史と文化を考える会1982『特集・白岩川流域をめぐる諸問題』『かんとりい』No.6  
小野正敏 1982「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」「貿易陶磁研究」第2号 日本貿易陶磁研究会  
小野正敏編 2001『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会  
大島町教育委員会2000『富山県射水郡大島町水上・本開発遺跡－近世北陸道発掘調査報告一』  
大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社  
大橋康二 2000『九州陶磁概論』『九州陶磁の編年』九州近世陶磁器学会10周年記念 九州近世陶磁器学会  
加賀真樹 1997「珠洲」「中・近世の北陸－考古学が語る社会史－」北陸中世土器研究会  
鹿島丹也1998「富山・清水堂F遺跡」「木簡研究」第20号 木簡学会  
金沢市埋蔵文化財センター1999『堅田B遺跡発掘調査概報』  
久々忠義 2001「弥生農村の風景と政治社会の誕生！『ふるさと富山歴史館』富山新聞社  
国立歴史民俗博物館編 1993『日本出土の貿易陶磁 西日本編I』国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書4  
鶴瀬戸市埋蔵文化財センター1995『研究紀要』第3輯  
鶴瀬戸市埋蔵文化財センター1997『研究紀要』第5輯  
鶴北海道埋蔵文化財センター1992『調査年報5』  
◎北海道埋蔵文化財センター1994『遺物が語る北海道の歴史』  
酒井重洋 1985『III 京ヶ峰古窯跡」「長山遺跡・京ヶ峰古窯跡 緊急発掘調査概要』八尾町教育委員会  
酒井重洋 1997『八尾窯（京ヶ峰古窯）』『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会  
佐藤正勝1986『サケーつくる漁業への挑戦』岩波新書360  
淡沢敬一1954『日本水産捕採誌』下巻 同文館  
島田美佐子 1997「丸塚」「中・近世の北陸－考古学が語る社会史－」北陸中世土器研究会  
高岡市教育委員会1995『石塚遺跡調査概報III』  
立山町教育委員会1990『辻遺跡－第2次発掘調査報告書一』  
立山町教育委員会1994『稚児塚古墳－第1次発掘調査報告一』  
徳山暉純 1976『梵字手帳』木耳社  
富山県1980『富山県史』史料編III 近世上  
富山県教育委員会1973『富山県内漁村地域民俗資料緊急調査報告書』その2（県東部）  
富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1996『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』  
富山考古学会企画委員会 1999 富山考古学会創立50周年記念シンポジウム『富山平野の出現期古墳』《発表要旨・資料集》  
富山市教育委員会 1997『富山市水橋金広・水橋田伏南・清水堂F・清水堂B遺跡』  
富山市教育委員会 1998『富山市水橋清水堂E・F遺跡』  
富山市教育委員会 1999『富山市H S-07遺跡』

表1 井戸一覧表(1)

遺構番号	位置	規模		漏水層深	出土遺物	遺物No.	時期・備考
		長径×短径	深さ				
SE01	X370, Y995	0.86×0.80	1.14	0.56	須恵器壺1、中世土師器3、珠洲壺1、石塔1	262	16C中～後
SE02	X370, Y995	0.82×0.56	1.06	0.34	小世土師器3、珠洲壺2、鉄錆1、種実(イネ・アサ・ソバ・メコン類)	141・238	16C中～後
SE03	X375, Y995	1.16×0.94	1.28	0.50	中世土師器1、越中瀬戸丸皿1	102	16C末～17C初
SE04	X380, Y995	2.34×(2.20)	2.15	1.53	須恵器壺1A、土師器1、中世土師器7、青磁碗1、斐付碗1、瀬戸美濃天口177・175～茶碗1、越中瀬戸丸皿1、珠洲壺2、越前壺1、円形曲物1、舟形曲物1、漆器2、砾石1	51・59・70・117・175・178・192・197・198・202・248	17C前～中、縦板組構柱横棟どめ
SE05	X380, Y995	1.14×1.02	1.16	0.48	軽輪1、箸状木製品2、種実(クルミ)	205・210・215	
SE06	X380, Y990	0.66×0.62	0.90	0.16			
SE07	X375, Y990	0.96×0.94	1.10	0.40	須恵器壺1、中世土師器4		16C中～後
SE08	X385, Y985	1.28×-	1.16	0.38	土師器1、中世土師器11、瀬戸美濃茶入1、越中瀬戸丸皿2・抹鉢1、越前壺1、円形曲物1、蓋1、用途不明品1、種実(トウガラ・メコン類)、茶臼1	8・9・15・16・20・21・30・32・50	17C前～中
SE09	X385, Y975	1.58×1.44	2.12	1.33	土師器2、中世土師器1、越中瀬戸圓鉢1、珠洲壺1、越前壺2、砾石1	22・136・142・251	16C末～17C中、右鉢1、縦板組構柱横棟どめ
SE10	X385, Y985	1.20×	1.18	0.44			
SE11	X375, Y985	1.12×0.94	0.82	0.20	中世土師器2、種実(クルミ)		16C中～後
SE12	X375, Y980	1.30×(1.22)	1.26	0.36	中世土師器6、珠洲壺1、瀬戸美濃端反皿1・丸皿1、肥前端反皿1、越中瀬戸丸皿1、越前壺1	23・78・87・109・174	17C前～中
SE13	X385, Y990	1.22×0.98	1.00	0.26			
SE14	X385, Y990	1.34×	1.03	0.08			
SE15	X380, Y995	2.50×-	1.90	1.30	土師器1、中世土師器3、瀬戸美濃天目茶碗1、吹硝窯2・片口鉢3、円形曲物1、弧状木製品1、茗状木製品2、北宋1、瓦輪芯地輪1、種実(モモ)	37・152・153・155・180・181・187・206・211・240・261	16C中～後、縦板井籠組
SE16	X375, Y995	0.74×0.70	1.16	0.40			
SE17	X370, Y995	1.30×1.28	1.12	0.42	中世土師器8、瀬戸美濃丸皿1、越中瀬戸折縁皿1	8・12	16C末～17C初
SE18	X370, Y990	0.96×0.70	0.84	0.16			
SE19	X385, Y990	1.02×(0.80)	1.00	0.22	珠洲壺1、越中瀬戸折縁皿1	99・148	16C末～17C初
SE20	X370, Y995	0.94×0.80	0.68	0.20			
SE21	X375, Y985	0.88×0.78	1.00	0.38	中世土師器2、瀬戸美濃天目茶碗1		
SE22	X375, Y980	(1.22)×-	1.14	-	土師器1、中世土師器1、越中瀬戸丸皿1・大皿1、越前壺1、横槌1、箸状木製品3	26・103・123・183・207・209・217	16C末～17C初
SE23	X375, Y980	1.44×(1.38)	1.24	0.36	中世土師器3、越中瀬戸丸皿2、珠洲壺3、箸状木製品2	113・213・214	17C前～中
SE24	X380, Y990	1.72×(0.90)	1.02	0.24			
SE25	X380, Y990	0.70×0.60	0.86	0.02	中世土師器4、珠洲壺1・片口鉢1		16C中～後
SE26	X385, Y995	1.10×1.00	0.74	0.12			
SE27	X375, Y990	1.16×0.88	0.86	0.20	中世土師器7、珠洲壺1、越前壺1	18	16C中～後
SE28	X385, Y995	1.24×0.94	0.80	0.30			
SE29	X380, Y990	1.56×1.24	1.20	0.38	箸状木製品1	208	
SE30	X370, Y990	1.28×1.00	1.04	0.30			
SE31	X370, Y985	0.84×0.80	1.04	0.34	石臼1	258	
SE32	X370, Y985	1.10×0.92	1.39	0.47	越中瀬戸水滑1、円形曲物1	134・193	16C末～17C中

表2 井戸一覧表(2)

遺構番号	位置	規模		漏水層深	出土遺物	遺物No.	時期・備考
		長径×短径	深さ				
SE33	X375, Y995	0.72×0.66	0.80	0.30			
SE34	X375, Y995	0.90×0.68	0.94	0.24			
SE35	X375, Y995	0.66×0.65	0.80	0.16			
SE36	X395, Y985	1.18×1.12	1.22	0.62	中世土師器1、瀬戸美濃丸皿1、珠洲 甕2、越前甕1	77・166	16C中～後
SE37	X375, Y995	0.90×0.72	0.62	0.32	中世土師器4、瓦質土瓶1、磁石1		16C中～後
SE38	X380, Y980	1.64×1.44	1.18	0.48	珠洲甕1、漆器碗1		
SE39	X380, Y990	1.42×1.24	1.18	0.26	須恵器甕1、中世土師器5		
SE40	X385, Y985	1.06×-	1.14	0.26			
SE41	X385, Y985	1.68×	1.08	0.26			
SE42	X385, Y985	1.09×0.84	1.16	0.40			
SE43	X385, Y985	1.14×0.86	1.02	0.40	中世土師器2、越中瀬戸模様鉢1	29・32・125	17C前～中
SE44	X385, Y985	1.24×(1.06)	1.24	0.44	土師器甕1、中世土師器7、珠洲甕1	1・43	16C中～後
SE45	X380, Y980	1.06×-	0.80	0.04			
SE46	X380, Y980	1.12×1.02	0.90	0.06			
SE47	X380, Y990	1.14×0.92	1.10	0.18	中世瓦器2、箸状木製品1	217	16C中～後
SE48	X375, Y995	0.96×(0.80)	0.66	0.10	中世土師器5	40	16C中～後
SE49	X370, Y995	0.70×0.52	0.62	0.02			
SE50	X380, Y975	1.44×1.20	0.84	0.08			
SE51	X380, Y980	0.56×0.54	0.68	0.00			
SE52	X380, Y980	0.72×0.58	0.90	0.07			
SE53	X375, Y995	1.12×0.52	0.72	0.12			
SE54	X375, Y985	0.98×0.72	0.78	0.04			
SE55	X370, Y990	0.68×0.62	0.22	0.16			
SE56	X370, Y990	0.72×0.50	0.52	0.42	越中瀬戸丸口1、長方形曲物1	105・203	16C末～17C初
SE57	X375, Y990	(1.30)×0.94	0.95	0.20	中世土師器2、瀬戸美濃碗類1、珠洲 甕1、北宋甕1	19・241	16C
SE58	X375, Y980	0.94×0.86	1.18	0.16	凹形曲物	196	
SE59	X380, Y980	1.06×(0.68)	0.66	0.17			
SE60	X385, Y980	0.94×0.88	0.96	0.28			
SE61	X380, Y980	1.00×-	0.64	0.04			
SE62	X385, Y985	1.06×	1.04	0.40	中世土師器1、珠洲甕1		16C中～後
SE63	X385, Y980	-×1.56	1.04	0.30	中世土師器3、越前甕1	164	
SE64	X385, Y980	0.86×(0.62)	0.84	0.18	用途不明品2	226・227	
SE65	X375, Y990	0.60×0.60	0.90	0.24			
SE66	X370, Y985	0.41×0.42	0.60	0.14	旅器甕1		
SE67	X375, Y900	0.70×0.64	0.28	0.08			
SE68	X380, Y995	0.80×(0.58)	1.10	0.54	中世土師器2、歯骨(イヌ)1、箸状 木製石1	212・232	16C中～後
SE69	X380, Y995	1.24×(0.76)	0.70	0.16			
SE70	X390, Y985	0.88×0.82	0.56	0.06	七筋甕2、越中瀬戸蓋1、越前甕1、粘 土塊1	234	
SE71	X390, Y985	0.76×0.76	0.88	0.54	越前甕1、漆器碗1、粘土塊1、瓦輪塔 火輪1	236・259	
SE72	X390, Y985	1.24×1.14	1.06	0.50			
SE73	X390, Y985	1.34×1.22	0.84	0.36	中世二郎器4、染付皿1、肥前鉢類1、 越中瀬戸丸皿2、八尾甕1、越前甕1	63・90・118	16C中～後
SE74	X375, Y980	0.84×0.82	0.58	0.38	肥前端反碗1、珠洲片口鉢1	85・157	16C末～17C初
SE75	X375, Y975	1.10×1.94	0.70	0.28	中世土師器2		
SE76	X370, Y975	0.78×0.66	1.30	0.60			
SE77	X365, Y995	0.88×0.82	1.52	1.10			
SE78	X380, Y900	(0.74)×	0.90	0.18			

表3 井戸一覧表(3)

遺構番号	位置	規模		潜水層深	出土遺物	遺物No.	時期・備考
		長径×短径	深さ				
SH79	X380, Y000	(0.94) × -	1.06		中世土師器5、珠洲甕1	39	16C中～後
SE80	X375, Y000	(0.48) × 0.52	0.40	0.20			
SE81	X380, Y000	0.62 × 0.56	0.64	0.16			
SE82	X375, Y000	1.40 × (1.14)	0.60	0.14	中世土師器1、越中瀬戸丸皿1、天目茶碗1、越前甕1	48・101	
SE83	X375, Y000	0.78 × 0.64	0.84	0.26	珠洲甕2		
SE84	X375, Y000	0.48 × 0.34	0.66	0.16			
SE85	X375, Y000	(0.98) × (0.32)	0.88	0.40	中世土師器2	46・47	
SE86	X370, Y000	0.74 × 0.66	0.52	0.12	中世土師器1、珠洲甕1		16C中～後
SE87	X365, Y000	0.66 × 0.58	0.84	0.30			
SE88	X365, Y080	0.68 × 0.66	0.98	0.56			

表4 溝一覧表(1)

遺構番号	位置	規模(m)		中軸方位	出土遺物	遺物No.	時期・備考
		全長	上幅				
SD01	調査区北端	(30.50)	3.15～4.40	0.75～0.85	東西 土師器高环3・甕2・壺1、須恵器 环13・甕8、中止1・土器30、青磁 碗2、付合1、瀬戸美濃九輪1、 丸皿1・壺1、越中瀬戸天目茶碗 1・丸碗1・丸皿6・天目1・甕2・ 播鉢9・水指1・鉢鉢3・八尾甕2、 珠洲甕25・壺2・片口鉢9、越前甕 3・播鉢2、四形山物1・下駄4、漆 器椀4、用途不明品1、羽口1、粘 土塊1、鐵津3	3・8・10・13・14・17・ 20・49・53・61・71・ 79・83・94・98・104・ 110・111・114・121・ 127～131・135・137・ 138・154・156・158・ 168・169・188～190・ 199・225・233・235・ 243～245	17C前～中、 瀬戸を掘り抜いて 構築、底面は ほぼ水平
SD02	調査区北側	(20.00)	3.50～9.10	0.28～0.50	東西 土師器1、須恵器B1・甕7、中 世土師器42、瀬戸美濃丸皿1・丸 皿2、肥前端反1・丸、越中瀬戸天目 茶碗3・丸碗1・丸皿3・水指1・ 鉢1・八尾甕1・珠洲甕11・片口鉢 3、越前甕1・壺1・播鉢1、不明金 屬製品1、瓦1、砾石1	16・41・42・76・86・ 95・96・97・116・119・ 133・145・151・159・ 165・167・246	17C前～中、 SD03・14と一連 の溝、東側は溶 水層を掘り抜いて 構築、底面は わずかに東へ傾 斜
SD03	調査区西側	(28.00)	1.40～2.80	0.06～0.28	南北 中世土師器2、八尾甕1、珠洲甕 1・片口鉢3、越前甕1	150	SD02・14と一連 の溝、底面はほ ぼ水平
SD04	調査区北側	(4.30)	0.80～1.40	0.04～0.10	南北 中世土師器1		底面はわずかに 北へ傾斜
SD05	調査区南側	(4.90)	0.20～0.30	0.02～0.06	南北		底面はほぼ水平
SD06	調査区西側	(27.50)	0.42～1.50	0.10～0.44	南北 中世土師器48、白磁皿1・小杯1、 染付碗1・皿1、瀬戸美濃天日茶碗 1・丸皿1・八尾甕2・珠 洲甕7、越前甕3・播鉢1	56・57・62・66・106・ 140・173	17C前～中、西 へし字上に曲が る、底面はほぼ 水平
SD07	調査区北東側	7.00	0.38～0.70	0.36～0.49	南北 肥前1・丸皿1、珠洲甕2、越前甕1	89	SD01・02を繋ぐ、 底面は北へ傾斜
SD08	調査区北西側	(14.60)	0.30～0.70	0.10～0.35	東西 肥前碗1	91	17C中～後、底 面はわずかに東 へ傾斜
SD09	調査区北西側	(8.80)	0.30～0.54	0.05～0.15	東西 土師器高环1	6	底面はわずかに 東へ傾斜
SD10	調査区北西側	(5.70)	0.60～1.10	0.01～0.22	東西 珠洲甕1	147	底面はほぼ水平
SD11	調査区北西側	(5.00)	0.40～0.90	0.01～0.36	東西 須恵器環A1	15	底面はほぼ水平

表 5 溝一覧表(2)

遺構番号	位置	規模(m)			中軸方位	出土遺物	遺物No.	時期・備考
		全長	上幅	深さ				
SD12	調査区南側	(1.70)	0.40~0.48	0.04	南北			底面はほぼ水平
SD13	調査区南側	(6.30)	0.25~1.00	0.05~0.07	南北			底面はわずかに南へ傾斜
SD14	調査区南側	(18.00)	0.90~2.35	0.20~0.28	東西	中世土師器8、青磁棲花皿1、染付碗1、肥輪ひだ口1、越中瀬戸大口茶碗1、丸皿1、珠洲甕9、蓋1、越前甕1、縁器碗1、種実(モモ)	44・54・58・88・93・146	16C末~17C初、SD02・03と一緒に溝、底面はほぼ水平
SD15	調査区南側	(24.00)	0.54~0.75	0.20~0.37	東西	須恵器環B蓋1、中世土師器5、八尾甕1、珠洲甕3、越前甕2、縁器碗1、漆器椀1、月途不明品1	35・36・162・170・222	16C中~後、SD03・14と平行して切る、底面はわずかに北へ向かって傾斜
SD16	調査区南西側	(5.30)	0.40~0.10	0.07~0.20	東西			底面はわずかに西へ傾斜
SD17	欠番	-	-	-	-			-
SD18	欠番	-	-	-	-			-
SD19	調査区東端	(21.00)	0.42~1.40	0.10~0.20	南北	越中瀬戸丸皿1	112	17C前~中、東へ「L」字状に屈曲する、底面はわずかに北へ傾斜
SD20	調査区西端	(7.00)	0.30~0.58	0.07~0.10	南北			底面はわずかに北へ傾斜

表 6 穴状遺構一覧表

遺構番号	位置	平面形状	規模			帶水	出土遺物	遺物No.	時期・備考
			長径	短径	深さ				
SX01	X375, Y990	隅丸方形	4.30	4.00	0.20	-	須恵器环B1・环A1・壺2、中世土師器25、瀬戸天目窓口皿1、越中瀬戸丸皿4・大皿1、珠洲甕3・片口鉢1、越前甕1	9・21・38・74・115・122	17C前~中
SX02	X385, Y975	隅丸長方形	(4.35)	3.70	1.04	0.41	土師器2、須恵器環B1・环A1・壺2、中世土師器6、瀬戸天目窓口皿1、珠洲甕1、越前甕2、縁器1、弧状木製品1、漆器椀3、円形曲物2、箸状木製品1、双穴甕1、台座1、丸木1、用途不明品1、壺先1、砥石2、蓋1	12・30・33・64・161・185・186・191・200・201・219・221・223・228・237・255	16C中~後
SX03	X375, Y975	隅丸方形	3.38	(3.10)	0.47	-	土師器甕1、漆器椀1	5	
SX04	X370, Y980	隅丸長方形	6.30	1.55	1.08	0.45	土師器甕1・壺1、中世土師器6、瀬戸天目窓口皿1、越中瀬戸丸皿1、八尾甕1、珠洲甕1・片口鉢1、越前縁器1、箱1、茶臼1	2・4・31・68・120・141・149・220・253	17C前~中、「く」の字状に屈曲する
SX05	X365, Y990	隅丸長方形	4.85	3.35	0.47	-	土師器1、染付皿1、瀬戸天目窓口皿1、越中瀬戸水指1、越前甕1、漆器椀1、種実(モモ)	60・69・132	16C末~17C中

表7 土坑一覧表(1)

遺構 番号	位 置	平面形状	規 模 (m)			出土遺物	遺物No.	時期・備考
			長径	短径	深さ			
SK01	X370, Y990	円形	1.97	1.79	0.25	白世土師器9		16C中～後
SK02	X380, Y990	楕丸方形	1.55	1.20	0.37	〔世土師器21、青磁碗2、瓶戸美濃端反皿1・鉢皿1、越前壺〕	25・50・52・80	16C中～後
SK03	X375, Y975	円形	1.05	0.85	0.44			
SK04	X375, Y980	円形	1	0.98	0.54	中世土師器1		
SK05	X380, Y980	円形	0.87	0.75	0.56			
SK06	X380, Y980	楕丸方形	1.94	1.25	0.14			
SK07	X385, Y980	不整形	1.75	(1.28)	0.26			
SK08	X385, Y985	円形	(0.90)	1.00	0.73			
SK09	X370, Y995	円形	0.75	0.75	0.33	中世土師器1		
SK10	X370, Y995	—	(0.75)	0.80	0.32			
SK11	X375, Y995	円形	0.70	0.65	0.83			
SK12	X395, Y990	楕丸長方形	2.46	1.78	0.26	須恵器壺H1、中世土師器3、珠洲 壺2、越前壺1	11・143・ 163	
SK13	X385, Y985	—	(0.60)	0.65	0.48			
SK14	X380, Y990	円形	(0.65)	0.58	0.67			
SK15	X380, Y985	円形	0.86	0.74	0.24			
SK16	X380, Y985	円形	1.22	0.96	0.50			
SK17	X375, Y985	円形	(1.15)	1.10	0.54			
SK18	X375, Y985	円形	(0.80)	(0.50)	0.22			
SK19	X375, Y985	円形	0.83	0.65	0.71			
SK20	X375, Y985	円形	1.15	(1.01)	0.41			
SK21	X375, Y985	楕円形	(0.96)	0.76	0.55			
SK22	X375, Y985	円形	(0.36)	0.50	0.34			
SK23	X370, Y985	楕丸長方形	(3.02)	1.70	0.46	土師器1、中世土師器3		16C中～後、大形
SK24	X370, Y985	円形	0.92	0.85	0.61	白世土師器1		
SK25	X365, Y985	楕丸方形	2.08	1.87	0.28	中世土師器5、珠洲壺1		16C中～後
SK26	X380, Y985	—	0.84	(0.45)	0.47			
SK27	X375, Y980	円形	1.28	1.20	0.57			
SK28	X380, Y975	楕丸方形	1.20	1.16	0.45	中世土師器4、不明鉄製品2		
SK29	X380, Y975	円形	1.30	1.14	0.56			
SK30	X380, Y975	不整形	2.36	(1.85)	0.35	中世土師器1、肥前皿1		16C末～17C初
SK31	X370, Y995	円形	(0.72)	0.75	0.60	土師器2、中世土師器2	7・45	
SK32	X380, Y990	楕丸方形	0.67	0.60	0.35			
SK33	X370, Y995	不整形	0.58	0.53	0.33			
SK34	X380, Y975	楕円形	0.34	0.28	0.36			
SK35	X385, Y980	楕円形	(0.97)	0.75	0.42	石臼1	256	
SK36	X370, Y990	円形	0.95	0.70	0.59			
SK37	X370, Y985	—	(0.45)	0.48	0.46			
SK38	X370, Y985	円形	1.38	(0.65)	0.51			
SK39	X370, Y990	円形	0.99	0.60	0.51			
SK40	X370, Y990	不整形	1.08	(0.95)	0.48			
SK41	X380, Y985	円形	0.55	0.50	0.51			
SK42	X370, Y980	円形	0.50	0.44	0.11	瀬戸美濃青花 青花描金1	81	
SK43	X375, Y995	円形	1.00	0.80	0.65			
SK44	X375, Y995	円形	0.55	0.53	0.29			
SK45	X375, Y995	楕丸方形	0.83	0.73	0.28			
SK46	X380, Y995	円形	0.68	0.58	0.22			
SK47	X385, Y980	楕円形	(0.38)	0.54	0.18	石臼1	252	
SK48	X385, Y990	楕丸方形	(1.10)	(0.95)	0.49	越前青花描金1	172	16C前
SK49	X385, Y990	円形	1.55	(1.20)	0.43	中世土師器1		15C前
SK50	X390, Y990	円形	0.88	0.75	0.30			

表8 土坑一覧表(2)

遺構番号	位置	平面形状	規模(m)			出土遺物	遺物No.	時期・備考
			長径	短径	深さ			
SK51	X375, Y995	-	1.30	-	0.84	須恵器甕1、中世土師器1、珠洲甕1、灰1、木摺り臼1、柱根1、	182・184・231	16C中～後、柱穴か、試掘トレンチに別られる
SK52	X375, Y995	-	1.10	-	0.65	加工台1、石臼1	218・257	試掘トレンチに切られる
SK53	X375, Y995	-	1.16	-	1.11	-	-	試掘トレンチに切られる
SK54	X375, Y980	楕円形	0.90	0.73	0.66	瓦輪塔火輪1	260	-
SK55	X380, Y980	楕円形	0.87	0.50	0.55	-	-	-
SK56	X385, Y980	-	1.14	1.00	0.38	-	-	-
SK57	X390, Y980	隅丸長方形	1.84	0.85	0.33	-	-	-
SK58	X390, Y980	長方形	1.90	1.00	0.22	-	-	-
SK59	X370, Y980	-	1.88	(0.52)	0.20	越前甕1	-	-
SK60	X390, Y975	-	(2.08)	(1.10)	0.30	-	-	-
SK61	X360, Y900	隅丸長方形	(1.85)	(0.65)	0.23	-	-	-
SK62	X390, Y985	長方形	2.35	-	0.90	0.19	-	-
SK63	X370, Y985	円形	0.61	0.60	0.50	-	-	-
SK64	X375, Y980	隅丸長方形	3.95	2.40	0.56	須恵器甕1、中世土師器2、珠洲甕2、越前甕1	34	16C中～後、大形
SK65	X375, Y900	楕円形	0.71	0.51	0.58	-	-	-
SK66	X370, Y900	-	(0.86)	0.57	0.43	-	-	-
SK67	X370, Y900	円形	0.84	(0.63)	0.51	-	-	-
SK68	X380, Y900	-	(3.60)	(0.85)	0.37	越中源丸皿1、珠洲甕1・片口鉢1	-	17C、浅く大形
SK69	X375, Y900	円形	0.95	(0.80)	0.41	須恵器甕1	-	-
SK70	X370, Y900	-	(3.00)	(1.80)	0.07	-	-	浅く大形
SK71	X365, Y900	隅丸長方形	(1.24)	0.84	0.45	-	-	-
SK72	X365, Y985	円形	1.00	0.98	0.37	中世土師器1	-	-
SK73	X365, Y975	円形	1.13	1.04	0.54	中世土師器2	-	16C中～後
SK74	X360, Y975	-	(1.77)	(1.29)	0.13	-	-	-
SK75	X360, Y985	円形	0.97	0.97	0.63	-	-	-
SK76	X365, Y995	不整楕円形	1.42	0.90	0.91	-	-	-
SK77	X365, Y995	楕円形	0.71	0.49	0.38	-	-	-

表9 小ピット一覧表(1)

遺構番号	位置	規模(m)			柱根	計測値(cm)	出土遺物	遺物No.	時期・備考
		長径×短径	深さ	・杭					
P01	X365, Y990	0.34×0.30	0.58	丸木	現存長(40.0)、径19.0	-	-	-	-
P02	X375, Y995	0.32×0.26	0.19	丸木	現存長(23.0)、現存径(5.5)	-	-	-	-
P03	X375, Y995	0.38×0.38	0.48	丸木	現存長(8.0)、現存径(12.0)	-	-	-	-
P04	X375, Y990	0.44×0.10	0.67	角材	現存長(56.2)、径10.6×12.0	-	-	230	?穴
P05	X380, Y985	0.77×0.68	0.32	角材	現存長(36.0)、径11.0×14.0	-	-	-	-
P06	X365, Y995	0.56×0.45	1.27	丸木	現存長(40.5)、径13.0	-	-	-	-
P07	X375, Y985	0.563×0.43	0.63	丸木	現存長(43.5)、径19.0	-	-	-	-
P08	X375, Y980	0.34×0.31	0.33	丸木	現存長(61.0)、径10.0	-	-	-	-
P09	X375, Y990	0.14×0.08	0.70	丸木	現存長(55.5)、径17.0	-	-	-	-
P10	X375, Y985	0.54×0.49	0.41	丸木	現存長(44.5)、径30.0	-	-	-	-
P11	X380, Y980	0.46×0.34	0.31	丸木	現存長(9.5)、径15.0	-	-	-	-
P12	X375, Y980	0.75×0.46	0.36	丸木	現存長(65.4)、径14.8×9.8	中世土師器1、鐵費環1	-	239・229	面取り
P13	X375, Y990	0.46×0.39	0.24	丸木	現存長(18.5)、径10.5	-	-	-	-
P14	X370, Y995	0.56×0.45	0.53	丸木	現存長(33.5)、径14.5	-	-	-	-
P15	X370, Y995	0.41×0.39	0.26	丸木	現存長(20.0)、径20.0	-	-	-	-

表10 小ピット一覧表(2)

遺構 番号	位 置	規 模 (m)		柱根 ・杭	計測値 (cm)	出土遺物	遺物No.	時期・備考
		長径×短径	深さ					
P16	X370, Y995	0.48×0.39	0.78	丸木	現存長(80.5)、径16.5			
P17	X365, Y990	0.37×0.28	0.31	丸木	現存長(11.5)、現存径(6.0)			
P18	X370, Y990	0.31×0.26	0.33	丸木	現存長(27.5)、現存径(8.0)			
P19	X370, Y995	0.36×0.28	0.37	丸木	現存長(18.5)、径10.5			
P20	X375, Y990	0.35×0.34	0.14	丸木	現存長(10.5)、現存径(7.5)			
P21	X380, Y985	0.30×0.26	0.65	丸木	現存長(24.0)、径9.0			
P22	X375, Y975	0.36×0.34	0.69	—	—	種実(モモ)		
P23	X375, Y975	0.40×0.34	0.57			不明歯骨1		
P24	X365, Y990	0.32×0.31	0.32	丸木	現存長(17.0)、現存径(13.0)			
P25	X365, Y995	0.35×0.29	0.27	丸木	現存長(19.5)、現存径(8.0)			
P26	X360, Y995	0.58×0.43	0.26	丸木	現存長(7.5)、現存径(8.5)			
P27	X375, Y985	0.24×0.22	0.33	角材	現存長(37.5)、径9.2			面取り
P28	X375, Y985	0.34×0.30	0.32	丸木	現存長(7.0)、現存径(23.0)			
P29	X365, Y000	0.47×(0.33)	0.14	丸木	現存長(21.0)、径16.0			

表11 遺物観察表(1)

No.	出土位置	種 别	器 種	口径	器高	底径	遺 存	時 期	備 考
1	SE44	土師器	壺	(43.0)	—	—	口縁部1/10	占墳	
2	SX04	土師器	壺	—	—	—	頸部	古墳	
3	SD01	上部器	壺	—	—	5.8	底部	古墳	
4	SX04	土師器	甕	—	—	—	頸部	占墳	
5	SX03	土師器	甕	—	—	3.4	底部	古墳	
6	SD09	上部器	高杯	—	—	—	脚部片	古墳	
7	SK31	土師器	鉢	(12.0)	—	—	口～体部1/5	古墳	
8	SD01	上部器	台付甕	—	—	—	台部片	古墳	
9	SX01	須恵器	环B 壺	—	—	(16.6)	1/4	平安	
10	SD01	須恵器	环B 壺	—	—	(6.6)	底部1/4	平安	
11	SK12	須恵器	环B 壺	—	—	(7.0)	底部1/2	平安	
12	SX02	須恵器	环B 壺	—	—	(8.4)	底部1/2	平安	
13	SD01	須恵器	环B 壺	—	—	(10.0)	底部1/3	平安	
14	SD01	須恵器	环B 壺	—	—	6.4	底部	平安	
15	SD11	須恵器	环A 壺	(12.0)	—	(7.2)	1/4	平安	
16	SD02	須恵器	甕	—	—	—	肩部片	平安	
17	SD01	中世土師器	皿	(16.0)	—	—	1/8	14C前	油煙
18	SU27	中世土師器	皿	9.0	1.7	—	口～体部3/4	15C前	油煙
19	SE57	中世土師器	皿	(9.4)	—	—	1/2	15C前	油煙
20	SD01	中世土師器	皿	12.0	2.2	—	2/3	15C後～16C初	油煙
21	SX01	中世土師器	皿	(15.0)	—	—	1/16	15C後～16C初	
22	SE09	中世土師器	皿	(11.8)	—	—	1/8	15C後～16C初	
23	SE12	中世土師器	皿	(16.0)	—	—	1/8	15C後～16C初	
24	SE08	中世土師器	皿	(8.0)	1.7	—	1/4	16C前～中	油煙
25	SK02	中世土師器	皿	(8.1)	1.6	—	口～体部1/2	16C前～中	
26	SE22	中世土師器	皿	(8.2)	1.4	—	口～体部1/4	16C前～中	油煙
27	X375, Y992	中世土師器	皿	8.4	1.7	—	3/4	16C前～中	油煙
28	X376, Y999	中世土師器	皿	(9.0)	2.2	—	1/4	16C中～後	
29	X383, Y983	中世土師器	皿	9.4	2.2	—	完形	16C中～後	油煙
30	SX02	中世土師器	皿	9.2	1.8	—	完形	16C中～後	
31	X370, Y994	中世土師器	皿	9.4	1.9	—	3/4	16C中～後	油煙
32	X372, Y993	中世土師器	皿	(9.6)	2.1	—	口～体部1/4	16C中～後	油煙
33	SK02	中世土師器	皿	9.7	2.2	—	完形	16C中～後	油煙
34	X375, Y992	中世土師器	皿	9.6	2.2	—	口～体部2/3	16C中～後	油煙

表12 遺物観察表(2)

No.	出土位置	種別	器種	口径	器高	底径	遺存	時期	備考
35	X374, Y990	中世土師器	皿	9.8	2.1	-	完形	16C中~後	油煙
36	X370, Y994	中世土師器	皿	9.7	2.2	-	完形	16C中~後	油煙
37	SE15	中世土師器	皿	9.8	2.2	-	完形	16C中~後	油煙
38	SX01	中世土師器	皿	(10.0)	-	-	口~体部1/6	16C中~後	油煙
39	SE79	中世土師器	皿	10.0	2.0	1/2	-	16C中~後	油煙
40	SE48	中世土師器	皿	(10.0)	2.1	-	1/4	16C中~後	油煙
41	SD02	中世土師器	皿	(10.2)	2.1	-	口~体部1/2	16C中~後	油煙
42	SD02	中世土師器	皿	10.3	2.2	-	1/3	16C中~後	
43	SE44	中世土師器	皿	(12.0)	-	-	口~体部1/8	16C中~後	
44	S014	中世土師器	皿	(9.0)	1.5	-	1/3	17Cか	
45	SK31	中世土師器	皿	7.4	1.9	-	完形	-	油煙
46	SE85	中世土師器	皿	7.6	1.7	-	完形	-	油煙
47	SE85	中世土師器	皿	9.0	2.1	-	3/5	-	油煙
48	SE82	中世土師器	皿	(10.0)	2.1	-	1/4	-	
49	SD01	中国陶磁器	青磁碗	-	-	5.0	底部	13C後~14C前	
50	SK02	中国陶磁器	青磁碗	-	-	(5.2)	底部2/3	14C後~15C前	
51	SU04	中国陶磁器	青磁碗	-	-	4.6	底部	14C後~15C前	漆難
52	SK02	中国陶磁器	青磁碗	-	-	-	体部片	15C後~16C前	
53	S001	中国陶磁器	青磁碗	-	-	-	体部片	15C後~16C前	
54	SD14	中国陶磁器	青磁枝花皿	-	-	-	体部片	15C後~16C前	
55	表採	中国陶磁器	白磁皿	(10.3)	-	-	口~体部片	15C前	
56	SD06	中国陶磁器	白磁小杯	-	-	-	口~体部片	16C前~中	
57	SD06	中国陶磁器	染付碗	(7.8)	-	-	口~体部片	15C中~後	
58	SD14	中国陶磁器	染付碗	-	-	-	体部片	15C中~後	
59	SH04	中国陶磁器	染付碗	-	-	-	口~体部片	16C前~中	
60	SX05	中国陶磁器	染付皿	-	-	-	口~体部片	15C中~後	
61	SD01	中国陶磁器	染付皿	11.9	-	-	口~体部片	15C中~後	
62	SD06	中国南磁器	染付皿	-	-	-	口~体部片	15C中~後	
63	SE73	中国陶磁器	染付皿	(9.8)	-	-	口~体部片	16C前	
64	SK02	瀬戸美濃	天目茶碗	(10.0)	-	-	口~体部1/4	15C末~16C前	
65	X376, Y999	瀬戸美濃	天目茶碗	(11.0)	-	-	口~体部1/5	15C末~16C前	
66	SD06	瀬戸美濃	天目茶碗	(10.8)	-	-	口~体部1/2	16C中~後	
67	X383, Y983	瀬戸美濃	天目茶碗	(11.2)	-	-	口~体部1/2	16C中~後	
68	SK04	瀬戸美濃	天目茶碗	(12.4)	-	-	口~体部1/8	16C中~後	
69	SX05	瀬戸美濃	天目茶碗	(6.8)	-	-	口~体部1/8	16C中~後	
70	SH04	瀬戸美濃	天目茶碗	(12.4)	-	-	口~体部1/6	16C末~17C前	
71	SD01	瀬戸美濃	丸碗	-	(1.9)	5.6	底部	16C後	
72	X376, Y995	瀬戸美濃	端反皿	(11.8)	2.7	6.0	1/2	15C末~16C前	
73	X370, Y994	瀬戸美濃	端反皿	11.8	2.4	7.2	1/4	15C末~16C前	
74	SX01	瀬戸美濃	端反皿	-	-	-	底部片		
75	SE17	瀬戸美濃	丸皿	10.6	2.3	5.6	口縁部1/4欠損	16C中~後	
76	SD02	瀬戸美濃	丸皿	(10.6)	2.3	6.2	1/4	16C中~後	
77	SE36	瀬戸美濃	丸皿	(10.4)	-	-	口縁部1/5	16C中~後	
78	SE12	瀬戸美濃	丸皿	(11.6)	-	-	口縁部1/6	16C中~後	
79	SD01	瀬戸美濃	丸皿	-	-	6.0	底部1/2		
80	SK02	瀬戸美濃	御し皿	(9.8)	2.1	(2.0)	1/6		
81	SK42	瀬戸美濃	染利	(7.0)	20.1	9.5	口縁部~部欠損		
82	表採	瀬戸美濃	壺	-	-	5.0	底部		
83	SD01	瀬戸美濃	糸入	-	-	(10.6)	底部1/3		
84	SE08	瀬戸美濃	端反碗	2.3	3.1	3.4	完形		
85	SE74	肥前	端反碗	(11.0)	-	1/4	-	1590~1610年代	
86	SD02	肥前	端反皿	11.8	3.1	4.6	1)縁部~部欠損 2)縁部片	1590~1610年代	墨書き「少」
87	SE12	肥前	端反皿	-	-	-	1)縁部片	1590~1610年代	油煙

表13 遺物観察表(3)

No.	出土位置	種別	器種	口径	器高	底径	遺存	時期	備考
88	SD14	肥前	ひだ皿	11.4	3.4	4.0	口縁部3/4欠損	1590~1610年代	
89	SD07	肥前	皿	-	-	3.4	底部	1590~1610年代	
90	SE73	肥前	鉢類	-	-	-	口縁部片	1590~1610年代	
91	SD08	肥前	碗	-	-	-	体部	1650~1690年代	写真のみ
92	表探	肥前	皿	-	-	-	体部	1650~1690年代	写真のみ
93	SD14	越中瀬戸	天目茶碗	-	(4.3)	底部1/4	16C末~17C初		
94	SD01	越中瀬戸	天目茶碗	-	(4.7)	体~底部1/3	16C末~17C初		
95	SD02	越中瀬戸	天目茶碗	(11.0)	-	(5.2)	底部1/3	16C末~17C中	
96	SD02	越中瀬戸	天目茶碗	(11.0)	-	-	口縁部1/9	17C前~中	
97	SD02	越中瀬戸	丸皿	-	(5.4)	体底部1/2	16C末~17C中		
98	SD01	越中瀬戸	丸皿	-	(4.9)	体~底部1/4	16C末~17C中		
99	SE19	越中瀬戸	折腰皿	11.5	2.6	6.0	ほぼ完形	16C末~17C初	
100	SE17	越中瀬戸	折腰皿	12.0	2.8	6.2	3/4	16C末~17C初	
101	SE82	越中瀬戸	丸皿	(10.0)	2.4	(5.0)	1/4	16C末~17C初	
102	SE03	越中瀬戸	丸皿	(10.4)	2.7	(4.8)	1/6	16C末~17C初	
103	SE22	越中瀬戸	丸皿	11.0	2.5	5.4	口縁部一部欠損	16C末~17C初	油煙
104	SD01	越中瀬戸	丸皿	(12.8)	2.8	7.4	1/2	16C末~17C初	墨書き[177]
105	SE56	越中瀬戸	丸皿	10.6	2.3	6.0	口縁部一部欠損	16C末~17C初	油煙
106	SD06	越中瀬戸	丸皿	(10.0)	-	-	口縁部1/8	17C前~中	
107	SE08	越中瀬戸	丸皿	(10.0)	-	-	口縁部1/8	17C前~中	
108	SE08	越中瀬戸	丸皿	(10.0)	(1.7)	-	口縁部1/3	17C前~中	油煙
109	SE12	越中瀬戸	丸皿	10.4	2.7	4.2	1/2	17C前~中	
110	SD01	越中瀬戸	丸皿	(10.4)	2.8	4.2	2/5	17C前~中	
111	SD01	越中瀬戸	丸皿	(10.6)	2.7	4.4	1/4	17C前~中	
112	SD19	越中瀬戸	丸皿	10.6	2.0	4.0	1/8	17C前~中	
113	SE23	越中瀬戸	丸皿	10.8	2.6	4.4	口縁部一部欠損	17C前~中	油煙
114	SD01	越中瀬戸	丸皿	11.0	2.6	4.6	3/4	17C前~中	油煙
115	SK01、SD01	越中瀬戸	丸皿	(11.0)	2.5	2.0	1/6	17C前~中	
116	SD02	越中瀬戸	丸皿	-	-	4.4	体~底部1/2	17C前~中	
117	SE04	越中瀬戸	丸皿	-	-	5.2	底部1/2	17C前~中	
118	SE73	越中瀬戸	丸皿	-	-	5.2	底部	17C前~中	
119	SD02	越中瀬戸	丸皿	11.0	2.9	6.0	1/2	17C前~中	
120	SX04	越中瀬戸	丸皿	(11.0)	3.0	(6.0)	2/5	17C前~中	
121	SD01	越中瀬戸	向付	10.8	(2.8)	(5.0)	1/4	16C末~17C中	
122	SK01	越中瀬戸	大皿	(25.8)	-	-	口~体部1/6	16C末~17C初	
123	SE22	越中瀬戸	大皿	(28.0)	5.7	(13.5)	1/3	16C末~17C初	
124	SE08	越中瀬戸	擂鉢	(29.0)	-	-	口~体部1/8	16C末~17C初	
125	SE43	越中瀬戸	擂鉢	(26.0)	-	-	口縁部1/8	17C前~中	
126	X372, Y993	越中瀬戸	擂鉢	(28.0)	-	-	口縁部1/12	17C前~中	
127	SD01	越中瀬戸	擂鉢	(29.0)	-	-	口縁部1/8	17C前~中	
128	SD01	越中瀬戸	擂鉢	-	-	(10.0)	体部下平1/4		
129	SD01	越中瀬戸	擂鉢	-	-	(14.8)	底部1/8		
130	SD01	越中瀬戸	蓋	-	-	5.6	底部		
131	SD01	越中瀬戸	蓋	-	-	6.2	底部		
132	SX05	越中瀬戸	水指	(13.6)	-	-	口~体部1/6		
133	SD02	越中瀬戸	水指	(7.2)	-	-	口縁部片		
134	SE32	越中瀬戸	水指	(32.2)	-	-	口~体部1/8		
135	SD01、SD02、 SE36、 X396, Y999	越中瀬戸	水指	-	-	-	体~底部		
136	SE09	越中瀬戸	匁鉢	(15.9)	-	(12.0)	1/2		
137	SD01	越中瀬戸	匁鉢	(14.4)	-	-	口縁部片		
138	SD01、SD02	越中瀬戸	匁鉢	-	-	(15.0)	体~底部4/5		

表14 遺物観察表(4)

No.	出土位置	種別	器種	口径	器高	底径	遺存	時期	備考
139	表様	関西系陶器	灯明皿	-	-	-	口縁部片	18~19C	
140	SD06	八尾	甕	(48.0)	-	-	口縁部L/20	14C	
141	SX04	八尾	甕	-	-	-	底部片	13C前~14C	
142	SE09、SD02・06	珠洲	甕	(56.0)	-	-	口縁部L/2	1380~1440年代	
143	SK12	珠洲	甕	(37.6)	-	-	口縁部L/12	1380~1440年代	
144	SE02	珠洲	甕	-	-	-	胴部片		
145	SD02	珠洲	甕	-	-	-	胴部片		
146	SD14	珠洲	蓋	(28.0)	-	-	口縁部L/6	1380~1440年代	
147	SD10	珠洲	蓋	-	-	-	胴部片		
148	SE19	珠洲	蓋	-	-	7.8	底部L/4		
149	SX04	珠洲	片口鉢	(34.4)	-	-	口縁部L/8	1380~1440年代	赤絵
150	SD03	珠洲	片口鉢	(37.0)	-	-	口縁部L/12	1380~1440年代	
151	SD02	珠洲	片口鉢	-	-	-	口縁部片	1380~1440年代	
152	SE15、X376、Y994	珠洲	片口鉢	(32.0)	(21.9)	-	口縁部L/4	1450~1470年代	
153	SE15	珠洲	片口鉢	(38.6)	-	-	口縁部L/8	1450~1470年代	
154	SD01	珠洲	片口鉢	-	-	(10.4)	底部L/4		
155	SE15	珠洲	片口鉢	-	-	(13.0)	底部L/2		
156	SD01	珠洲	片口鉢	-	-	(15.8)	底部L/6		
157	SE74	珠洲	片口鉢	-	-	(15.6)	底部L/6		
158	SD01	珠洲	片口鉢	-	-	(13.0)	底部L/2	1450~1470年代	
159	SD02	珠洲	片口鉢	-	-	(15.0)	底部L/4	1450~1470年代	
160	SE37	瓦質土器	鉢類	(24.2)	-	-	口縁部L/19		
161	SX02	越前	甕	(35.2)	-	-	口~胴部L/6	15C後	赤絵
162	SD15	越前	甕	-	-	-	口縁部片	16C前	
163	SK12、SD02	越前	甕	(41.6)	-	-	口縁部L/14	16C前	
164	SE63	越前	甕	-	-	(20.4)	胴~底部L/6		
165	SD02・07・16	越前	甕	-	-	(22.0)	底部		
166	SE36、SD01	越前	甕	-	-	12.9	胴~底部	桃山以降	
167	SD02	越前	蓋	-	-	-	肩部片	施記号 I	
168	SD01・02、SE36、SK49	越前	擂鉢	(32.0)	12.9	(15.0)	体部3/4	16C前	
169	SD01	越前	擂鉢	-	-	-	体部片	16C前	
170	SD15	越前	擂鉢	(29.0)	-	-	口~体部片	16C前	
171	X389、Y987	越前	擂鉢	(32.0)	-	-	口縁部L/12	16C前	
172	SK48	越前	擂鉢	-	-	(16.0)	体~底部L/3	16C前	
173	SD06	越前	擂鉢	-	-	(14.8)	体~底部L/8	16C前	
174	SE12	越前	擂鉢	-	-	(12.6)	底部L/4	16C前	

No.	出土位置	種別	器種	計測値	遺存	備考
175	SE04	木製品	井戸側部材	長91.4、幅25.4、厚2.6	完形	板、ヒノキ科アスナロ属
176	SE04	木製品	井戸側部材	長96.8、径12.0×12.5	完形	欄柱、角材、ヒノキ科アスナロ属
177	SE04	木製品	井戸側部材	長75.6、幅9.8、厚8.0	完形	上段の横桟、ヒノキ科アスナロ属
178	SE04	木製品	井戸側部材	長94.4、幅8.0、厚7.0	完形	下段の横桟、ヒノキ科アスナロ属
179	SE04	木製品	井戸側部材	長22.2、幅4.3、厚1.6	完形	板、ヒノキ科アスナロ属
180	SE15	木製品	井戸側部材	長33.4、幅90.8、厚3.2	完形	板、ヒノキ科アスナロ属
181	SE15	木製品	井戸側部材	長36.4、幅92.6、厚3.6	完形	板、ヒノキ科アスナロ属
182	SK51	木製品	模	長15.0、幅4.0、厚1.5	完形	

表15 遺物観察表(5)

No	出土位置	種別	器種	計測値	遺存状況	備考
183	SE22	木製品	横柾	全長30.8、頭径7.8、柄長14.1、柄径3.3	完形	ブナ科コナラ属コナラ柾属クヌギ節
184	SK51	木製品	木摺り臼	径40.0、現存高(22.0)	上臼	上部欠損、ブナ科ブナ属
185	SX02	木製品	横柾	全長123.2、頭長43.2、頭径12.0×13.3、柄径5.6×6.0、総重量8.8kg	完形	建築部材を転用、頭:ヒノキ科アスナロ属、柄:ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節、柾:ブナ科クリ属クリ
186	SX02	木製品	弧状木製品	現存長(49.5)、径1.4	片端部欠損	
187	SH15	木製品	弧状木製品	現存長(24.5)、径1.7	大半欠損	
188	SD01	木製品	下駄	現存長(14.6)、幅8.5、厚3.1	一部欠損	連雀下駄
189	SD01	木製品	下駄	長17.5、幅9.3、厚1.4	一部欠損	無雀下駄
190	SD01	木製品	漆器椀	—	1/4	総黒色・内外面漆絵
191	SX02	木製品	漆器椀	—	1/4	総黒色・内面漆絵
192	SH04	木製品	漆器椀	底径6.5	1/5	内面赤色・外面漆絵
193	SE32	木製品	円形曲物	径81.4、現存高(30.0)	側板	上端欠損、水溜、ヒノキ科ヒノキ属
194	SE08	木製品	円形曲物	径22.0、厚0.7	蓋板	
195	SE15	木製品	円形曲物	径19.3、厚0.8	蓋板	
196	SE58	木製品	円形曲物	径18.5、厚0.6	蓋板	
197	SE04	木製品	円形曲物	推定径(16.0)、厚0.7	底板1/2	
198	SE04	木製品	円形曲物	推定径(17.2)、厚0.7	底板1/2	
199	SD01	木製品	円形曲物	推定径(11.0)、厚0.6	底板1/3	
200	SX02	木製品	円形曲物	径23.8、厚2.0	底板4/5	
201	SX02	木製品	円形曲物	推定径(31.6)、厚4.2	底板1/2	
202	SE04	木製品	橢円形曲物	現存長(54.8)、現存幅(12.4)、厚0.6	底板1/3	
203	SE56	木製品	長方形曲物	現存長(18.9)、現存幅(13.7)、厚0.5	底板片	
204	SE08	木製品	蓋板	径3.6、厚0.6	完形	
205	SH05	木製品	紡輪	径4.0、厚0.7	完形	
206	SE15	木製品	箸状木製品	長23.8、径0.4~0.7	完形	
207	SE22	木製品	箸状木製品	現存長(22.7)、径0.5	片端部欠損	
208	SE29	木製品	箸状木製品	現存長(25.1)、径0.5	両端部欠損	
209	SE22	木製品	箸状木製品	現存長(21.3)、径0.6~0.7	片端部欠損	
210	SE05	木製品	箸状木製品	現存長(21.0)、径0.5	片端部欠損	
211	SE15	木製品	箸状木製品	現存長21.3、径0.4~0.7	完形	
212	SE68	木製品	箸状木製品	現存長(20.0)、径0.5	片端部欠損	
213	SH23	小製品	老松木製品	現存長(18.7)、径0.3~0.7	両端部欠損	
214	SE23	木製品	箸状木製品	現存長(17.7)、径0.5~0.6	片端部欠損	
215	SE05	木製品	箸状木製品	現存長(16.0)、径0.5	片端部欠損	
216	SH47	木製品	箸状木製品	現存長(15.7)、径0.5~0.6	片端部欠損	
217	SE22	木製品	箸状木製品	現存長(15.2)、径0.5~0.8	片端部欠損	
218	SK52	木製品	加工合	長43.2、幅20.2、厚7.2	完形	建築部材を転用
219	SX02	木製品	双六盤	長辺37.6、短辺26.0、厚18.2	完形	木体:ニレ科ケヤキ属ケヤキ、埋木:ヒノキ科クロベ属クロベ
220	SX04	木製品	箱板	長18.2、幅57.6、厚1.2	一部欠損	マツ科マツ属(双葉松類)
221	SX02	木製品	台座	長4.7、幅12.7、厚0.7	4/5	角棒
222	SD15	木製品	用途不明品	長19.4、幅2.0、厚1.3	完形	
223	SX02	木製品	用途不明品	現存長(33.8)、幅2.0、厚1.2	上端部欠損	角棒、上端部焼け焦げ
224	SH08	木製品	用途不明品	現存長(16.5)、幅2.5、厚0.3	上端部欠損	長方形の薄板、上端部焼け焦げ

表16 遺物観察表(6)

No.	出土位置	種別 器種	計測値	遺存	備考
225	SD01	木製品 用途不明品	現存長(10.7)、幅3.5、厚0.2	下端部欠損	長方形の薄板
226	SE64	木製品 用途不明品	長25.6、幅15.6、厚3.8	ほぼ完形	
227	SE64	木製品 用途不明品	長15.2、幅13.3、厚3.5	完形	
228	SX02	木製品 丸木	長111.0、径15.0	完形	両端部切削、不均一な間隔で切り込み痕
229	P12	木製品 柱根	現存長(65.4)、径14.8	上端部腐食	丸木、中途半端な面取り
230	P04	木製品 柱根	現存長(56.2)、径10.6×12.0	上端部腐食	角材、梢穴あり
231	SK51	木製品 柱根	現存長(36.4)、径18.4	上端部腐食	丸木、礎板として木括り臼(184)を伴う、ナメ科クリ属クリ
232	SE68	獸骨 イヌ	—	上顎骨右側	中型犬、成歯、写真のみ
233	S001	土製品 犬口	推定外径(8.0)、内径(2.4)	先端部片	焼着浮
234	SE70	土製品 粘土塊	—	—	スサ入り、写真のみ
235	SD01	土製品 粘土塊	—	—	スサ入り、写真のみ
236	SE71	土製品 粘土塊	—	—	スサ入り、写真のみ
237	SX02	金属製品 鉄先	長39.3、幅15.0、厚0.5	完形	無床革、鋳造品
238	SE02	金属製品 鉄錐	長5.0、径1.2~2.4	脚部	
239	P12	金属製品 鉄樊坪	推定口径(4.8)	1/6	角形成型、内外面金箔
240	SE15	金属製品 銀貨	外径2.4	完形	「人祐通宝」(北宋・初鑄1017年)
241	SE57	金属製品 銀貨	外径2.3	完形	「元豐通宝」(北宋・初鑄1078年)
242	X375, Y992	金属製品 銀貨	外径2.3	一部欠損	「綱型元寶」(北宋・初鑄1094年)
243	SD01	金属製品 銀滓	—	—	写真のみ
244	SD01	金属製品 銀滓	—	—	写真のみ
245	S001	金属製品 銀滓	—	—	写真のみ
246	SD02	石製品 砥	—	大半欠損	砥石に転用、輝緑凝灰岩(高島青石)
247	SE37	石製品 砥石	長11.7、幅4.4、厚2.2	一部欠損	流紋岩
248	SE04	石製品 砥石	長6.9、幅5.2、厚2.6	一部欠損	凝灰岩
249	X374, Y990	石製品 砥石	長5.3、幅4.5、厚3.1	一部欠損	流紋岩
250	未採	石製品 砥石	現存長(11.5)、幅5.2、厚4.2	上端欠損	川原石を利用、輝石安山岩
251	SE09	石製品 砥石	長7.7、幅5.6、厚2.1	一部欠損	流紋岩
252	SK47, SE51	石製品 石鉢	口径27.9、器高13.2、底径10.9	3/4	片口、輝石安山岩
253	SX04	石製品 茶臼	径35.8、高さ13.0	下臼3/5	8分画、砂岩
254	SE08	石製品 茶臼	推定径(36.0)	受皿部片	砂岩
255	SX02	石製品 茶臼	推定径(41.0)	受皿部片	斑縞岩
256	SK35	石製品 石臼	推定径(28.0)、現存高(11.0)	上臼1/4	火山礫凝灰岩
257	SK52	石製品 石臼	径27.0、高9.3、重10.4kg	下臼完形	6分画、凸面形状、火山礫凝灰岩
258	SE31	石製品 石臼	推定径(29.0)、高12.5	下臼1/2	6分画、凸面形状、輝石安山岩
259	SE71	石製品 五輪塔	長15.4、幅22.6、重12.0kg	火輪完形	輝石安山岩
260	SK54	石製品 五輪塔	長17.1、幅26.2、重15.8kg	火輪完形	輝石安山岩
261	SE15	石製品 五輪塔	長28.5、幅24.0~27.5、重36.0kg	火輪	木製品、凝灰角礫岩
262	SE01	石製品 石塔	長42.3、幅19.8、厚11.8、重さ16.1kg	完形	梵字「パン」、輝石安山岩

### iii) 平成12年度調査

#### 1. 調査概要

##### (1) 調査の方法

平成12年度の発掘調査は、920m<sup>2</sup>を対象に実施した。まず、重機による表土排土を行い、引き続き人力による遺構検出を行った。各遺構の位置を概略図に記録し、遺構検出、土層断面実測、出土遺物実測、写真撮影などの記録作業を行った。また、航空写真撮影にはラジコンヘリを使用し、前後2回に分けてそれぞれ撮影を行った。

調査区の座標は、公共座標を基準に設定した。遺構の図化（1/40、1/200）については、遺構完掘時に写真測量を行った。遺構細部や出土遺物の実測（1/10、1/20）、出土遺物の取り上げについては、測量機器（トータルステーション）による測量作業を行った。出土遺物は、公共座標、高さを記録し番号を付けて取り上げた。

##### (2) 基本層序

平成12年度の調査区の層序は、基本的に平成11年度に準じる（P 5 参照）。

#### 2. 遺構

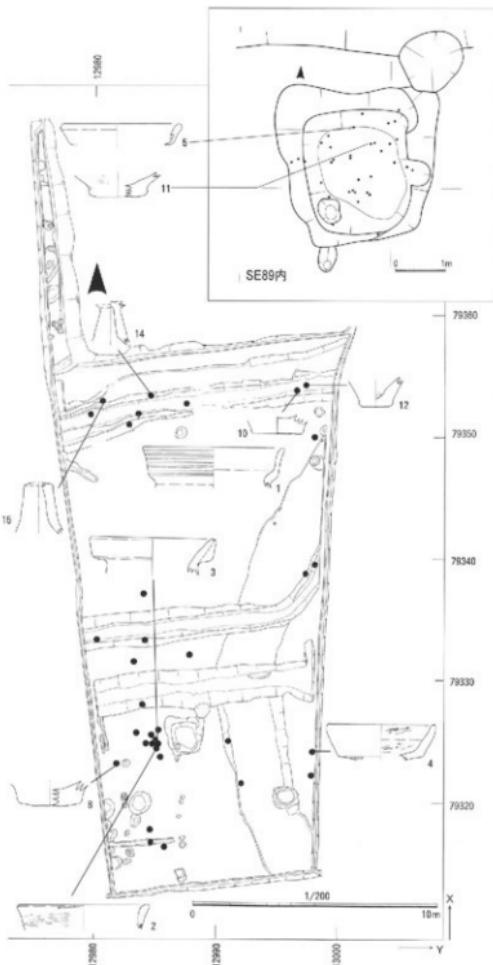
検出された遺構の種類として、古墳周溝、井戸4基、溝8条、掘立柱建物1棟、小ピットである。古墳周溝は、若王子塚古墳に伴うもので、それ以外の遺構は何れも中～近世期の遺構と考えられる。

##### (1) 古墳周溝（若王子塚古墳）

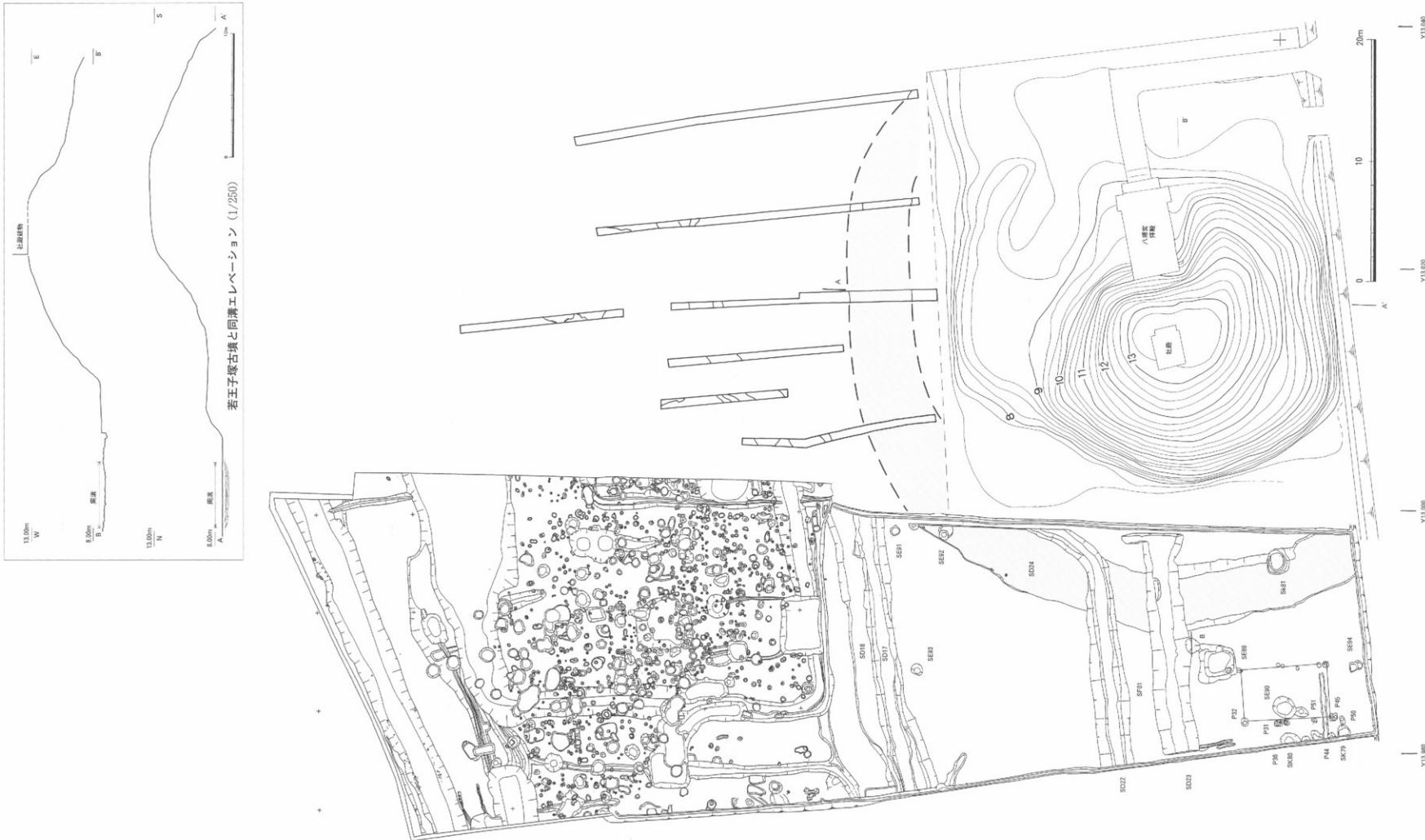
##### S D 2 4 （第31図、写真図版21）

調査区東側半部に検出した。幅4.3～5.4m深さ0.10～0.15mを測り、覆土は黒色粘土を基調とする。現存する八幡宮の境内地となっている若王子塚の墳丘裾から約6離れた位置で墳丘裾の外周に沿う形で弧を描く状態で検出した。

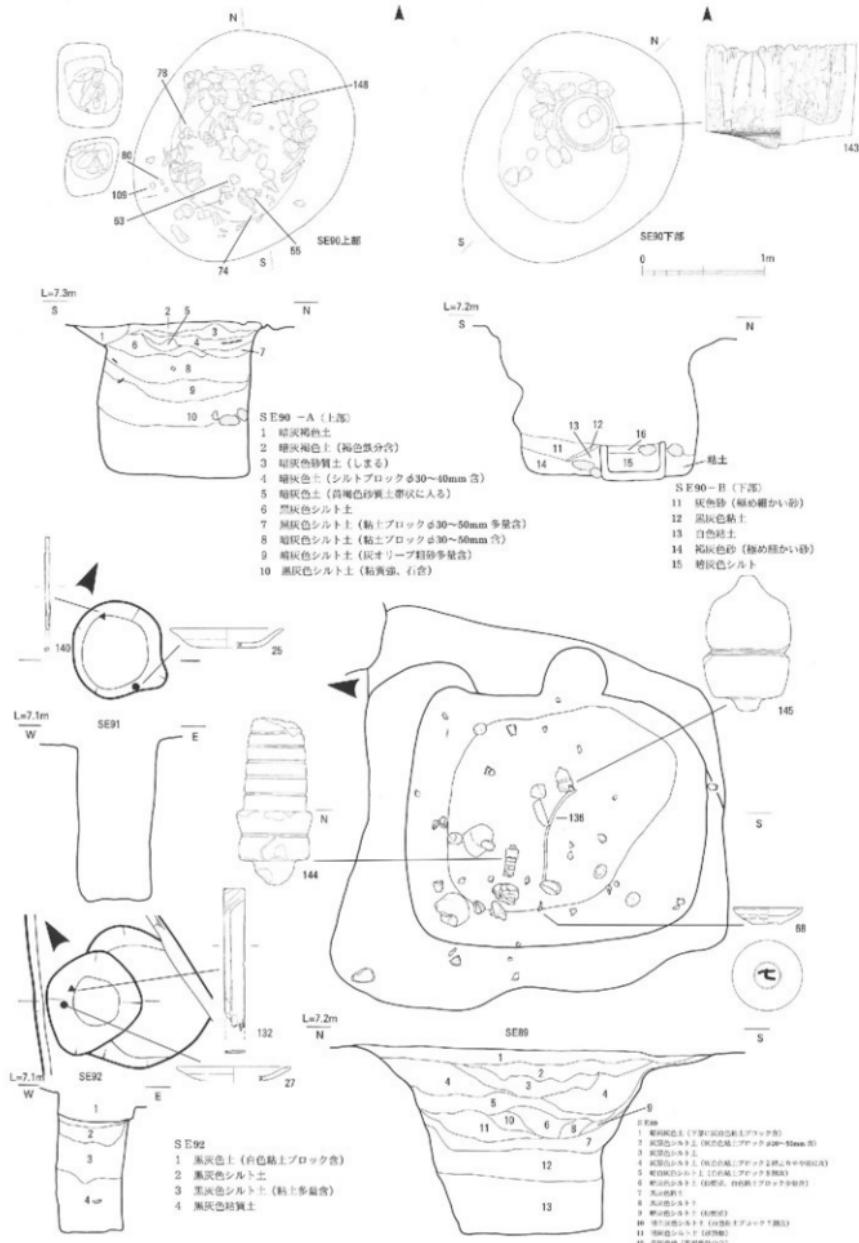
今回の調査対象地外であるが、若王子塚北側の休耕田に土地所有者の承諾を得て試掘トレンチを設定した。境内地北端から北に約2.5m離れた



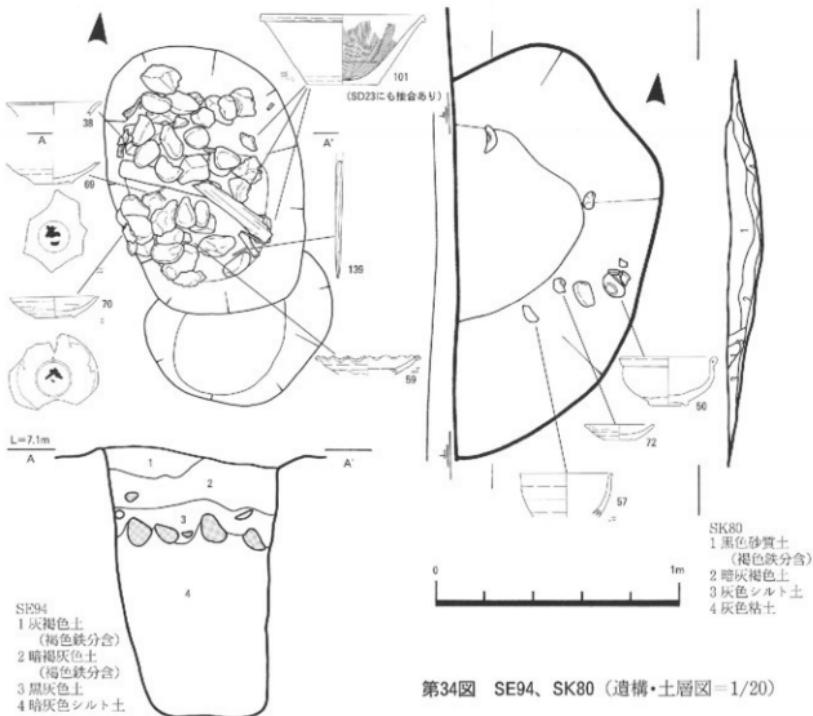
第31図 古墳時代土師器出土位置図（平成12年度）



第32図 平成12年度調査遺構図及び若王子塚古墳測量図、試掘トレーンチ位置図(1/250)



第33図 SE89、90、91、92（遺構・土層図=1/40、遺物は後百遺物図の50%）



第34図 SE94、SK80（遺構・土層図＝1/20）

位置に幅5.3m、深さ0.35m、溝基底部幅3.6mを測り、断面形が逆台形を呈し、覆土は黒色粘土を基調とする溝跡を検出した。3本の試掘トレーナーから同様の溝跡を検出した。それらを繋ぐと弧を描きながら若王子塚を巡り、SD24から繋がる周溝であると判断した。このことによって若王子塚を巡る周溝のほぼ半周分が判明し、古墳の直径が約46mを測る円墳に復原することができた。SD24周溝覆土中からは上師器の破片4点が出土した。

## （2）井戸

井戸は中世期のもの2基、近世期のもの3基、時期不明1基を検出した。11年度調査と合わせて94基の井戸を確認したことになる。

**S E 8 9**（第33図）調査区中央やや南より（X325、Y987）に位置する。隅丸方形の掘方を呈し井戸開口部一辺2.9m、深さ1.52mを測る。井戸側材やその痕跡は検出されなかった。遺物は覆土中から土師器、須恵器、中世土師器、珠洲焼、越中瀬戸焼、五輪塔空風輪、宝篋印塔相輪、種実遺体、木製品（弧状木製品など）などが出土している。17世紀前葉～中頃に廃絶されたものと見られる。

SD23覆土中の遺物と接合する遺物（越中瀬戸焼）が2点出土した。覆土中から土師器群が50点出土している。隣接する古墳からの流れ込みの可能性もある。

**S E 9 0**（第33図）調査地南西部（X320、Y984）に位置する。円筒形の素掘り井戸で、木摺臼の下臼内部を刺り抜き逆位にした水溜が出土。水溜の周囲には、径10～20cm程の川原石が添えられ、さらに白色粘土で水溜を固定している。遺物は、覆土中から越中瀬戸焼、木製品（箸状、板状）などが出土した。SD22覆土中の越中瀬戸焼擂鉢と接合する遺物が見られる。17世紀前葉～中頃に廃絶さ

れたと考えられる。

**S E 9 1** (第33図) 調査区北東 (X352、Y998) に位置する。円形の素掘り井戸である。開口部径0.70m、深さ1.34mを測る。遺物は、覆土中から珠洲焼、中世土師器が出土した。16世紀中～後半に廃絶したものと見られる。

**S E 9 2** (第33図) 調査区北西 (X348、Y990) に位置する。若王子塚古墳周溝 (S D24) を切って形成される。円形の素掘り井戸である。開口部径0.63m、深さ1.15mを測る。遺物は覆土中から珠洲焼、中世土師器、木製品、種実遺体 (モモ) が出土した。16世紀末～17世紀前半に廃絶したものと見られる。

**S E 9 3** (第32図) 調査区北側中央 (X350、Y987) に位置する。円形の素掘り井戸である。開口部径0.65m、深さ1.34mを測る。遺物は須恵器杯B片が1点出土したのみで、井戸の時期は不明である。

**S E 9 4** (第33図) 調査区南端中央 (X313、Y987) に位置する。円形の素掘り井戸である。開口部短軸0.75m長軸1.11mの隅丸長方形を呈し、深さ1.10mを測る。覆土上半部に多量の礫に混じって木製品、越中瀬戸焼などが出土した。17世紀中頃までに廃絶した井戸と考えられる。

### (3) 土坑

**S K 7 9** (第32図) 調査区南西部 (X315、Y982) に位置し、調査区西壁に切られておりさらに西に続く土坑である。長軸1.05m短軸0.95m以上の楕円形を呈し、深さ0.36mを測る。遺物は、覆土中から越中瀬戸焼などが出土した。

### S K 8 0 (第34

図) 調査区南西部 (X319、Y981) に位置し、調査区西壁に切られておりさらに西に続く土坑である。直径約1.68mの不整円形を呈し、深さ0.06mを測る。遺物は、覆土中から越中瀬戸焼が出土した。

**S K 8 1** (第32図) 調査区南東部 (X320、Y995) に位置し、若王子塚古墳の周溝を切って形成されている。長軸2.12m、短軸1.89mの楕円形を呈し、深さ0.12mを測る。壁際に幅約0.2mの壁溝のような窓みが廻り、当該部の深さは0.18mを測る。遺物は、覆土中から越中瀬戸焼が出土した。

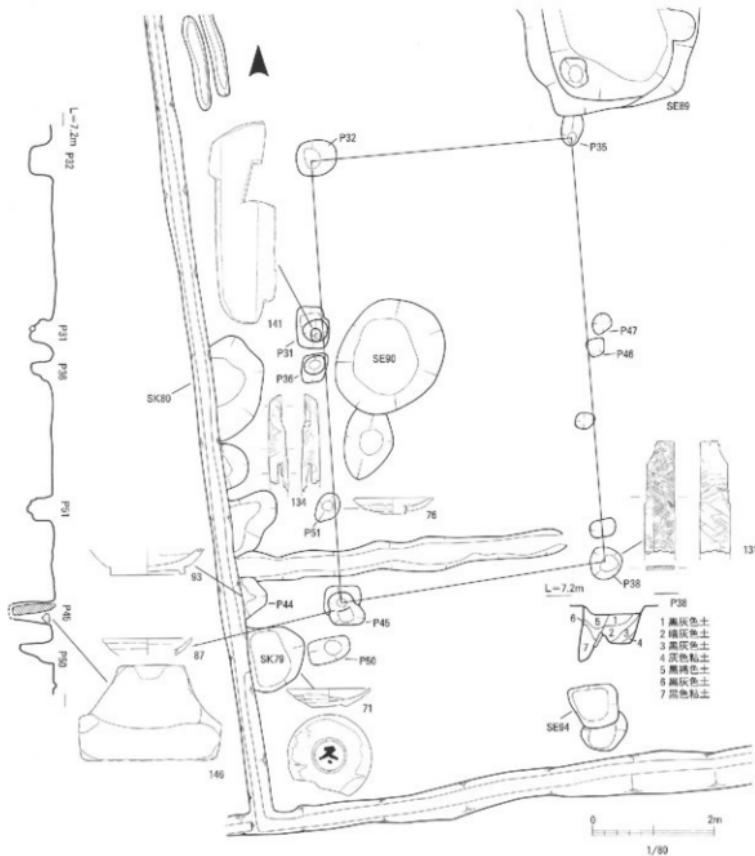
### (4) 捩立柱建物

**S B 0 1** (第35図) 調査区南東部に位置する。小ピットP32、35、36、38、45、46の6本柱からなる桁行2間×梁間1間の南北棟で、主軸方向はN-5°-Wを示す。建物規模は、桁行西筋で7.3m、梁間北筋で4.25mである。柱間寸法は、桁行東筋は3.5m間隔をとり、西筋では北から3.4m、3.9mを測る。南側4本の柱においては重複や隣接して柱が検出されており、一部建て替えの可能性も考えられる。南西隅のP45には柱根が残り、さらに掘方には五輪塔の火輪を逆位にし柱根の根固め石として転用されていた。また、桁行東筋中央の柱も柱根が残存し、桁行東筋中央の柱穴には川原石が数点根固め石として使用され、加工した木製品などが出土した。P43、45から越中瀬戸焼が出土している。S E 90とはほぼ同時期とみられ、S E 90の覆屋としての機能も想定される。また、S E 90の西に近接する桁行の柱穴2箇所について、1ヶ所は井戸の釣瓶用の支柱とも考えられる。

### (5) 溝

溝は、新たに10条検出し、11年度調査と合わせて29条確認した。主な溝について述べる。

**S D 1 7** (第36図) 調査区北端に位置する。ほぼ東西に延びる溝で、主軸方向はN-82°-Eを示す。規模は全長22.7m以上、上幅2.0～3.0m深さ0.85mを測り、断面形は擂鉢状を呈する。上層部に礫が多く検出され、熱を受けた礫も21点認められた。須恵器から越前焼、越中瀬戸焼まで時期幅の広い遺物が多量に出土している。中でも種実遺体 (モモ) が120点も出土していることが特筆される。

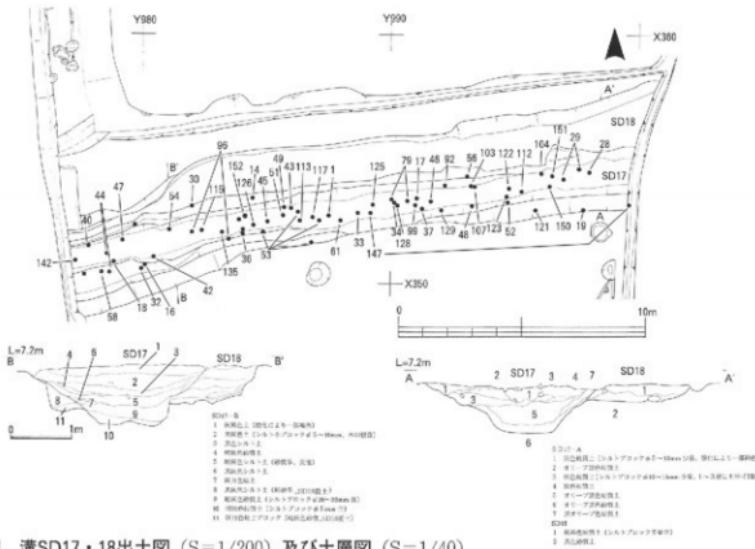


### 第35図 堀立柱建物 SB01

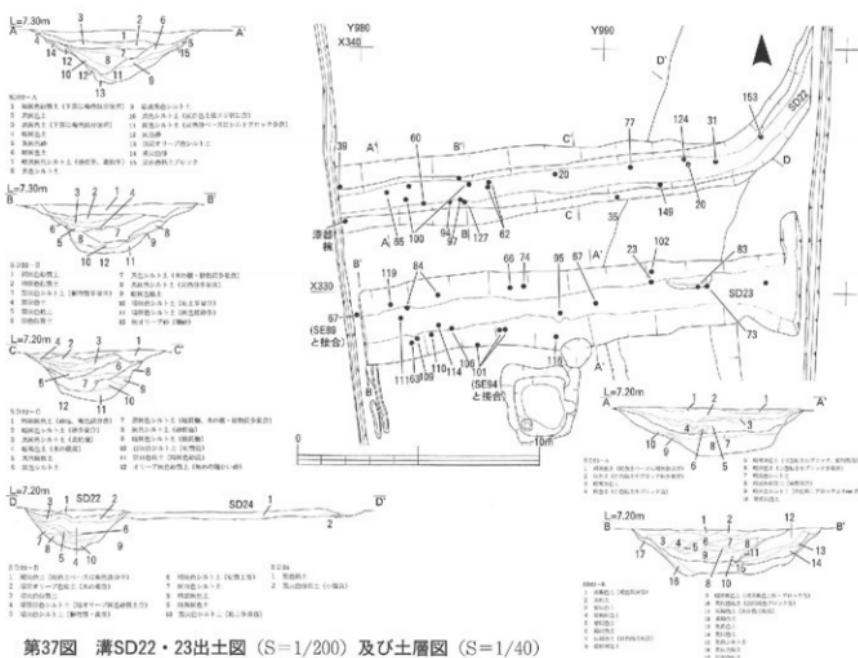
時期幅が広いのは中世期の溝S D18を切る為、そこからの混入も考えられる。17世紀中頃までに廃絶したものと見られる。

**S D 18** (第36図) 調査区北端に位置する。ほぼ東西に延びるが、調査区西より向を南西方向へ変えるようである。規模は、上幅3.0m、深さ0.32~0.55mを測る。遺物は、覆土中から須恵器、中世上部器、珠洲焼、越前焼などが出土した。16世紀後半までに廃絶したものと見られ、その後S D17が形成されたものと考えられる。

**S D 22** (第37図) 調査区中央に位置する。東西方向へ調査区を横切るが、S D 24東肩付近から北東へ向きを変える。規模は、上幅1.7~2.9m、深さ0.80mを測る。遺物は、覆土中から須恵器は、土師器、珠洲焼、中世土師器、青磁、白磁、越中瀬戸焼、砥石、漆器椀、金属製ヤスなどを検出した。遺物に混じって拳へ人頭大の石が多量に出上した。被熱石も多く見られた。南に位置するS D 23に平行して走り、同溝との間を道路 (S F 01) と想定し、S D 22はその道路側溝としての役割を掌っていたものと見られる。



第36図 潟SD17・18出土図 (S=1/200) 及び土層図 (S=1/40)



第37図 濃SD22・23出土図 (S=1/200) 及び土層図 (S=1/40)

**S D 2 3** (第37図) 調査区中央に位置する東西方向へ調査区を横切る。規模は、上幅3.1～3.2m、深さ0.65～0.8mを測る。遺物は、覆土中から須恵器、土師器、中世土師器、珠洲焼、越前焼、越中瀬戸焼、などが出土した。S D22と並走し、道路側溝の役割を担っていたものと見られる。

#### (6) 道路

**S F 0 1** (第32図) 若王子塚古墳と宮塚古墳の間を東西に並走する S D22と S D23の間を道路面と想定した。S D22と S D23の距離は心々間で5.0～5.5m、内法で2.7～3.0mを測る。若王子塚古墳の周溝 S D24を切り、残存墳丘に突き当たる手前で北側の側溝 S D22が北向している。道路の規格は大島町水上・本開発遺跡で検出された近世北陸道の造構 (S F 01) に類するものである。

### 3. 遺 物

#### (1) 古墳時代

##### 土師器 (第38図)

破片総数117点 (壺11、甕3、高杯3、甕又は壺100) が出土している。若王子塚古墳の周溝黒色覆土から出土しているものもあるが、その多くを包含層及び中～近世の造構中から検出している。いずれも細片で時期などは今後の検討を要するが、概ね古墳時代前期の遺物と考えられる。

1は甕である。口縁は有段となり、外面に7条の擬凹線文を施す。口径14.7cmを測る。2～10は壺である。2～6は口縁部で、2の外面は横位ヘラ磨きされ、さらに赤彩が施されている。口径は16.2cm。3は断面を見るとまず「く」字状に口縁部を作成し、外面頸部上端付近から口縁端部まで粘土を足し、やや厚みのある断面形三角形を呈する有段口縁に仕上げている。内面に赤彩と見られる痕跡が僅かに残る。口径15.2cm。4は有段口縁端部に向ってやや内湾して立ち上がる。やや幅広の口縁部は内面が頸部にかけてヘラ磨きされ、外面は頸部に刷毛目調整が施される。口径13.1cm。5は内面に接合痕跡が認められ、3に類似する有段口縁を形成していたことが考えられる。口径15.4cm。7は頸部で外面に縱方向の刷毛目調整が施される。外面上部と下部にそれぞれ接合痕跡が認められる。8～12は底部で、11の外面上には刷毛目が施される。12は小形の壺か甕の底部である。13～15は高杯の脚部である。

#### (2) 奈良～平安時代

##### 須恵器 (第38図)

破片総数38点 (杯蓋5、杯B 8、杯A 3、杯不明1、壺2、双耳壺1、甕13、細頸甕5) が山上している。

16は杯B蓋である。口径15.0cmを測る。17は杯Aである。18～21は杯Bである。18の内面に油煙が付着していた。22は双耳瓶、23、24は壺の底部である。8世紀後半～9世紀前半の遺物と思われる。土師器

甕の口縁端部と思われるものが1点出土している。

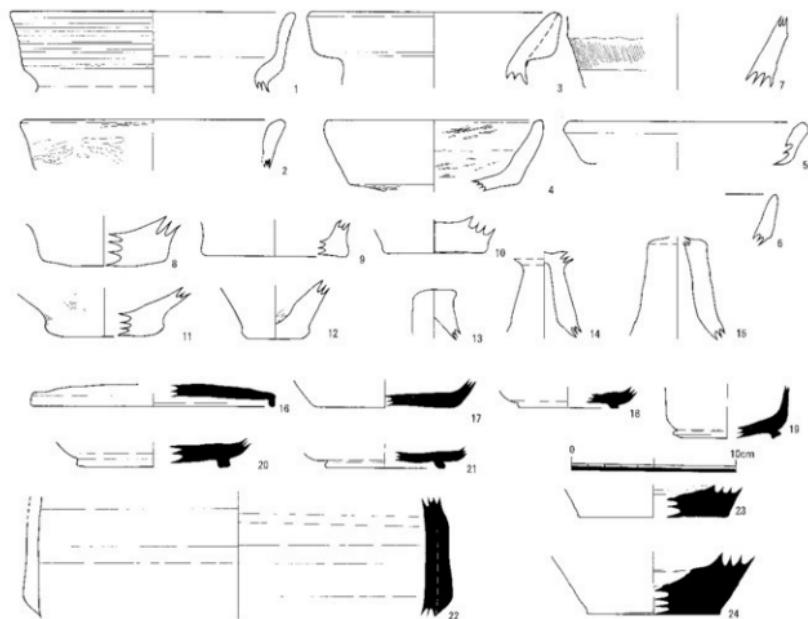
#### (3) 中・近世

##### 中世土師器 (第39図)

破片総数114点が出土している。内、油煙をとどめるものが20点みられた。

25・26は平底で、外型を用いた成形により口縁部と底部との間に段を有し、口縁部を強く撫でている。25は推定口径13.6cm、器高2.4cm。26は推定口径12.4cm、器高2.3cm。宮川編年IV期（14世紀後半～15世紀前半）に属する。

27・28は平底で、口縁部が大きく開き、端部がつまみ上げられている。27の推定口径14.0cm、器



第38図 土師器、須恵器 (SE89-5・6・11, SE93-21, SD17-1・10・14・16~19・22, SD18-15, SD22-9・13・20, SD23-23・24, 包含層 2~4・7・8)

高1.7cm。28の推定口径12.0cm、器高1.9cm。宮田編年V期に属する。

29・30は平底で、口縁部が外反し、端部がつまみあげられて、油煙が付着する。29は下半部に指押えの痕が見え、口縁部には段を有する。内面は強くナデられた痕が明瞭に残る。口縁部に油煙が付着。口径9.8cm、器高2.0cm。30は口縁が強く外反する。推定口径8.8cm、器高1.5cm。いずれも宮田編年V期に属する。

31~33は平底で、やや肥厚した口縁部をつまみ上げず、尖り気味になる。31は推定口径8.6cm、器高1.4cm、油煙が付着。32は口径10.0cm、器高2.0cm、多量の油煙が内外面に付着。いずれも宮田編年VI期。

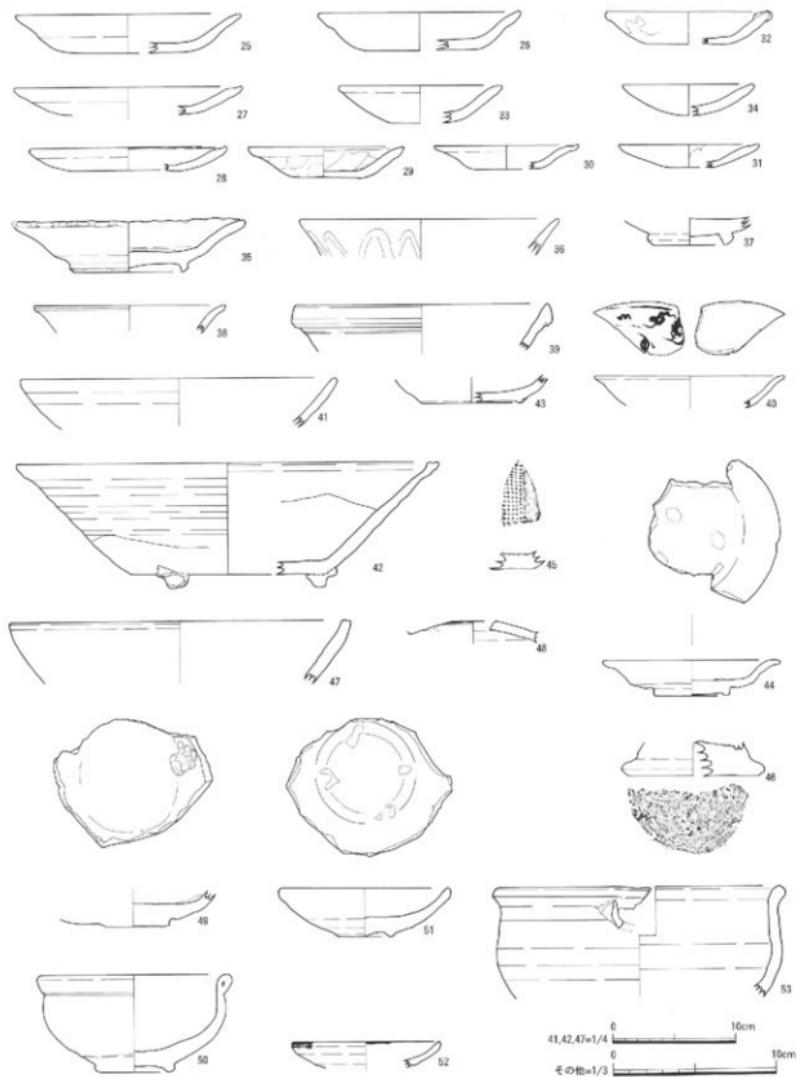
33は平底で、やや厚みがあり、口縁端部につまみ上げを意識した痕跡が見える。推定口径9.8cm、器高2.3cm。宮田編年VI期か。

34は手捏ねによる丸底の粗雑なつくりで不整形である。推定口径4.0cm、器高1.9cm。

#### 中国陶磁器（第39図）

破片総数11点（青磁8、白磁2、染付1）が出土している。

35は外反する口縁部の端部に波状に刻みを入れた青磁の稜花皿である。釉は高台外面までかかる。見込みは蛇目で釉をはぐっている。口径14.2cm、器高3.2cm。14世紀～15世紀、龍泉窯系。36は鍋を失った片切形の蓮弁文を持つ青磁碗の口縁部である。推定口径17.0cm。14世紀、龍泉窯系。37は見込みに印花文が僅かに見える碗の底部である。釉は高台内面途中までかかり、底部は無釉である。14～15世紀、龍泉窯系。38は白磁碗の口縁部である。推定口径11.6cm。39は白磁碗の口縁部で端部は外側に折返す玉縁を有する。11～12世紀。40は中国陶器である。16世紀のものと見られる。



第39図 中世土師器、青磁、白磁、中国陶器、瀬戸美濃、瓦質陶器、軟質施釉陶器、肥前  
 (SE90~41, SE91~25・26, SE92~27, SE94~38, SK80~50, SD17~28~30・32~34・37~40・43~49・51~53,  
 SD22~31, 35, 39)

### 瀬戸美濃（第39図）

破片総数7点（直線大皿、折縁大皿、腰折皿、卸皿、丸椀、花瓶各1点ずつ、丸皿2）が出土した。41は灰釉の直線大皿で、推定口径26.0cm。42は灰釉の折縁深皿である。外面体部下方から底部にかけてヘラ削りを行い、内面はナデ調整である。43は灰釉が全面施釉された丸皿で、底部にトチ痕がみられる。大窯の16世紀後半の製品と見られる。44は腰折皿で口縁が大きく外反する。外面体部下方から底部は削り調整を行う。高台の中央部を浅く削り込んでいる。見込みに3ヵ所トチ痕が残る。内面底部に口径10.8cm、器高2.2cm。窯窓期のものと見られる。

45は卸皿である。形状は不明。46は花瓶の底部である。外面に鉄釉がかかり底部は無釉薬で糸切り痕が残る。花瓶Ⅲ類、14世紀後半～15世紀前半のものである。

### 瓦質土器（第39図）

47は鉢類である。口縁部は方頭形を呈し、端部平坦面には2条の凹線を施す。推定口径28cm。

### 軟質施釉陶器（第39図）

48の小壺口縁部1点が出土している。肩部に白色の釉薬がかかる（灰釉か）。

### 肥前（第39図）

破片総数14点（陶器碗2、皿6、片口鉢1、磁器皿5）が出土した。

49・50は陶器碗である。49は内外面全面に灰釉がかかる。外面腰部に鉄釉による絵が見える。砂目積痕が内面底部に1ヵ所残る。50は内面全面と外面底部直上まで灰釉がかかる。口縁端部は外側に折返す玉縁状になる。推定口径12.0cm、器高5.95cm。51・52は灰釉の皿で、51は内面と外面体部上半まで釉がかかる。内面底部に4ヵ所胎土口積の痕跡が残る。推定口径10.2cm、器高3.0cm。52は口唇部に鉄釉を塗り、いわゆる「皮鯨手」と呼ばれるものである。推定口径20.4cm。1580～1594年頃。53は片口鉢である。内外面巻灰釉が施釉される。推定口径17.4cm。1590～1610年のものである。

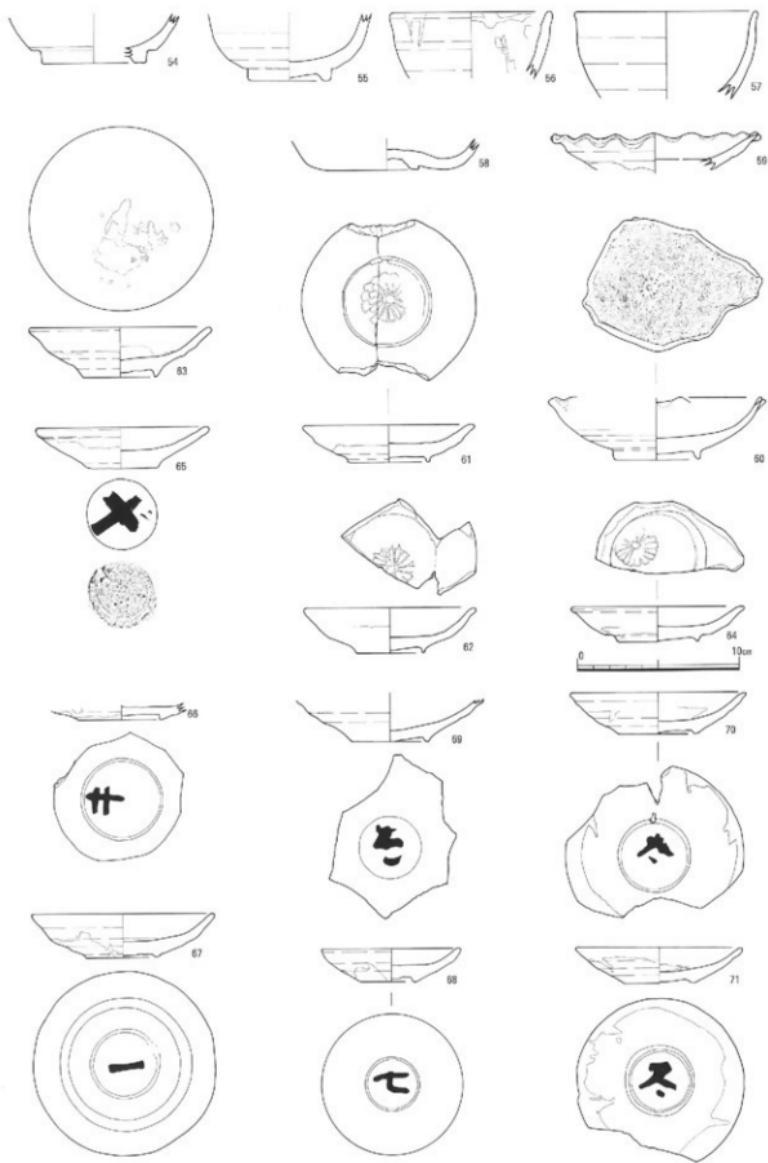
### 越中瀬戸（第40・41図）

破片総数180点（天目茶碗1、丸椀22、ひだ皿4、丸皿85、向付9、大皿4、擂鉢11、浅杯1、香炉2、小壺1、蓋1、手指1、匣鉢4）が出土した。何れも宮田編年I～II期に属する。

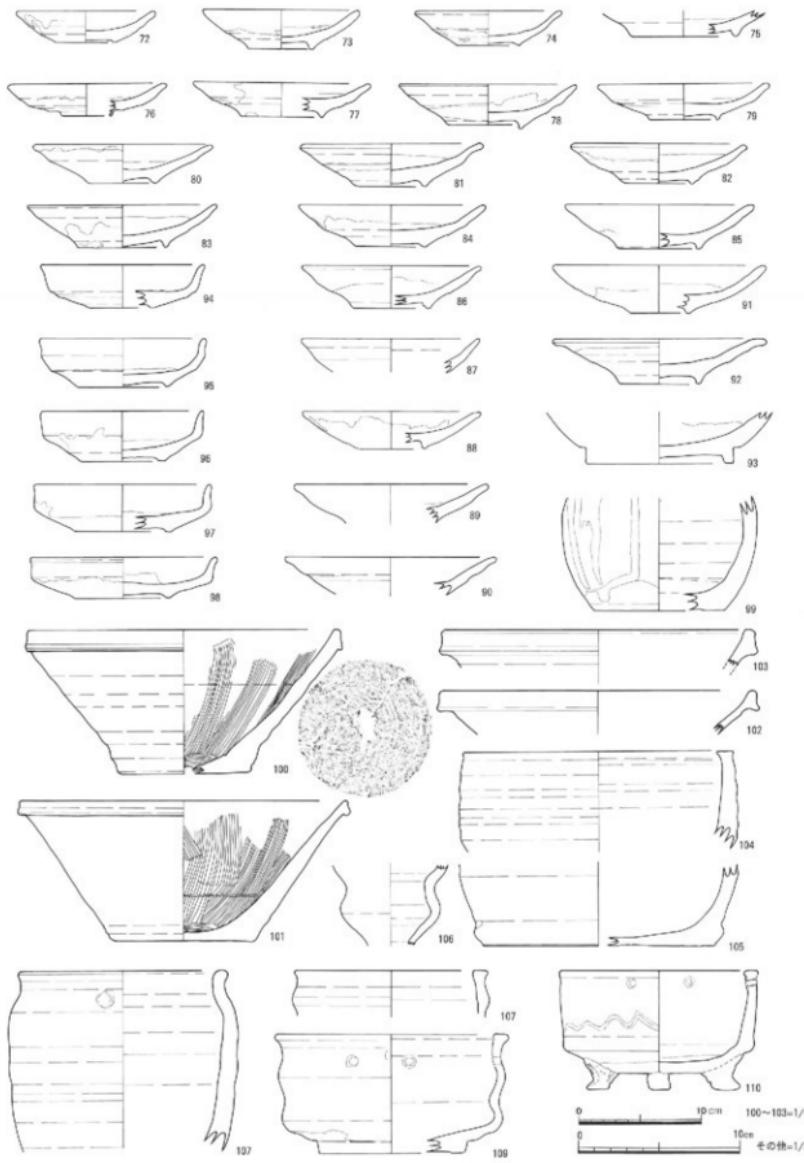
54は天目茶碗の腰部から底部である。高台は削り出しの輪高台で、高台周辺部は露胎でその他の部分に灰釉が施釉される。55～58は丸碗である。55・58の高台は削り込み高台である。何れも鉄釉が施されるが、58は鉄釉をかけた後に灰釉がかかる。56の推定口径9.8cm、57の推定口径11.2cm。

59・60はひだ皿である。59は内面底部に釉止めの段をもつ。鉄釉が施釉され内禿皿である。推定口径12.8cm。60は、内面底部に12弁菊の印花文を施す。付高台で、全面施釉後外面体部下半の釉を拭う。推定口径13.4cm、器高3.8cm。

61～92は丸皿である。口径と器高は別表のとおりである。61～62・64は内面底部に印花文を施す。何れもやや丸みを持って立ちあがり、口縁部が端反り風になる。内面に釉止めの段を持ち、灰釉の内禿皿である。63は灰釉の内禿皿である。内面底部に漆痕のような付着が認められる。65～71は底部に墨書のある皿である。65は灰釉の内禿皿の糸切り痕の残る底部に「×」あるいは「！」の墨書を施す。釉止めの段をもち、内底面に重ね焼きの痕跡が認められる。66は鉄釉の内禿皿あるいは向付の底部に「上」の墨書を施す。削り込み高台である。67は灰釉の内禿皿の底部に「一」と墨書を施す。68は全面灰釉後底部の釉を拭き取っている。削り込み高台の底部に「七」の墨書を施す。69～71は何れも灰釉の内禿皿で、内面底部に輪ドチ痕を残す。削り出し高台で、底部に「太」の墨書を施す72・74は灰釉全面施釉後、外面底部付近の釉を拭き取る。92は鉄釉全面施釉後外面底部から体部の釉を拭う。78・79・90は鉄釉の内禿皿である。73・75～77・80～86・88・89・91は灰釉の内禿皿である。80・82・8は



第40図 越中瀬戸(1) (SE89-68, SE90-55・63, SE94-59・69・70, SK79-71, SK80-57, SD17-56・58・61, SD22-60・62・65, SD23-66・67・68, 包含層-64)



第41図 越中瀬戸(2) (SE89-105、SE90-78・80~82・85・98・100・106・108、SE94-75、SK80-72・88・89、P37-90、P44-93、P45-87、P51-76)

内面に軸止めの段をもつ。76・78・79・85・92は付高台である。74・75・77・80～84・86・91は削り出し高台である。73・88は削り込み高台である。84・91の内面に輪ドチの痕跡がある。

93は大皿で鉄軸の内禿皿である。

94～98は向付である。口縁部が屈曲して立ち、口縁中央部からやや外反する形態で、削り出し高台をもつ。94～97は灰軸、98は鉄軸を施す。見込みと外面体部から底部にかけては無軸である。94は内面底部に軸止めの段がある。98の内面底部には輪ドチの痕跡が残る。

99は徳利である。内外面鉄軸を施すが底部付近は露胎である。底部は中央を浅く削り込んでやや幅広の高台を作り出している。底部径8.0cm

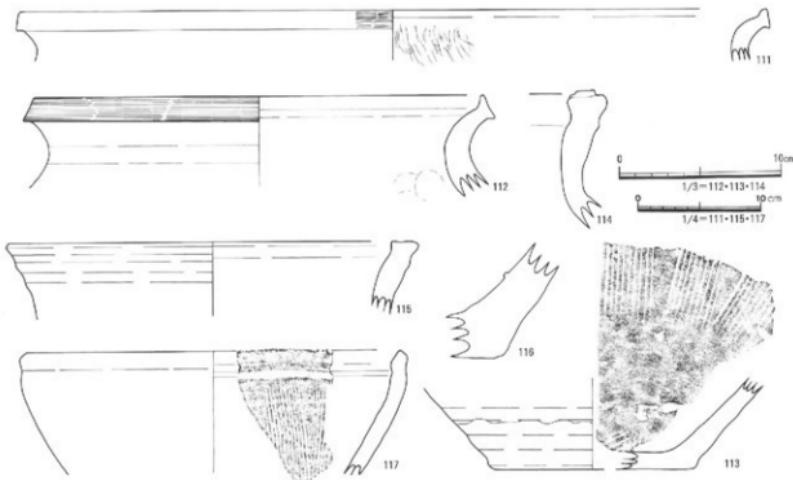
100～103は播鉢である。全面に鋸軸が施される。100～102は口縁の縁帯を外方に摘み出すもので、103は口縁の縁帯がやや短く折れるものである。100は御目が幅3.0cmの11条1単位で施される。外面底部に糸切り痕が残り、内面体部下半の位置に重ね焼きの痕跡が認められる。口径25.6cm、底部径10.8cm、器高11.8cm。101は御目が幅3.5cmの12条1単位で施される。底部に糸切り痕を残し、外面から焼成後の穿孔が行われている。口径26.6cm、底部径11.6cm、器高11.5cm。102は6条以上1単位の御目が施されている。推定口径25.4cm。103の推定口径25.0cm。

104・105は厘鉢である。体部にやや丸みを帯びて筒状に立ち上がる。内外面鋸軸がかかる。104は二次的に熱を受け口縁端部を除いて灰色に変色している。推定口径16.4cm。105は底部中央に向って器壁が薄くなる。底部に糸切り痕が見える。底部径14.2cm。

106は小壺である。体部が大きく張り出し、口縁部も大きく開く。残存部全面に鉄軸を施す。

107は水指である。肩部2ヶ所に耳の痕跡があり、双耳壺になる可能性がある。内外面鉄軸を施す。推定口径12.8cm。

108～110は筒型香炉である。109・110の体部上方には外面から直径8mmの孔があけられている。108の推定口径11.8cm。109は内面体部下半と見込みおよび外面底部は無軸。高台は削り出して作り、底部を浅く削り込んで輪高台とする。内面から口縁部にかけて黒色の油煙のような付着物が見られる。口径12.2cm、底部径8.8cm、器高7.3cm。110は3本の脚が付く形の香炉である。外面体部には波状文を廻らせる。鉄軸を施すが、見込みと底部が無軸である。口径12.2cm、器高7.3cm。



第42図 八尾、越前 (SD17-110・113・115、SD23-111・114・116)

### 八尾 (第42図)

破片総数6点(甕5、擂鉢1)が出土した。

111・112は甕Aの口縁部である。口縁部が小さく「く」の字状に外反し、複合口縁端部断面形は斜め「T」字状になる。口縁外面には数条の凹線が施される。内面はタタキ後ナデ成形が見られる。14世紀前～半ば頃か。111の推定口径60.8cm。112の推定口径27.4cm。113は擂鉢である。卸目が幅3.0cmの9条1単位で施され、内面底部にも卸目を施す。内面体部下半に黒色付着物が認められる。底部径16.0cm。

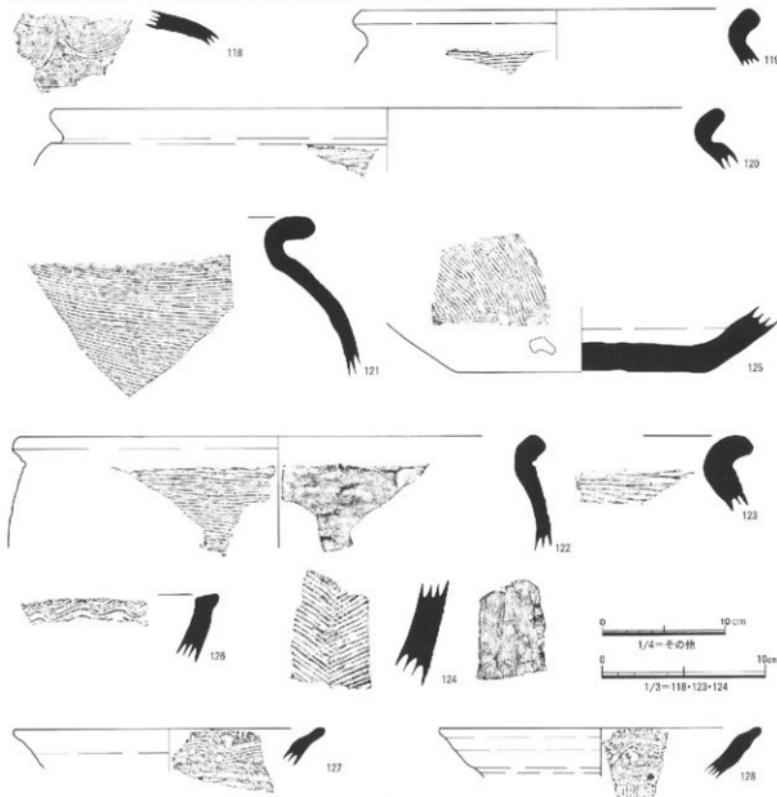
### 越前 (第42図)

破片総数22点(甕又は壺20、擂鉢2)が出土した。

114～116は甕である。表面に鬼板が塗られ桃山時代以降の製品であることが分かる。114・115は口縁端部が肥厚し、内面直下に沈線が1条めぐる。114は、口縁上部の平坦面と外面が「く」の字に折れた肩部からオリーブ黄色の釉がかかる。115は口縁部内面と外面にオリーブ黄色の釉がかかる。117は擂鉢である。卸目が幅3.5cmの12条1単位で口縁部下の沈線の下から施される。16世紀中頃。

### 珠洲 (第43図)

破片総数111点(甕又は壺98、片口鉢13)が出土した。



第43図 珠洲 (SE89-118, SE91-120, SD17-121~123, SD22-124~127, SD23-119)

118は壺の肩部に櫛目波状文を加飾している。吉岡編年IV期。

119～125は壺である。119～123は口縁部でIV～V期に比定される。119・122は短頸の壺で、方頭の「く」字口縁をもつ。吉岡編年V期。119は推定口径32.0cm。122は推定口径42.4cm。120・121・123は口縁端部が丸みを帯びた円頭となる。120の推定口径54.4cm。121は水平口縁を呈する。吉岡編年IV期。124は綾杉文叩打か見られ、吉岡編年III～IV期。

126～129は片口鉢である。何れも口縁内端面に櫛目波状文をめぐらす。吉岡編年V期。126は口縁の端面をやや肥厚させ三角頭を形成する。127・128は幅広の口縁端面が鋭い長三角形をなす。127は推定口径25.4cm。128は推定口径26.3cm。

#### 木製品（第73・74図）

129は折敷底板である。周縁の15箇所に釘孔状の小穴が貫通し、内3箇所の釘孔には木釘状のものが残る。刃物痕を顕著にとどめ、俎板として転用されていた。長さ34.1cm、厚さ0.5cm。

130は円形曲物の底板である。外周に木釘痕が見え、側板と結合されていたものと思われる。刃物痕をとどめる。長さ23.0cm、厚さ0.6mm。

131は方形の箱もしくは曲物の底板である。周縁1箇所に釘孔と思われるものがある。表裏両面に刃物痕をとどめる。厚さ0.5cm。

132は板状木製品で長方形の薄板である。一方の先端部の表面をさらに削っている。厚さ0.25cm。

133は包丁形に加工した木製品であるが、用途は不明である。柄の付け根部分を意図的に段をつけている。厚さ1.0cm、幅5.0cm。

134は用途不明品である。端部は斜めに切られており、両面には刃物痕も僅かに見える。厚さ0.6cm。

135は長方形薄板の片方の先端を尖らせた木製品である。中央部に釘孔痕がある。長さ17.0cm、幅4.3cm、厚さ0.4cm。

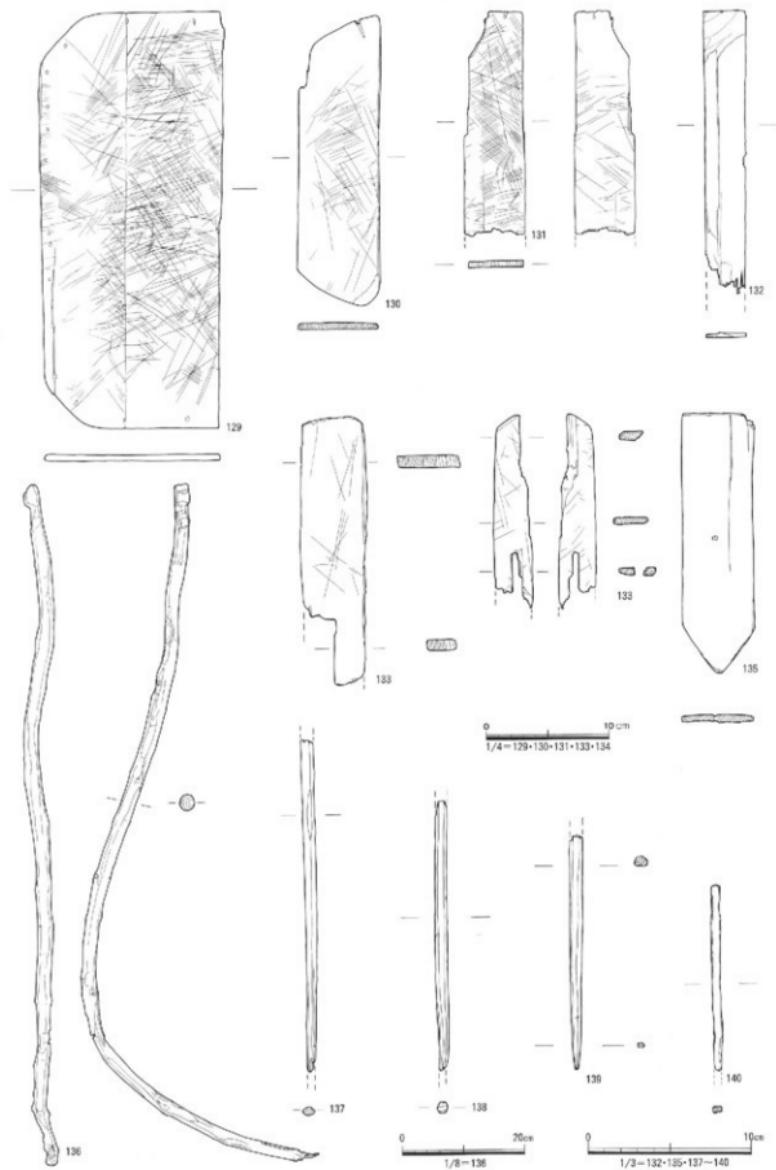
136は弧状木製品である。細い心持丸木の一部を弓状に曲げ、端部に切り込み加工を施し、表面を部分的に面取りを行っている。掏網あるいは筈などの枠の可能性がある。長さ135cm、最大径2.6cm。

137～140は箸状木製品である。139の片方の先端を細く加工した痕跡が残るもの以外は折損したものが殆どである。残存長20.3～11.4cm、厚さ0.8～0.4cm。

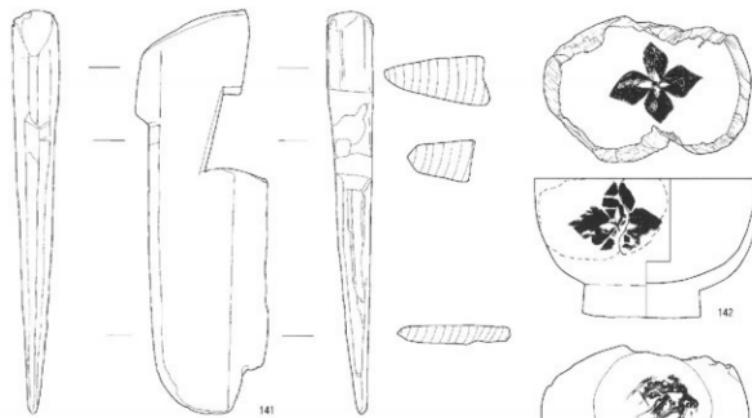
141は用途不明の加工木製品である。厚みのある側の長辺に凹状の切れ込みが見られる。その辺側が割れ口となっている。両短辺部はやや丸みを帯びている。薄くなる側の長辺の一辺を尖らせている。長さ33.0cm、最大厚4.0cm。

142は漆器椀である。底部を除いて黒漆塗りで、赤漆で4弁の「四つ菱文」あるいは「花菱文」の文様が内面見込みに1箇所、外面に3箇所以上推定4箇所施される。高台は高台脇から底部までの高さ1.6cmで、底部は削り取られた痕跡がありフラットである。ロクロの爪痕に僅かに黒漆が残る。口径14.0cm、底部径7.3cm、器高8.5cm。ブナ科ブナ属。他に漆器椀は2点出土している。その内1点は黒漆塗りで、外面に赤漆で絵が描かれる。高台の底面が削り取られている。残存高6.5cm、底部径7.1cm。トチノキ科トチノキ属トチノキ。もう1点は黒漆塗りで見込みと外面に赤漆で絵が描かれる。

143は、木摺臼の下臼である。上部の重ね合わせ面の外径47.4cm、下部の直径49.4cm、現存高31.2cmを測る。側面で3.5～4.0cm、凸面形をなす上部では最大9.4cmの厚みを保って内部が削り抜かれ、逆位で井戸（S E 90）の水溜として井戸底に埋設されていた。重ね合わせ面が磨耗していることから、実際に臼として使用された後、内部を削り抜き水溜に転用されたものである。臼の目は放射状に101条刻まれ、さらに横方向の目が同心円状に刻まれる。臼の側面全面に漁具のヤスなどを銳利な刃物で刻まれた線刻画を描いている。大・中・小のヤスが明瞭に10本描かれ、ヤスの刃先には、反しのある



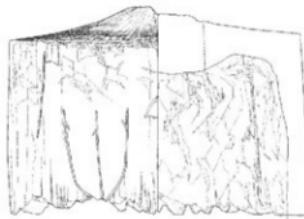
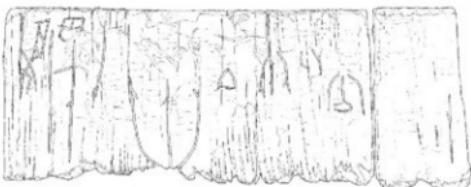
第44図 木製品(1) (SE89-130・135、SE90-137・138、SE91-140、SE94-139、P38-131、P51-134、SD17-129・135)



1/8-143 0 20cm

1/4-141 0 10cm

1/3-142 0 10cm



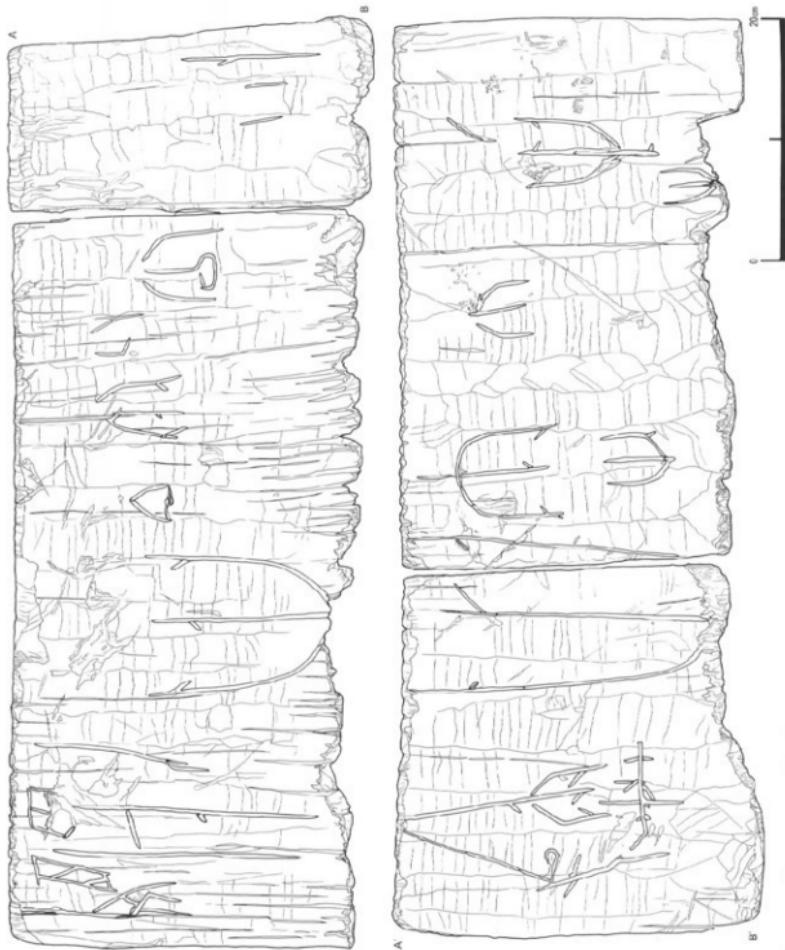
143

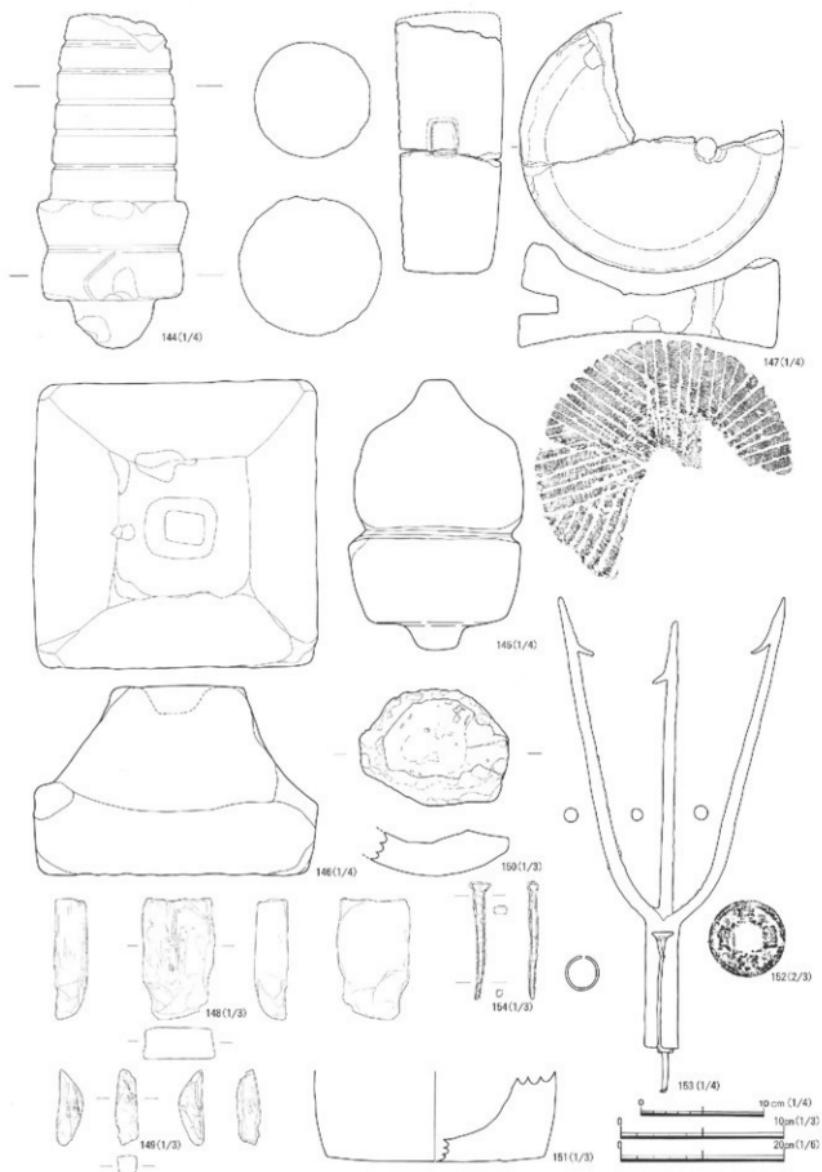


143の縦刻面基部図

第45図 木製品(2) (P31-141、SD17-142、SE90-143)

第46図 木指臼展開図 (1/4)





第47図 石製品、土製品、金属製品 (SE89-144・145・154、SE90-148、SD17-147・150～152、SD22-149・153)

ものとないものが見られる。中には、抽象的に表現された魚をヤスで突く様子を動画風に描いたものや釣針で魚を釣る様子を描いたもの、漁具と思われる線刻画がある。割り抜かれた内面に一部炭化による黒色化と見られる箇所が所在する。また、鉄分の沈着による褐色化の箇所も一部認められる。

臼の材はブナ科ブナ属。他にSE94からも断片ながら木摺臼が1点出土している。

#### 石製品（第46図）

144は宝篋印塔の相輪部である。上部の宝珠・請花・九輪の三輪分を欠く。請花は四弁認められた。ほどぞを含んだ残存長27.4cm、ほどぞ部長4.0cm。14世紀末～15世紀初め。安山岩。

145・146は五輪塔で145は空風輪である。川原石を用い製作されている。ほどぞを含めた全長は22.2cm。ほどぞを除いた長さ20.0cm、空輪部長さ12.3cm、風輪部長さ7.0cm。幅14.4cm。15世紀中頃か。146は火輪で、一辺が23cm、高さ15.5cmである。底部か水平に近い。器高が高く軒反りが大きい特徴がある。14世紀末～15世紀初め。

147は石臼の上臼である。卸目は残存箇所で5分画分を確認。9～11本の副溝が刻まれる。直径32.7cm、高さ12.8cm。2つの破片が接合したものである。

148・149は砥石である。他に2点ある。

#### 土製品（第46図）

150・151は坩堝である。150は丸底で注ぎ口の付く片口である。厚さ3.2cm。150は平底で、底部径13.2cm。

#### 金属製品（第46図）

152は錢貨で「皇宋通寶」（北宋錢、初鑄1038年）である。

153は漁具の刺突具のヤスである。三本ヤスあるいは三叉ヤスと呼ばれるもので3本の刃が付き、それぞれの刃先に反しが付き、刺した獲物を逃げないようにしたるものである。ヤス本体に柄を装着し用いたもので、なかご状の装着部位に木質部が残している。ヤスの表面に青あるいは緑灰色の付着が認められたため、当初鉄製のヤスの表面にメッキ処理などを想定していた。ところが、95頁の分析結果が示すようにこの付着物の主成分は金属遺物の材質が腐食した鉄であることが判明した。また、表面に銅や亜鉛は検出されず鉄製のヤスの表面には特別な加工処理を施していないことが判明した。長さ36.5cm、刃先幅19cm、500gと重く、短い柄の装着が想定される。154は鉄釘である。長さ7.1cm。

155は鉄滓で、櫻型滓である。100.1g。

写真のみ掲載。

#### 種子遺体

桃種（核）が250.5個体分出土した。ほかにカキノキ属（種子）14点、タケ亜属（桿）1点がある。



第46図 明暦2(1658)年 村御印の河川役のうちの、白岩川中流域各村に課せられた鮭役(1/65,000)

#### 4. 小 結

##### (1) 若王子塚古墳

12年度調査区で若王子塚古墳の周溝（S D24）を検出した。周溝内径を復原すると直径46mを測り、発掘調査で確認されている立山町稚兒塚古墳の直径46m及び直径46.5mを測ることが判明した水見市泉1号古墳と並び、県内最大級の大型円墳となる。白岩川流域には、県内の平野部で唯一の古墳群が形成される。大小河川の氾濫原である新川平野の耕地開発に貢献した有力者による築造を考えたい。

周溝の深さは、若干の後世の削平を受けてはいるものの非常に浅い。その割に現存する墳丘の墳帽から墳頂部までの比高差は約6.2mを測り、かなりの盛土量が見込まれる。現墳丘表面の盛土は非常に崩れやすい砂質土である。また、墳丘上からは珠洲焼片を数点表採することができ、五輪塔の火輪や空風輪の姿も見える。中世以降嵩上げを行い、塚としてその姿を残しているものと想定したい。遺物は土器器が出土しているものの破片資料が多く、周溝からの検出も僅かで、その多くは周辺遺構からの出土である。今後の資料の増加を待ち築造年代を推測したい。

##### (2) 中世～近世の水橋金広・中馬場遺跡

11年度調査区では、方形区画の溝に囲まれた中世居館的な遺構を検出した。12年度調査区では、その中世居館が機能を停止した後の16世紀末～17世紀前半にかけての遺構を主に検出している。2基の古墳間を東西に並走する溝状の遺構（S D22、23）が所在する。近年調査された大島町水上・本開発遺跡では、両側溝心々距離5.0～5.5m、道路幅員約2.7m、側溝深さ0.4～1.0mの近世北陸道（17世紀後半～19世紀）を検出している。本遺跡で検出された遺構もこの道路遺構の規模に準じている。

道路側溝から大型の金属製のヤスが1点出土し、この地点から約14m南西に位置する井戸（S E90）底から、側面にヤスなどの線刻画のある木摺臼の下臼を転用した水溜めが出土した。これらヤスは現在遺跡から西方300mに流れる白岩川を介した川魚漁に関わるものと考えられる。明暦2（1658）年加賀藩領内「村御印」に河川漁業を営む村々に小物成として河川役（鮭役・鰐役・鮎役など）を課している。特に鮎は10～12月が漁期で、農繁期を終えた流域村では河川漁業を行っていたものと想定される。昭和前期頃は、白岩川で鮎・鮭・鰐・鮒・鯛などの川魚や川獣などの海獣が捕獲できた。

昭和30年代頃までは、中馬場地区の白岩川流域は川魚の産卵場となるため禁漁区であった。また、現在の用排水路が整う前の水路にも川魚が遡上し、遺跡付近の水田脇の水路でも川魚を捕獲できた。水田用の水系などの水環境を利用する水田漁撈という単純な漁具を用いる漁撈もかつて行われていたようである。古くは大阪府長原遺跡の古墳～飛鳥期の水田跡からヤスが出土している例がある。道路側溝から検出された礫などは川魚の産卵場として意図的に投げ込まれたものとも推察できる。

一方で11年度調査区では16世紀後半～17世紀前半の間に集中して井戸が構築されており、常に水質の良好な水を求めていたことが想定される。井戸水は13～15度と水温が一定しており、現在でも捕獲した魚を一定期間保管しておくイクスとして利用されている。検出された井戸にもS E15のように横板の外側に日地塞ぎの薄板をあてがうようなものもあり、生活用の水を確保する為の井戸構築以外の利用方法も想定される。また、検出された溝跡には、S D02の余剰水をS D01へ流す機能をもつ溝（S D07）があり、何らかの水量調整を必要とする施設としての機能を掌っていたことが推定される。

線刻画について、漁具であるヤスなどを刻む類例を見出すことが出来なかった。一方、北海道アイヌ文化期（近世期）に属する千歳市美々8遺跡から大型魚メカジキの線刻画のある権やマレク（魚突鉤）、キテ（離頭モリ）などが出土しており、美沢川を遡るサケ・マスなどの漁獲のための漁具である。ここでは網漁の発達を見ず、本遺跡との共通を見出すことが出来る。木摺臼の線刻画には離頭モリのような三角形状の線刻やマレクに似た突鉤のような線刻が見え注目される。豊穣の象徴もある

木摺臼に描かれていることから、川魚漁の豊漁を祈願したものと推察する。近隣の清水堂地区には狩猟神でもあり転じて漁民の信仰の厚い諏訪神社が鎮座する。清水堂F遺跡の中世～近世の大溝から「口龍口（魚か）」という木簡が出土した。龍魚は中国の故事でコイを指す。かつて清水堂F遺跡から中馬場を経由し白岩川へ通じる水路があった。同じ水系での川魚漁上の証となる。また清水堂C遺跡でも200m<sup>2</sup>の地区に22基の井戸が集中して検出されており、本遺跡と同様の性格も考慮される。以上本遺跡や周辺地区で川魚漁に関わる生業活動の情況を具体的に類推する資料が得られ、白岩川流域村における近世初期生業活動の文献資料（第48図）の実際を裏付けるものとなる。

一方、出土した土器や陶磁器の割合からも集落の様相の変化を伺うことが出来る。土師器の量が12年度調査区で多くなるのは、古墳に近接するためと見られる。古代の須恵器がほぼ一定なのは当該期の土地利用が耕作地など均一な利用状況だったことを物語る。居館的な遺構を検出した11年度調査区では、中世土師器や瀬戸美濃、珠洲、越前などの中世期の遺物が多く、12年度調査区になると、越中瀬戸や肥前といった近世期に入って隆盛する陶磁器が多くなる。

これらは、中世から近世へと越中国の社会情勢が変化するのに呼応して、本遺跡の性格も中世居館的な造構群から川魚漁を兼業とする近世農村集落へと推移していることを示している。

#### 引用・参考文献（第I～III章共通、P43から続く）

富山市教育委員会1999『富山市水橋清水堂南遺跡 清水堂B遺跡』

富山市教育委員会2000『富山市水橋清水堂南遺跡』

富山大学人文学部考古学研究室1989『越中上木窯』富山大学考古学研究報告第3冊 富山大学人文学部考古学研究室 永井久美男 1996『日本出土銭鑄覽』1996年版 兵庫埋蔵鉄調查会

平川敏弘 1996『奈良時代以降の漁業』考古学による日本歴史2.7『産業Ⅰ 狩猟・漁業・農業 雄山閣 福井県立博物館』1987『九頭竜川の漁業』福井県立博物館研究報告書 第5号

藤澤良祐 1986『瀬戸大蔵免掘調査報告』『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館

藤田富士夫 1988『東大寺頃大蔵の現地比定と遺跡』『古代探求』中央公論社

船中町教育委員会 1984『富山市鳳巣中町友坂遺跡調査報告書』

舟橋村教育委員会 2001『富山県舟橋村佐生寺城跡発掘調査報告書』

北陸中世考古学研究会1999『中世北陸の石文化I』

増川宏一 1995『すごろくI』ものと人間の文化史79-1 法政大学出版局

町田章・上原真入編 1985『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所史料第27冊 奈良国立文化財研究所

水橋駅場1968『水橋町郷土史』第二巻

宮地伝三郎1960『アユの話』岩波新書

宮田進一 1988『越中瀬戸の窯資料(I)』『大境』第12号 富山考古学会

宮田進一 1997a『越中瀬戸』『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会

宮田進一 1997b『越中国における土師器の編年』『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会

宮田進一 1997c『越中瀬戸の変遷と分布』『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会

三輪茂雄 1994『増補 石臼の謎 クオリ

三輪茂雄 1999『粉と臼』大巧社

森田勉 1982『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会

山本輝雄 1986『長岡京の井戸』『長岡京古文化論叢』同朋舎出版

安室知 2001『水田漁撈の掲唱』『国立歴史民俗博物館研究報告』第87集

吉岡康輔 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

西柳翠章 1997『北陸の中世漆器』『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会

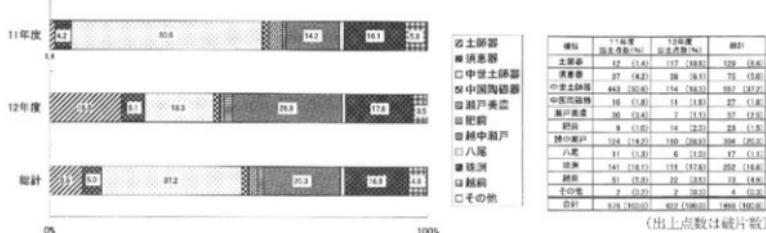


表17 水橋金広・中馬場遺跡出土土器・陶磁器の構成

## 附編・1 古代の表象としての若王子塚古墳

富山市教育委員会 埋蔵文化財センター所長 藤田 富士夫

### はじめに

8世紀の越中國新川郡の東大寺領莊園の開田地図が正倉院に3枚現存している。天平宝字3年(759)成立の大藏開田地図と丈部開田地図、神護景雲元年(767)成立の大蔵開田地図である。このうち大蔵莊と大蔵莊は同一莊園(以下、「大蔵」で表記する)を指すとされている。

大蔵莊・丈部莊について石原与作氏が、また、丈部莊について奥田淳爾兩氏が現地比定を試みている。これに対して私考では新しく、大蔵莊を「立山町浦田から稚兒塚そして舟橋村海老江から古海老江の地域に囲まれた範囲」に、丈部莊を「東は上市町中青出、西は富山市中馬場、南は上市町放土ヶ瀬、北は富山市北馬場～上市町久金の地域に囲まれた範囲」に比定した。私考による丈部莊の比定地は、「水橋金広・中馬場遺跡」の調査区に東接する(第49図)。ここでは、開田地図に記された「尾前道」を導入として、若王子塚古墳を表象とする古代道路について述べたい。

### 郷道「尾前道」

丈部開田地図には、莊域の南西部を南東～北西方向に湾曲する「尾前道」が描かれている。この道の西半では、「高市溝」が並走する。尾前道と高市溝は、ともに地図の西端へ延びている。

丈部開田地図を、明治43年(1910)測図の大日本帝國陸地測量部の「迅速図」に落としてみると、尾前道と高市溝の延長は、中馬場村を東西に走る旧道に直続する。このミチは、若王子塚古墳と宮塚古墳の南約47mに位置し直線で西に延び、白岩川を渡河し、その延長道(一部畦畔等の痕跡として残る)が三上一飯野新屋～豊田へと直走する。

一方、庄域の南東での尾前道は、南東に斜行し、上市町の尾兵衛ムラの前を通り、白岩川を渡河し、大尾川原を経て立山町の辻へと至る。辻地区には、「里正木簡」を出土した辻遺跡が営まれており、私は辻遺跡を『和名類聚抄』(天理図書館善本叢書)に見える新川郡の「川枯郷」の郷衙に擬定している。このように「尾前道」は、郷と郷を結ぶ幹線道路としての役割を担っている。

『和名類聚抄』には、新川郡の郷名が「長谷～志麻～岩勢～大前～川枯～丈部～車持～鳥取～布留～佐味」の順に記されている。郷名の順は、西から東への順だとされている。郷名順について、少なくとも「大前～川枯～丈部」の現地が見えてきた今は、より正確にはミチ順だと言えそうである。

「尾前道」は、川枯郷と丈部郷とを結んで斜行する「郷道」の可能性が高いであろう。関和彦氏は郷道を『出雲国風上記』から初めて析出し、「地域で口的に形成された道の中から、ある道を選んで、そして公的な道として利用していく」と述べている。尾前道は、郷道の具体的な事例となろう。

### 計画道路の三種

尾前道の路線は次のA～C(第49図)に3分できる。Aは、川枯郷から延びてきて四至南の莊域に入るまでの「斜方位直線道路」。Bは、莊域内を湾曲する「(仮称)蛇行道路」。Cは、莊域の西端で西方向に直線的に延びる「正方位計画道路」である。中村太一氏の研究を参考にすれば、Aの斜方位直線道路およびBの正方位計画道路は、ともに計画道路として敷設されたとしてよいだろう。

Aの「尾前道」は、郷道の性格を有する官道として利用、管理されたものと思われる。

Cは、直線道であり律令期の駅路や伝路の在り方と類似している。詳細に見ると、このミチは丈部莊域の西端から若王子塚古墳の南前面を抜け、白岩川を渡河し、水橋小路、水橋柴草、三上、飯野新屋、豊田地区へとほぼ東西方(N-82°～W)に一直線で敷設されている。真正方位では8°ずれるが、正方位計画道路と見れよう。このミチは豊田地区で分岐して、北東約1.2kmで新川郡衙関連遺

跡と推定される米田大覚遺跡に、豊田の分岐点から北西約1.6kmで駿制の「磐瀬駅」と思われる蓮町遺跡へと至る。ちなみに平安時代（9世紀後半）の人面墨書き器や人形、斎半などの祭祀遺物を出土している豊田大塚遺跡は豊田分岐点近くにある。

このような経路を有するC路は、磐瀬駅や新川郡家へと連なる重要路線である。若王子塚古墳からC路を西に約1.5kmの地点に、「小路」ムラがある。令制下の駅伝制で、北陸道は「小路」が充てられている。水橋小路の地名は、令制下の「小路」名を反映している可能性があると考えられる。さらに小路の北にある山田袋ムラは、古代のチマタに伴う「山」の残存名かもしれない。

ちなみに水橋小路地内で、C路と南北方向に走るミチ（現在の県道水橋停車場・水橋小路線）とが直角に交差する。交差点からこのミチを約3.2km（約6里）南進すると駿制の「水橋駅」に想定している水橋荒町・辻ヶ堂遺跡へと至る。

Bの蛇行道路は「人工的な非直線道路」である。自然道の利用とも見えるが、意図的な蛇行路であろう。B路は郡家への最短距離を走るC路「正方位計画道路」と郷道であるA路「斜方位直線道路」とが交わる箇所にある。この領域は、路線を越える境界にあたる。このため、意図的に蛇行道路を敷設し、悪靈の侵入をさえぎる「道切り」や悪い方向を忌む「方祟」などを意図したと思われる。

#### 郷域表象としての古墳

C路は、「磐瀬駅」の推定地へ至り、正方位の計画道路で富山平野を直線走っている。確定には発掘調査などを要するが、今日の地図知識では、それは駅路的であると思われる。小路で北折して「水橋駅」へと直行している。一方、小路から東直進すると、宮塚古墳と若王子塚古墳の前面に達し、この外れでB路の蛇行道となる。大局的にC路は、豊田から宮塚や若王子塚を目指して直線道を成している。その立地は、郡衙からの官道と郷道・丈部荘との関係においてランドマークであるかのようである。このことは、奈良時代での宮塚や若王子塚が表象する意義と深く関わっていよう。

近城の白岩川流域にはほかに清水堂大塚古墳や竹内天神堂古墳、塙越古墳、稚児塚古墳などが営まれている（第3図）。これらの古墳群は、古墳前期～中期にかけて形成されたと見られている。

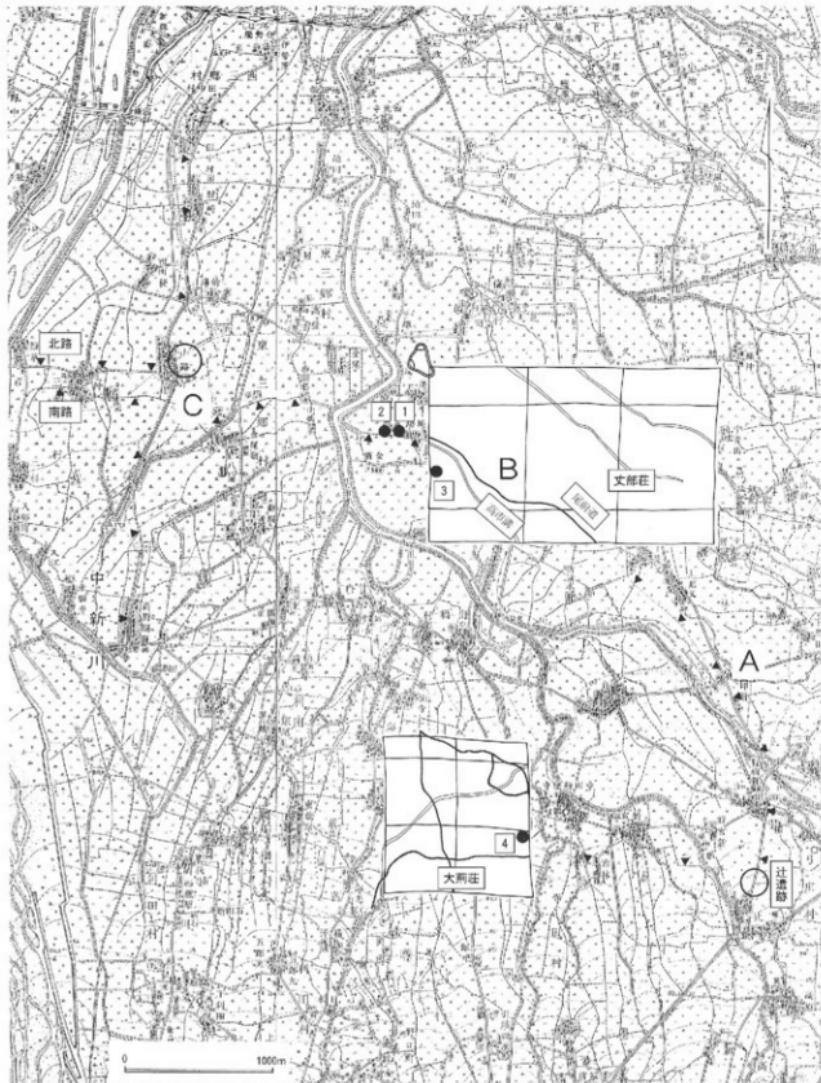
富山県域での、平野部での古墳群の築造は当地域が唯一といって良い現状にある。かかる古墳時代前半の古墳群の領域に、丈部荘や大蔵荘・大荘荘が成立しているのである。ここに、古墳群の勢力基盤を母体として荘園が設置されたのではないか、との推測が可能となる。

このことについて、山中敏史氏の郡衙遺跡の歴史的・立地状況への視角が参考となる。山中氏は、「郡衙遺跡は、各郡（評）の行政的領域にあたる地域における五～七世紀頃の古墳や集落跡、七・八世紀創建の寺院跡の分布地域との関係によって、在地有力氏族の本拠地に當まれた本拠地型郡衙遺跡と、その本拠地を離れたところに造営された非本拠地型郡衙遺跡とに大別できる」としている。これを援用すれば、新川郡の丈部・大蔵の2荘園は、「本地型荘園」に相当しよう。伝統的有力氏族の首長が、自らの本拠地に東大寺領荘園を誘導した構図が見えてくる。

この場合、いくつかの古墳が表象としての役割を果たしているようである。稚児塚古墳に北接して大蔵開田地図の「若刺道」が東西走し、大荘開田地図では「庄所」となっている。さらに人荘荘の十一条、丈部荘の十三条ラインの基準として機能した可能性がある。

清水堂大塚古墳の東側裾部では1997年の発掘調査で、現用道路と並行して波板状痕跡の道路跡が検出されている（鹿島昌也氏のご教示による）。時期は不明であるが、古くから古墳の前面に主要道路が敷設されていたことをしめす事例となる。

このように見た場合、稚児塚古墳は郷域内（大蔵郷・丈部郷）でのシンボルとして、また宮塚古墳・若王子塚古墳は郡家やそれに通じる官道筋のムラから見ての「丈部郷」のシンボルであったかのよう



第49図 若王子塚・宮塚を表象とする推定古代道路体系図（1若王子塚古墳、2宮塚古墳、3清水堂大塚古墳、4稚兒塚古墳—C路の直線道は、小路地内で（仮称）北路と南路の2本が認められる。いずれも豊田へ至る。「尾前道」のラインとは南路が対応する。両路は成立に時間差をもつと思われる。）

に見える。奈良時代に、古墳に地域象徴の認識が認められるとすれば、古墳は在地集団にとって系譜存続の正当性や土地の既得権の証しとなる。また、地域勢力の伝統性や結合の象徴ともなる。白岩川流域の各個古墳は、それぞれの成立、継承の歴史的背景に応じて地域表象としての役割を担ったものと思われる。

#### おわりに

宮塚古墳、若王子塚古墳は、東大寺領丈部荘の郷道と新川郡の政治的中枢地（郡家）とを直結する官道とが連結する接点に位置する。隣接する丈部荘の玄関口としての位置を占め、本地型荘園の表象としての意味を有していたであろう。また丈部開田地図で北進800mに該当すると思われる丈部荘の「庄所」があり、そこへのミチも両古墳を臨んで敷設されていた可能性があると思われる。古墳時代に築かれた古墳が、奈良時代勢力における地域表象として機能していた実態をここに指摘できたものと思っている。

#### （付記）

調査区では、ほぼ東西（N $84^{\circ}$  - E）に敷設された幅5.0～5.5m（心心間）の道路跡（SF01）が検出された。SF01は、宮塚の北東側をかすって西方向へと直進する可能性が高い。また、公園に見える畔道ラインから、宮塚の東辺に南から北進して、北東コーナー位置でT字に交わるミチの存在が予測できる。SF01は、調査区の東端ではカーブを描いて北進しており、若王子塚の墳丘を迂回している。調査の所見ではSF01は17世紀前半には埋没している。いつまでさかのぼるかは明らかではないが、東西の正方位道路を示すことから古相を残している可能性がある。

宮塚と若王子塚との間はクランク路線で走行している。合理的な道路敷設を考慮するなら、宮塚から直進で北行して目的地へ行くのが良い。クランク路線では築成労力も大きくなる。この理由として、複雑な水田の権利関係もあるかもしれないが、なによりも二つの塚（古墳）が地域の表象として機能していたためと推考したい。塚の間を経由することそのものに意味があったとするものである。なお、今日でも宮塚古墳には神明社が中馬場の村社として、若王子塚古墳には八幡宮が北馬場、中馬場、金広の三ヶ宮として鎮座していて、地域表象としての機能が生き続けている。

#### 註)

- 1、各氏の学説は次の書に詳しい。本郷真紹『越中国新川郡大蔵開闢地図・大前開田地図』『越中国新川郡丈部開田地図』『日本古代荘園図』東京大学出版会1996年
- 2、拙稿「東大寺領大蔵の現地比定と遺跡」『森浩一70の疑問 古代探求』中央公論社1998年
- 3、拙稿「東大寺領越中国荘園『丈部荘』の現地比定と若干の考察」『富山史壇』135・136号2001年
- 3、藤井一二「国指定史跡「じょうべのま遺跡」と寺領荘園」『日本海地域史研究』第8輯 文獻出版社1988年
- 4、関和彦「古代道を探す－『出雲国風土記』の世界－」『古代交通研究』第10号 古代交通研究会2001年
- 5、中村太一『日本古代国家と計画道路』吉川弘文館1996年
- 6、米田大覚遺跡、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、豊田大塚遺跡は次の書に総集されている。『フォーラム古代の道と駅（第1回「奈良時代の富山を探る」フォーラム資料）』富山市教育委員会2000年
- 7、山中敏史「評・郡衙の成立とその意義」『展望日本歴史5 飛鳥の朝廷』（収録）東京堂出版 2001年
- 8、鹿島昌也「201242清水堂B遺跡（第2期）」『富山県埋蔵文化財センター年報 平成9年度』富山県埋蔵文化財センター1999年で、現在道路と並行して波板状痕跡の道路跡が検出された。

## 附編・2 水橋金広・中馬場遺跡出土の双六盤について

遊戲史学会理事 増川 宏一

盤双六（絵双六と区別するために“雙六”又は“盤雙六”と記述する場合が多い）は、日本で最も古くから愛好された盤上遊戯で、12枚目が2列に並んだ盤面上を黒駒、白駒夫々15個ずつを2個の賽の目にしたがって動かす競走ゲームである。古代から文献上にみえ、中世以後、公家や僧侶の日記に数多く記され、近世初期にいたるまで最も流行した盤上遊戯である。

### 1. 絵画資料及び現物

双六盤は伝世品として奈良正倉院に5面（内1面は長期にわたって彈碁盤とみなされてきた）が存在するが、これらはいずれも板状の薄い盤面に床脚又は四足のついた型である。

この型の双六盤は中世になると、盤双六の普及に伴って消滅或いは改変されて厚板状の双六盤になり多用された。厚板状の盤は絵画資料から確認でき、例えば、12世紀の「餓鬼草紙」の出産した女性の側に描かれ、同じく「鳥獸戲画」の双六盤を扒ぐ猿、14世紀の「長谷雄卿草紙」の鬼と対局している紀長谷雄に描かれている双六盤、同じく、「東北院職人歌合」の双六盤を前にした博打及び16世紀の「うまやす睡図屏風」、同じ題名で同じ構図で描かれた17世紀初頭の作品には、武士達が盤双六に興ずる図がある。これらはいずれも厚板状の双六盤で、なかには側面に年輪が明瞭に描かれている場合も見られる。中世から近世初期にかけて、厚板状の盤が主流であったと考えられる。

### 2. 盤双六の普及

多くの文献資料に頻出しているように、盤双六は中世に広範囲に普及していた。既に12世紀前半の加賀国の「雜事条々事書」に「雙六別當」の記述がみえる（半井家本『医心方』紙背文書・大治2年・1127頃）。それ故、国衙に双六打ちを統轄する役職のあったことは明確である。加賀地方でこの時代から盤双六が普及していたことは、現在の富山市を中心とする地域でも中世以後に盤双六に興じていたと推定することは可能であろう。

### 3. 近世の双六盤

中世に多用された厚板状の双六盤が近世になると変化したことは、絵画資料や現存する双六盤から知ることができる。15世紀中頃の考証的隨筆である『透囊抄』（文安3年・1446刊）には、双六盤は高さ4寸（約12センチ）、幅8寸（約24センチ）と記されていて、厚板状の盤と考えられるが、17世紀の「誰が袖屏風」、「遊楽図屏風（別名 相応寺屏風）」通称「彦根屏風」などに描かれている双六盤は、箱型で盤面及び側面を板で張合わせた中空の盤であろう。現存する双六盤も中空箱型で、厚板状の双六盤よりかなり高くなっている。対局者の姿勢の変化か室内での敷物によるものか不明であるが、箱型になると盤面や側面が漆加工され、蒔絵で側面が装飾された双六盤も製作されるようになった。持ち運びを容易にするため、左右に把手（手掛け）を彫込むようになったのも箱型双六盤の出現から顕著になったものと推定される。

### 4. 双六盤の出土例

長期にわたって愛好された盤双六にもかかわらず、双六盤の出土品はきわめて稀である。現在まで

唯一といえる双六盤の出土品は、鎌倉時代末期とみなされる盤が鎌倉から発掘されている。これは伝北条時房・顯時邸跡からのもので、1993年4月に広島県立歴史博物館が催した「あそび遊・たわむれ戯・うたげ宴—中世生活文化のひとこま」展で展示され、多くの入場者が現物を観察することができた。板状の盤に12の長方形の枠目が明瞭で長さ36センチ、巾16センチ、厚さ1センチ弱で盤面半分の四隅及び底面半分とみなされる板の四隅に小孔があり、原形は板を張り合わせたものと推定できる。裏面に「雙六番也□□作」等の墨書きがあるが判読し難い。

14世紀に既に中空箱型の双六盤が使用されていたことは甚だ興味深いが、これは明らかに厚板状でないことは断定できる。

## 5. 今回の出土双六盤

以上の説明により、今回、水橋金広・中馬場遺跡から出土した双六盤は、中世の双六盤の形態を継承したものとして、またこれまで絵画資料でのみ表現され理解されてきた厚板型双六盤の実物が提示された事実は甚だ重要である。さらに、盤面に摩耗の跡がみられることから実際に遊戯に用いられていたことが実証され、盤上遊戯史研究上のきわめて貴重な出土品であることが確認できる。

寡聞にして他に双六盤の出土品を知らないので、おそらく厚板型双六盤の出土品では最初のものであろう。

因みに、これまで木製の遊戯盤として伝世品の碁盤・将棋盤は存在するものの、出土例は皆無といえる。木製品ゆえの腐蝕か、他に転用された可能性が大きいからであろう。その点からも厚板状の遊戯盤の出土は貴重なものである。

尚、今回出土の双六盤の裏面にある切子形の溝及び埋木は、駒を置いた時の音響効果のためか、或いは木材の割れを防止又は補修のためのものかは、今後の考証にゆだねたい。

以上のように、今回の双六盤は、初めての厚板型としてだけでなく、文献史料を補い、絵画資料の確実性を裏づけるもので、普及の実態を解明するための、きわめて貴重な出土品である。

### 清水堂南遺跡出土の将棋駒について（参考）

将棋駒であることは明白であるが、単体であり、出土状況、共伴遺物は不明であるゆえ、所属時期を判断することは困難である。

富山市を中心とする地域は、近世初期以来、京都や江戸に次ぐ将棋の盛んな地であり、宝永4年（1707）、正徳2年（1712）に強豪の名前が将棋名簿にみえ、とりわけ享保2年（1717）の全国有段者名簿には、越中富山城主松平長門守利興以下家中12名が記されている。したがって近世初期以来の将棋駒が出土する可能性はきわめて大きかったといえる。

当該将棋駒を写真から判断すると、五角形の駒形の先端部分と底辺部との厚みに大きな差の無いことは、近現代の駒とは考えられない。

駒の文字の特徴として、「銀」の字の旁の上半部が比較的大きく記されていること及び「将」の字の旁の下半分の縦軸が中央からやや右寄りになっている書体である。

近世の将棋記録及びそれ以前の駒の出土例を比較検討したところ、最も類似した書体とみなされる

のは、一乗谷遺跡の第9次発掘調査の際に出土した駒のうちの一枚の「銀将」である。一乗谷遺跡と清水堂南遺跡とはかなり距った地点であるが、戦国期から近世にかけて政治的文化的につながりの強い地域であった。将棋の駒の書き手或いは駒そのものの交流又は流通のあったことは否定できない。云うまでもなく、将棋駒の書体は多様であるが、一定の書体が継承されることはあるに有りうることは、水無瀬駒の例をみても明らかである。

以上の考察から、出土の将棋駒は断定できないが、戦国期又は近世初期の可能性が大きいといえる。尚、駒の大きさからの時代推定は困難と思える。

#### 清水堂南遺跡出土の駒石について（参考）

近世の駒石を使用する盤上遊戯として、囲碁・盤双六・十六むさし・三日並べ等があり、また、おはじき・ろくど・穴一などにも駒石を使用する場合もある。しかし、囲碁・盤双六以外の遊戯では駒石の代わりに小石、木の実、豆などの自然物によって代替が可能であり、特別に加工した駒を必要としない場合が多い。したがって、当時の最も広汎に普及していた盤上遊戯は、盤双六と囲碁であり、この両者の駒石を検討の対象にしぼってみる。

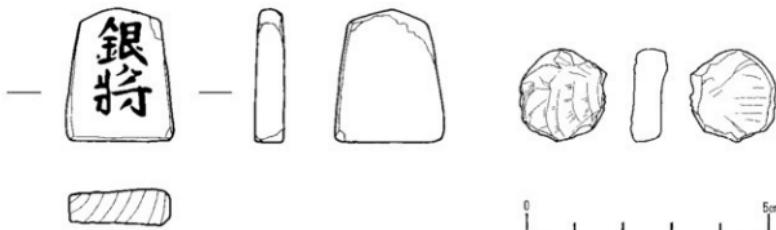
囲碁もまた多くの文献資料にみえ、中国の教養思想の影響もあって、中世末期以後より急速に普及した。盤双六は前述のように各階層にわたって愛好されたが、囲碁・盤双六とともに複数個の駒石を使用するので、単体だけでいずれの遊戯に使用されたのかの判断は困難である。

実測図及び写真から判断すると、厚みがほぼ均等になるように加工されている。碁石の場合も同様な形状の出土例もあるが、中世及び近世の出土品の碁石には、円形の周辺部が中心部よりも薄くなるように加工された場合がみられる。

出土品の駒石は大きさが直径1.9センチであり、大型の部類に属する。碁石も同程度の大きさか、より小型の出土例もあるので、寸法からいはずれの駒石か断定するのは躊躇される。

当該駒石は、中心部から周辺部へむけて同一の厚みをもつように意図して加工され、且つ大型であるゆえ、碁石よりも双六の駒の可能性が大きいといえる。

尚、駒石の出土地点は、双六盤の出土地点より約800メートル離れた地点とされているが、若干の距離があり、両者を結びつける何らかの痕跡又は関連遺構がみられないで、直接の関連を考慮することは困難と思える。



第50図 清水堂南遺跡の将棋の駒「銀将」（左）と駒右（右）

## V 自然科学的分析

### i) 水橋金広・中馬場遺跡の種実遺体分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

本遺跡は常願寺川によって形成された扇状地の扇端部分に立地し、扇状地を流れる小河川である白岩川の右岸にあたる。本遺跡は、鎌倉時代～江戸時代前期にかけての館跡を中心とする遺跡で、館の周囲に巡らされていた溝跡をはじめ、掘建柱建物跡、土坑などの遺構が検出されている。

今回は、中世後半から江戸時代初期の遺構から検出された種実遺体の種類を知り、当時の植物利用に関する考察を行う。

#### 1. 試料

試料は、P22（試料番号1）、SE02下層土（試料番号4、6）、SE08（試料番号12）の4点である。

#### 2. 分析方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特長から種類を同定する。

#### 3. 結果

結果を表1に示す。以下に検出された種類の形態的特長を示す。

##### ・モモ (*Prunus persica* Batsch) パラ科サクラン属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色で大きさは3cm程度。核の形は橢円形でやや偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

##### ・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

炭化した胚乳が検出された。大きさ4mm度。橢円形であるが、胚の痕跡部分が欠けたように見える。表面には数本の筋がみられる。

##### ・アサ (*Cannabis sativa* L.) クワ科アサ属

種子が検出された。灰褐色で橢円形。大きさは3mm程度。縦に全周する稜があり、下端におおきな「へそ」がある。表面は薄くて堅く、ややざらつく。アサ

##### ・ソバ (*Fagopyrum esculentum* Moench) タデ科ソバ属

果実が検出された。3稜があり、大きさは5mm程度。果皮は菱形に近く、これが3枚組合わさっている。果皮は薄く、やや光沢がある。

##### ・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。大きさは7～9mm程度。側面観は橢円形、上面観はやや偏平な橢円形。表面は比較的平滑。藤下（1980）による日本産の「メロン仲間」の種子同定の観点からいえば、今回出土したもの多くはマクワウリやシロウリの範疇にはいるが、一部モモルディカメロン型のものも存在する。

##### ・トウガン (*Benincasa hispida* Cogn.) ウリ科トウガン属

種子が検出された。種子は褐色。長さ1.2cm程度。長橢円形をしており、種皮は厚くやや堅い。上

表1 種実同定結果

台 段 番 号	遺構名など	日付	メロン類					
			モ モ モ モ	イ ネ ネ ネ	ア サ サ サ	ソ バ バ バ	カ メ ロ ン 型	ト ウ ガ ン 型
1 P22		H12.03.14	1	-	-	-	-	-
4 SE02	下層覆土	H11.11.23	-	70	-	-	-	-
6 SH02	下層覆土	H11.11.23	-	-	5	9	-	-
12 SE08		H11.11.25	-	-	-	4	10	1

端に明瞭なへそがある。縁に段差があり、薄くなっている。

#### 4. 考察

検出された種類は全て栽培のために渡米した種類である。これらは、当時の生活残渣の一部が遺構内に破棄されたり、あるいは遺構廃絶の際に祭祀的な目的で埋められたりしたものが残っていると思われる。いずれも全国的にも出土例が多い種類であり、周辺での栽培・利用が考えられる。当社ではこれまで北陸地方においていくつかの種実同定を行ってきたが、これらの種類はいずれも中世以降の遺跡において頻出する種類である。なお、古代の栽培植物は、その形状から現在の品種に比定するのは難しい場合が多いが、メロン類に関しては藤下(1980)による現存種との比較検討を詳細に行なった研究がある。これによれば、全国的な傾向として弥生時代～古墳時代や中・近世に関してはマクワーシロウリ型が、奈良・平安時代にはモモルディカメロン型が多いとされている。今回の成果をみても、検出個数は少ないが、マクワーシロウリ型のものが多く、調和的な傾向である。

#### 引用文献

藤下典之(1980)本邦各地の遺跡から出土したウリ科栽培植物の遺体について 一特に遺跡の編年と  
*Cucumis melo*の種子の大きさー、「考古学・美術史の自然科学的研究」, p.223-233, 日本学術振興会

図版 種実遺体



1. モモ (P22;1)
2. イネ (SE02下層覆土;4)
3. アサ (SE02下層覆土;6)
4. ソバ (SE02下層覆土;6)
5. メロン類 (モモルディカメロン型) (SE08;12)
6. メロン類 (マクワーシロウリ型) (SE08;12)
7. トウガン (SE08;12)
8. メロン類 (SE08;12)

## ii) 水橋金広・中馬場遺跡から出土した木材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

水橋金広・中馬場遺跡の井戸跡（SE90）では、井戸材の一部が生木の状態で残存していた。このうち、水溜めには木臼が転用されているのが確認された。

本報告では、木臼について放射性炭素年代測定を行い、年代を明らかにする。また、樹種同定を行い、用材選択に関する試料を得る。なお、試料は木製品であるため、年代測定は少量でも測定可能な加速器質量分析法（AMS法）で行う。

### 1. 試料

試料は、SE90の水溜めに転用されていた木臼1点である。調査時の所見では中世末～近世初頭の時代観が考えられている。

### 2. 方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

測定は、(株) 地球科学研究所を通じて、米国ペータ社で行った。

#### (2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは生物顕微鏡で観察・同定する。

### 3. 結果

放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果を表1に示す。年代測定値は、340BPで、同位体効果の補正を行った結果が310BPであった。また、樹種は落葉広葉樹のブナ属であった。主な解剖学的特徴を以下に記す。

#### ・ブナ属 (*Fagus*)      ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

遺構名	部位	樹種	年代値	$^{13}C/^{12}C$	補正年代	Code No.
SE90	水溜め（木臼転用）	ブナ属	340±40	-26.8‰	310±40	Beta-146530

1) 年代値は、1950年を基点とした年数。

2) 放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

### 4. 考察

#### (1) 年代値について

年代測定を行った木臼は、SE90の底の水溜め材に転用されていた。構築時期の詳細は不明である。年代測定値は、340BPで、同位体補正を行うと310BPであり、17世紀前半頃の年代を示す。木材は、活動の停止と共に $^{14}C$ が崩壊を始め、その後再加工された場合には、 $^{14}C$ を含む塗料などが付加されない限り、新たに $^{14}C$ が蓄積されることはない。したがって、今回の年代測定値は、井戸の水溜め材

に転用される以前の木臼製作時の年代を示している可能性がある。したがって、井戸は17世紀前半以降に構築されたと考えられる。このことは、木木臼の時代観が中世末～近世という所見とも調和的である。

一方、木臼に利用されていたブナ属は、比較的大径木が多く、樹齢も長い。樹木は、樹芯に近い年輪から活動を停止させるため、樹芯に近い部分で年代測定を行うと、実際の樹齢との差だけ誤差が生じる（東村、1990）。したがって、採取した部位によっては、実際の伐採年よりも古い年代の年輪で測定を行っている可能性がある。その場合、木臼の製作年代は17世紀前半以降になる可能性もある。

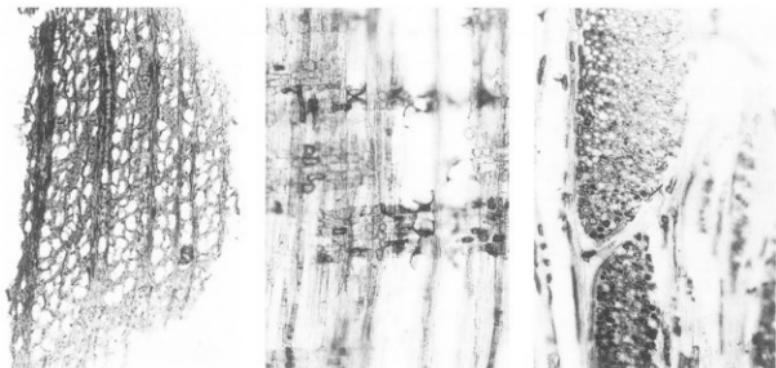
## （2）用材選択について

木臼はブナ属であった。農商務省山林局（1912）によれば、臼には水車臼、米屋臼、岡臼の3種類があり、水車臼と米屋臼にはアカマツ・クロマツ、岡臼にはケヤキが適材とされている。また、サクランなども代用されることもある（成田、1996）。遺跡出土材では、ケヤキやマツの他にもクスノキ、クリ、トチノキ、タブノキなどが出土している（島地・伊東、1988）。とくに、クスノキの臼は、西日本を中心に多数出土しており、出土材をみる限りではケヤキやマツよりも利用されている。このことから、製作時期や地域などによって、用材選択が異なっていた可能性もある。ブナ属は、同じく効物の椀などでトチノキと同じように利用されていたことを考慮すれば、臼としても利用されていた利用されていた可能性がある。今後さらに調査を行い、類例を蓄積したい。

## 引用文献

- 東村武信（1990）改訂 考古学と物理化学。212p., 学生社。  
成田壽一郎（1996）彫物・効物。189p., 理工学社。  
農商務省山林局編（1912）木材ノ工藝的利用。1308p., 大日本山林會。  
島地謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。296p., 雄山閣。

図版1 木材



1. ブナ属 (SE90 木臼転用水留材)  
a : 木口, b : 柾目, c : 板目

### iii) 富山市水橋金広・中馬場遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所 汐見 真  
京都造形芸術大学 岡田 文男

#### 1. 試料

試料は富山市水橋金広・中馬場遺跡から出土した農工具3点、容器3点、遊戯具1点、建築材4点、水溜1点、用途不明品1点の合計13点である。

#### 2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

#### 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹4種、広葉樹6種）の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

##### 1) マツ科マツ属[二葉松類] (*Pinus* sp.) (遺物No. 4) \* 遺物No.は後頁の同定表を参照

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。人型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ纺錘形のものがある。マツ属[二葉松類]はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

##### 2) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.) (遺物No. 3)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

##### 3) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.) (遺物No. 1, 2, 9頭部)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

##### 4) ヒノキ科クロベ属クロベ (*Thuja standishii* Carr.) (遺物No. 6 埋め木)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に偏って接線状に存在する。柾目では放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に2~6個ある。放射柔細胞の水平壁が接線壁と接する際に水平壁は山形に厚くなり、接線壁との間に溝のような構造(インデンチャー)ができ、よく発達しているのが認められる。板目では放射組織は全て単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。クロベは本州、四国に分布する。

##### 5) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (遺物No. 8, 9楔, 13)

環孔材である。木口では円形ないし梢円形で大体単独の大道管(～500μm)が年輪にそって幅のかなり広い孔隙部を形成している。孔隙外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2~3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は單穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木

繊維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

6) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.) (遺物No.7, 10,11)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～110 μm)がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は單穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物(チロース)が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3 mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

7) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect *Prinus* sp.)

(遺物No.9柄)

環孔材である。木口では大道管(～380 μm)が年輪界にそって1～3列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは2～3個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

8) ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.)

(遺物No.5)

環孔材である。木口では人道管(～430 μm)が年輪界にそって1～数列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、厚壁で円形の小道管が単独に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ属クヌギ節はクヌギ、アベマキがあり、本州(岩手、山形以南)、四国、九州、琉球に分布する。

9) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino) (遺物No. 6 本体)

環孔材である。木口ではおむね円形で単独の大道管(～270 μm)が1列で孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集團管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圈部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔組織)。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では人道管は單穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下の端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

10) トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) (遺物No.12)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～80 μm)が単独あるいは2～4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数とともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1～3細胞の幅で年輪の一番外側(ターミナル状)に配列する。柾目では道管は單穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって節状になっている(上

下縁辺の1～2列の柔細胞に限られる)。板目では放射組織は単列で大半が高さ～300μmとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な綺模様(リップルマーク)として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)  
 島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)  
 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所 (1999)  
 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社 (1979)  
 深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 (1997)

◆使用顕微鏡◆

Nikon  
 MICROFLEX UFX-DX Type 115

富山市水橋金広・中馬場遺跡出土木製品樹種同定表

No.	品 名		樹 種
	種類	詳細	
1	井戸側 (SE04)	隅柱	ヒノキ科アスナロ属
		横柾	ヒノキ科アスナロ属
		縦板	ヒノキ科アスナロ属
		薄板	ヒノキ科アスナロ属
		楔	ヒノキ科アスナロ属
2	井戸側 (SE15)	横板	ヒノキ科アスナロ属
		薄板	ヒノキ科アスナロ属
3	曲物 (SE32)		ヒノキ科ヒノキ属
4	不明木製品(箱板) (SX04)		マツ科マツ属[ニ葉松類]
5	横柾 (SE22)		ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
6	双六 (SX02)	本体	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
		埋め木	ヒノキ科クロベ属クロベ
7	木壠臼 (SK51)		ブナ科ブナ属
8	柱根 (SK51)		ブナ科クリ属クリ
9	横柾? (SX02)	柄	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
		頭部	ヒノキ科アスナロ属
		楔	ブナ科クリ属クリ
10	水溜(木壠臼転用) (SE90)		ブナ科ブナ属
11	漆椀(SD17)		ブナ科ブナ属
12	漆椀(SD22)		トチノキ科トチノキ属トチノキ
13	柱根(P45)		ブナ科クリ属クリ

#### iv) 富山市水橋金広・中馬場遺跡出土臼転用水溜めに残る樹皮について

㈱吉田生物研究所

富山市水橋金広・中馬場遺跡から出土した臼転用の水溜めには、厚さ5mmほどのこげ茶色の樹皮が残っていた。

この資料は別稿の樹種同定報告書の通り、ブナ科ブナ属の材を、堅木取りした芯持ちの削りぬき材の臼を転用した水溜めで、縦方向に割れている。その中の一箇所の破断部に、器壁全面に渡って厚み約5mmでこげ茶色の樹皮が残っている。この樹皮は、破断部分をはさむ両木部に同様に見られた。その表面は平坦ではなく、粗い状態である。

上記の資料から小破片を採取し、樹脂包埋法により薄片プレパラートを作製して光学顕微鏡で観察した。

木口(横断面)、柾目面(放射断面)、板目面(接線断面)を観察したわけではない。しかし、木材の表皮、周皮、皮層、二次師部の細胞組織が確認できた。これらは木材の樹皮の組織である。

正常な成長では、木は表皮近くの形成層で新しい細胞が作られ、外側へと肥大成長していく。まれに種々の外傷を受けて傷害組織が形成されると、その部分は肥大成長せず、中に樹皮が巻き込まれて材中にみられる場合がある。これは入皮と呼ばれる状況である。

#### [参考文献]

島地 謙、須藤彰司、原田 浩(1976年)『木材の組織』



写真1 木臼残る樹皮の断面写真 ( $\times 40$ )

## v) 水橋金広・中馬場遺跡出土金属「ヤス」鉄製品に付属した木材による年代測定

武藏野文化財修復研究所 小泉 好延

本遺跡より出土した金属性遺物に付属する木材の年代を測定した。測定分析と曆年代解析の結果、木材の曆年代は1450～1630年となった。この結果によれば、本遺物は1630年頃以前に使用されていたこと、1450年ごろ以降に使用されていたことが明らかとなった。

### 1. 分析資料の木材

分析資料の木材が付属していた金属遺物は、形状と材質分析から推定して大型の鉄製「やす」と思われる。遺物には柄と思われる木材が残存していた。金属遺物が使用されていた年代を推定するために、残存していた木材の年代を炭素-14測定から求めることとした。なお、金属遺物は材質分析から鉄製であることが明らかである。木製の柄が使用にともない破損し、更新されることも考えられるが、遺物本体を使用していた年代と木材の年代には大きな差異はないと思われる。

木材の年代は使用された木材の樹齢を考慮すると、使用あるいは廃棄年代より古い年代となる。しかし、使用目的から考えると、大型建造物に使われるような100年を超える樹齢を考慮することは適切ではない。樹齢を30年程度、芯材と偏材の中間が使用されてと仮定すれば、本遺物が使用されていた年代と木材の年代差は15年程度と思われる。

### 2. 分析方法と施設、および結果

測定資料内容 : 「水橋金広遺跡出土の金属遺物に付属した木製柄の残存部」

方法 : AMS法によるC14年代測定

施設 : 株式会社「加速器分析研究所」

結果 : Libby age:370±40yrBP\*

\* Libby ageはC-14年代と呼ばれる。Libby age 370±40yrBPのBPは1950年を基準として過去にさかのぼった数値を示すこと意味し、Radio-carbonによる測定から得られた値を示したものである。したがって、ここで得られた値は、1950年の370年前、つまり1580年がC-14年代の測定結果である。測定誤差として±40年であることを示している。

### 3. 木材の年代分析

従来、上記したC-14年代はそのまま曆年代として考古学領域で用いられていたが、現在の国際的な評価では、曆年代への補正が行われている。その理由は、C-14を生成する宇宙線の地球圈への入射量の年変動、それに伴う大気中のC-14濃度変動などの影響により、C-14年代を曆年代に用いるにはこの変動を考慮した補正が必要である。1970年代から蓄積されデータに基づき、信頼度の高い校正データが「国際基準」として作成されている。1986年から、高精度のC-14年代と曆年代の校正曲線から、曆年を決定することが可能となった。つまり、C-14の測定から信頼度の高い曆年代が得られることとなった。現在、1998年校正データが公表され、このデータに基づき、C-14年代から曆年代への補正が行われている。報告者も同データを使い、C-14年代の測定結果から曆年代への補正を行った。

### 4. 曆年代の解析と結果

C-14年代から曆年代補正計算はOxCal Program, Calibration Data Files IntCal 98 and Marine 98 data filesを用いた。詳細を参考資料に示す。

#### 曆年代の結果

信頼度68.2パーセント、 1450～1630年 (cal 1450～1630AD)

信頼度95.4パーセント、 1440～1640年 (cal 1440～1640AD)

## 5.まとめ

本遺跡の金属遺物に付属した木製の柄と考えられる木材の暦年代は、加速器によるAMS法から得られたC-14年代に基づき、暦年代への補正計算を行った結果、信頼度68.2パーセントで、1450年～1630年の木材と結論された。

本金属遺物は形状と材質分析から鉄製「ヤス」と推定された。柄部分の木材の暦年代と金属遺物が使用されていた年代の差異は木材の樹齢を考慮すればよいだろう。使用目的を考慮すれば、樹齢を30年と仮定しても、上記の年代を新しい側に最大30年、平均15年を考慮すれば十分であろう。したがって、本遺物が使用されていた年代は上記の分析結果を大きく変える必要はないだろう。

### 参考文献

1. 小林 紘一 「年代測定の新展開」 第二回考古科学シンポジウム 2000、p33-40、東京大学原子力研究総合センター、総合研究博物館・埋蔵文化財調査室共催
2. 小林 紘一 「加速器質量分析法…考古学から宇宙科学まで…」 Butsuri(日本物理学会誌) Vol.12 (1998) p903-910
3. 小林 紘一、藤本文範、小牧研一郎共編「イオンビームによる物質分析、物質改質」、内田老鶴 2000 p145-168、「AMS法」関係文献
4. 小林 紘一、小林 千明、牧田 眞、和知 秀明「加速器分析研究所 (IAA) の14C-AMS装置の現状」 第14回「タンデム加速器及びその周辺技術の研究会」講演報告書集 2001、土岐市、核燃料サイクル開発機構 東濃地科学センター 印刷中
5. 馬渕久大、富永健 偏 「考古学と化学をむすぶ」 東京大学出版、第3章—考古学におけるC-14年代測定—今村峯雄著、(2000) p55-82

### vi) 水橋金広・中馬場遺跡出土金属・「ヤス」鉄製の材質分析

武藏野文化財修復研究所 小泉 好延

鉄製の「ヤス」の表面の緑色部分の材質分析を行った。本資料は鉄製品の表面部に認められた緑灰色の材質を確認するために分析を行ったものである。

#### 1. 分析試料の前処理と分析方法

表面の緑灰色を採取し、メノウ乳鉢で均質化した後、PIXE法により組成分析を行った。PIXE法(荷電粒子励起X線分析、Particle Induced X-ray Emission)は、加速器によって陽子や $\alpha$ 粒子を高エネルギーに加速し、分析試料に照射し、試料の含有元素から発生する特性X線のエネルギースペクトルを半導体型放射線検出器で測定する分析方法である。

加速器による照射エネルギーと粒子は、3MeVのプロトン、分析面積となる照射ビーム径は0.5mm、照射電流値は0.5～1ナノアンペア (nA)、照射電荷量200～1000ナノクーロン (nC) である。X線検出は高純度Si半導体検出器とCZT半導体検出器の両者を同時に使用し、特性X線のエネルギースペクトル(PIXEスペクトル) 解析から定性を行った。

#### 2. 分析結果と考察

分析の結果得られたPIXEスペクトルを図に示す。a図は全検出元素を表示するために縦軸を指数で表示した。a,b図で示したように、PIXEスペクトルでは鉄(Fe)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、珪素(Si)、アルミニウム(Al)、磷(P) ピークが検出された。なお、銅(Cu)、亜鉛(Zn)などの銅、あるいは黄銅の成分は認められない。

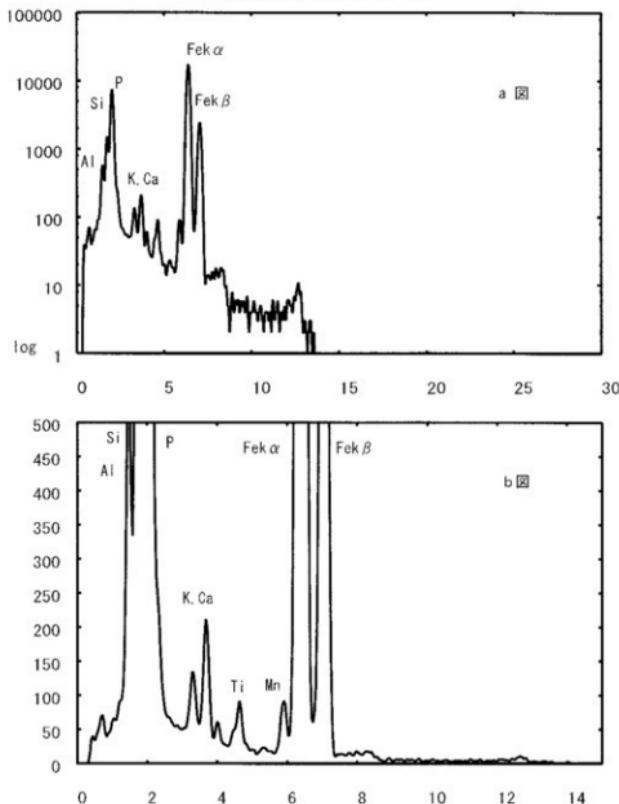
この結果、表面の緑灰色部の主成分は金属遺物の材質が腐食した鉄である。また、珪素、アルミニウムが検出され、微量のカルシウム、カリ、チタンが確認されたことから、埋蔵環境の粘土が固着したものである。また、矽が比較的高濃度であることは、試料の埋蔵環境が沼底部であったことによるものであろう。銅、亜鉛が検出されないことから、鉄製の「ヤス」表面部には特別な加工処理が行われていない。

#### PIXEスペクトル図挿入

#### PIXE分析法に関する文献

1. K.Kobayashi, Y.Koizumi, C.Nakano, S.Hatori, Y.Sunohara Nuclear Instruments and Method B 「Dual detector system for PIXE measurement covering a wide range」 1999 144-149p PIXE分析法に関する文献
2. 合志陽一・佐藤公隆編 「エネルギー分散型X線分析」 日本分光学会 測定シリーズ18

水橋金広・中馬場遺跡出土金属（ヤス）鉄製品  
表面緑色部のPIXEスペクトル



## vii) 水橋金広・中馬場遺跡出土金属製品「鉄獎杯」の金属組織

和光金属技術研究所 伊藤 博之

鉄獎杯資料の保存修復の際、剥落した4×1.7mm、薄く硬い金属の組織を分析した。資料は全面金色を呈し、表面には乾いた薄褐色の粘土が一部固着していた。しかし錫びの付着は見られなかった。

### 金属組織観察

資料を半分の2×1.7mmに切断し、樹脂中に埋め込み、顕微鏡による金属断面観察試料とした。

#### 1. 顕微鏡用試料製作法

- 冷間埋込樹脂No105(丸木ストルアス製)に縦に埋め込み固化させた。
- 炭化タングステンの耐水研磨紙を用い水を掛けながら荒いものから暫時細かい物へと研磨した。  
使用耐水研磨紙: #150, #240, #320, #400, #600, #800, #1000, #1200, #1500, #2000,
- 研磨用ダイヤモンドベーストを希釈液SPR-W(旭ダイヤモンド工業製)を用いて研磨した。  
使用ダイヤモンドベースト: 6 $\mu\text{m}$ , 3 $\mu\text{m}$ , 1 $\mu\text{m}$ , 0.25 $\mu\text{m}$ ,
- 研磨された金属表面を腐食液でエッチングした。腐食液: FeCl<sub>3</sub> 5g, HCl 10cc, H<sub>2</sub>O 100cc

#### 2. 顕微鏡観察

金属組織のマクロ観察にはソニー製3CCDビデオ顕微鏡、ミクロ観察にはニコン製光学金属顕微鏡を用いた。金属組織のマクロ写真を写真(1)、ミクロ組織を写真(2)とする。

##### 写真(1)

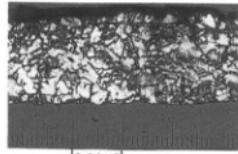
- ビデオ顕微鏡により50倍に拡大した金属断面の写真。(の50%縮小)
- 金属試料は内部まで金色であった。
- 上下の表面近傍は薄い褐色を呈していた。
- 写真右側1/4の所に縦に切断面が観察された。

特に内部まで褐色を呈していた。



##### 写真(2)

- 光学顕微鏡により200倍に拡大した金属組織である。(50%縮小)
- 金属層の厚さは0.19mmであった。
- 金属組織は大小の結晶より成り立っていた。
- 結晶の代表的大きさは40×25 $\mu\text{m}$ であった。
- 多くの加工双晶が観察された。



### 結論

この試料金属は全面黄色を呈し、ミクロ組織には銅合金特有の加工双晶が観察された。加工双晶が認められたことから、本資料は銅合金を鍛造加工が行われたものである。別稿の材質分析から銅-亜鉛合金との結果が得られている。また、写真(1)で観察された上下の金属表面近傍の褐色部は腐食により亜鉛分の減少した部分であろう。右側1/4部分の縦の切断面は鍛付けによる接合部と考えられる。したがって、この遺物は銅-亜鉛合金(黄銅、真鍮)の薄板材を用い、鍛造加と鍛付けにより製作したものである。

注:「日本出土の銅合金」伊藤博之 第1回 考古科学シンポジウム 要旨集 2000年 「日本における真鍮の歴史」伊藤博之、小泉好延、原祐一 1999.12.

### viii) 若王子塚古墳における地中レーダ探査

富山大学大学院人文科学研究科 2年 岸田 徹  
富山大学理学部地球科学科 酒井 英男

#### 1. 探査の概要

発掘調査により一部が確認された周溝の周辺における構築状況を調べる目的で、非破壊の地中レーダ探査法を2001年10月30日と11月1日に実施した。

探査には米国G.S.S.I.社製SIR-2装置を使用し、アンテナ周波数は400MHzに設定した。結果の解析は、断面図と、一定深度でのレーダ波の反射パターンを平面図に直すTime Slice法にて行った。探査地域は、図2に示す墳丘の北側（南北16m、東西36m）と東側（南北40m、東西18m）に設定し、探査の原点を南西隅に置き、北と東方向をX、Y軸の正の方向とした。探査測線は、北側地域では南北から北方向に1m間隔で、東側地域では西から東方向に0.5m間隔で設定した。

#### 2. 探査結果

図1は北側地域での結果の一例を示している。測線に沿った地下断面図において、黒い部分は電波応答が強かった領域である。測線の1-6mの範囲の地下に周溝を示す落ち込みが見られる。

図2は、断面図で周溝を確認した深度で作成したTime Slice図で、ここでは白色が強い応答領域を示す。北側地域の南に西側の発掘で確認された周溝と連続する円弧を描く周溝の応答がある。周溝の幅は約5mで北側地域の東南隅をかすめるように続いている。東側地域では西端で周溝の一部が捉えられており、円弧を描いて探査地域の南西隅から調査地域の外側へ伸びていると考えられる。

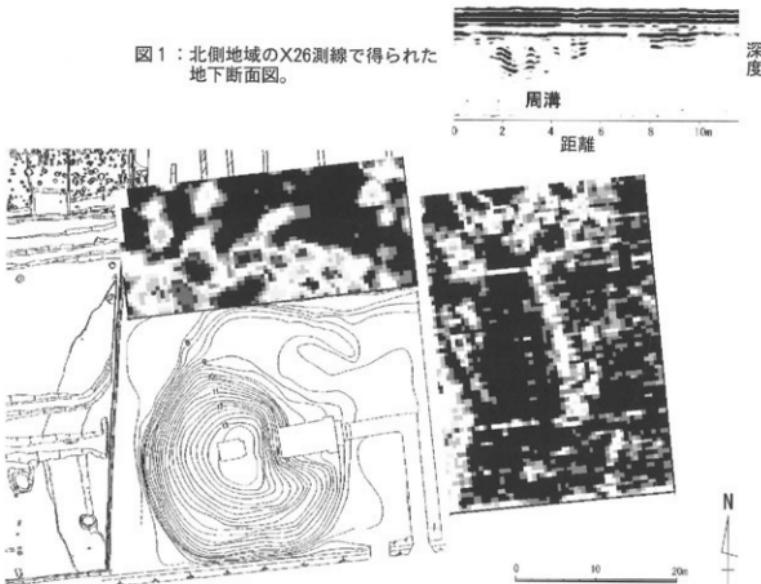


図2：周溝を確認した深度(15-25ns)で作成した墳丘の北側と南側でのtime slice図。



平成11年度調査区全景